



舞宴

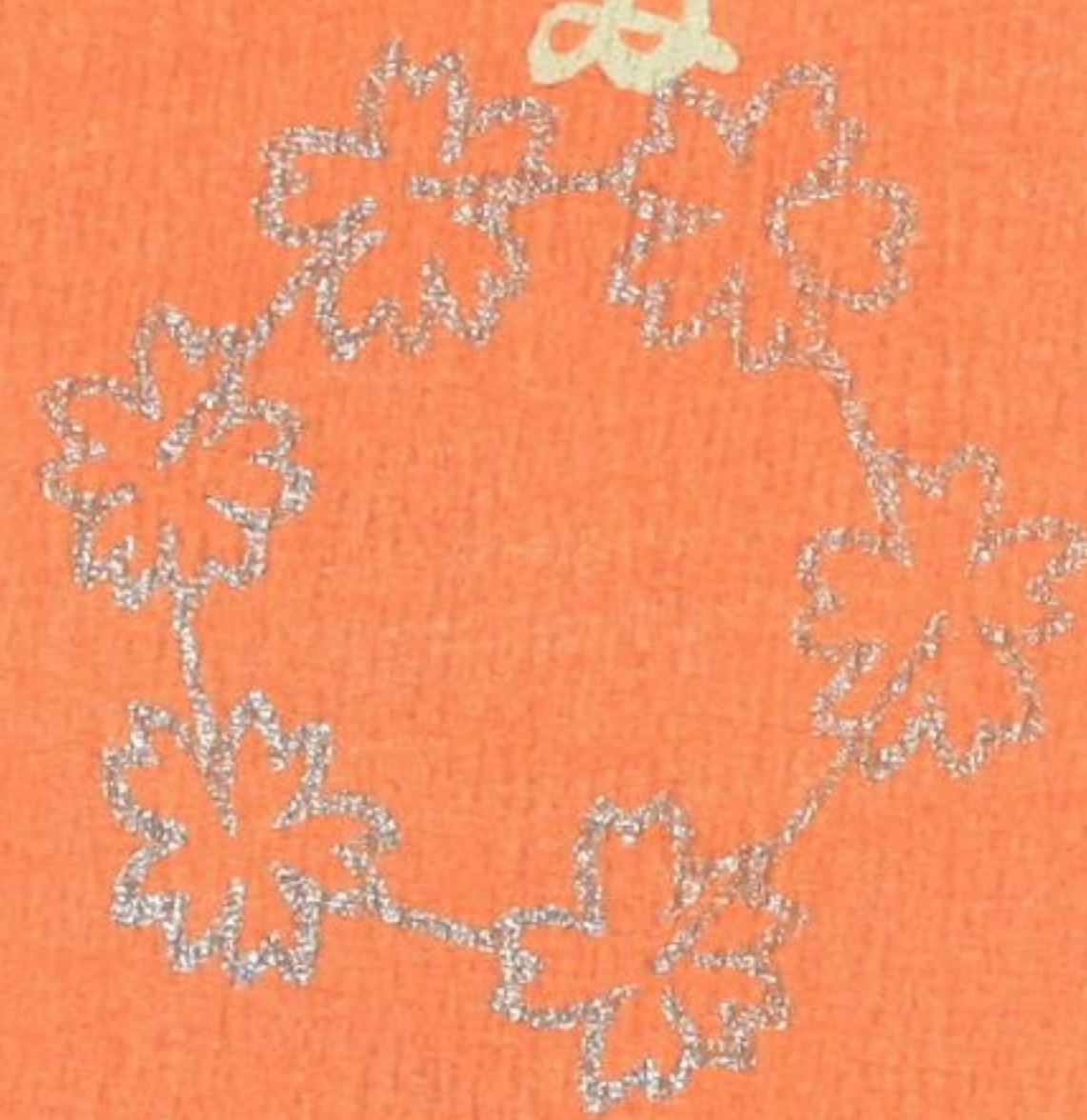
1
五





まゝ

尖かたきぬ



ちかすは 國
よしゝの勇作
尖かた乾考

祇園
画集

舞妓
姿

中島
忠房

阿蘭陀書房
發行

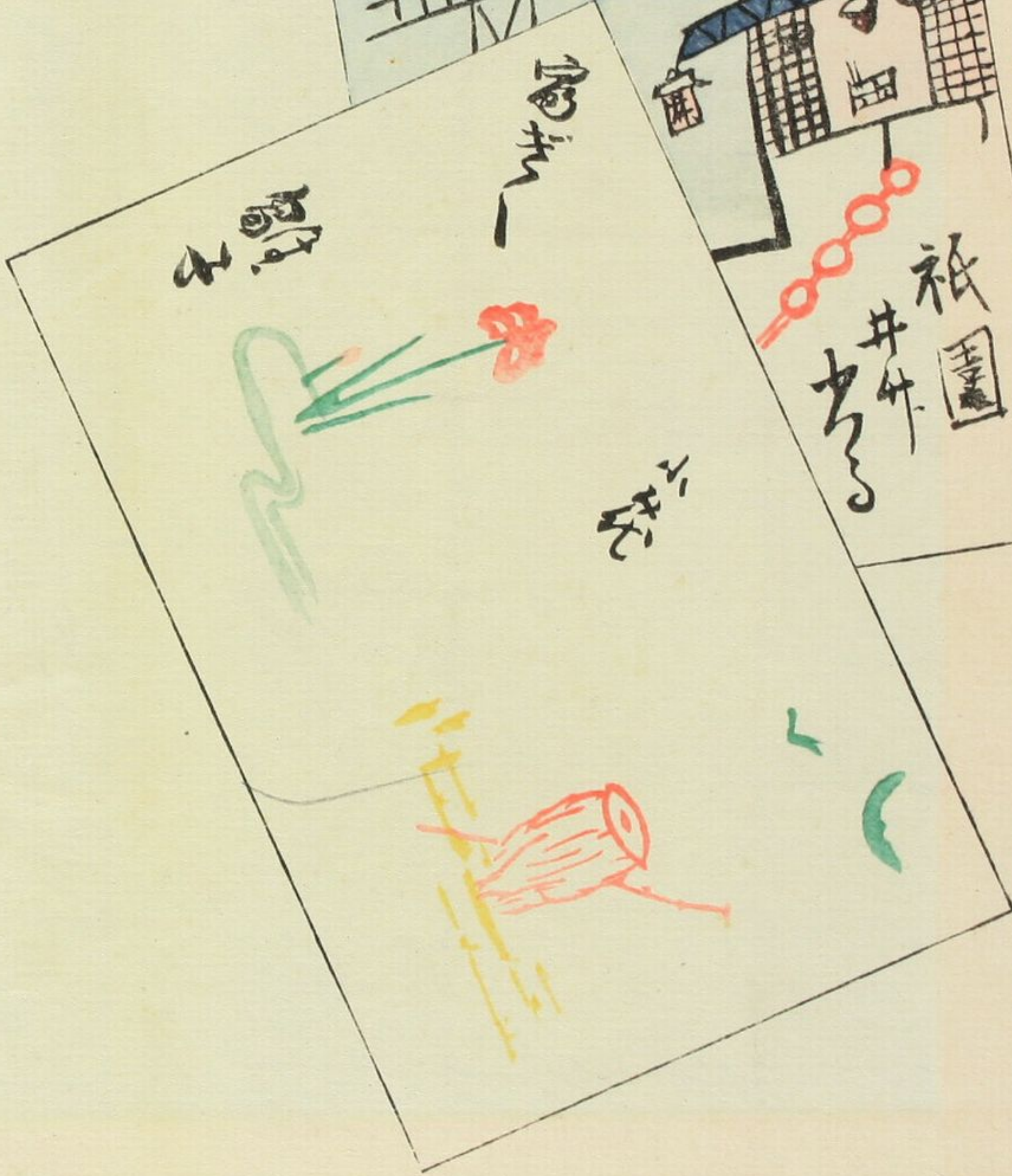
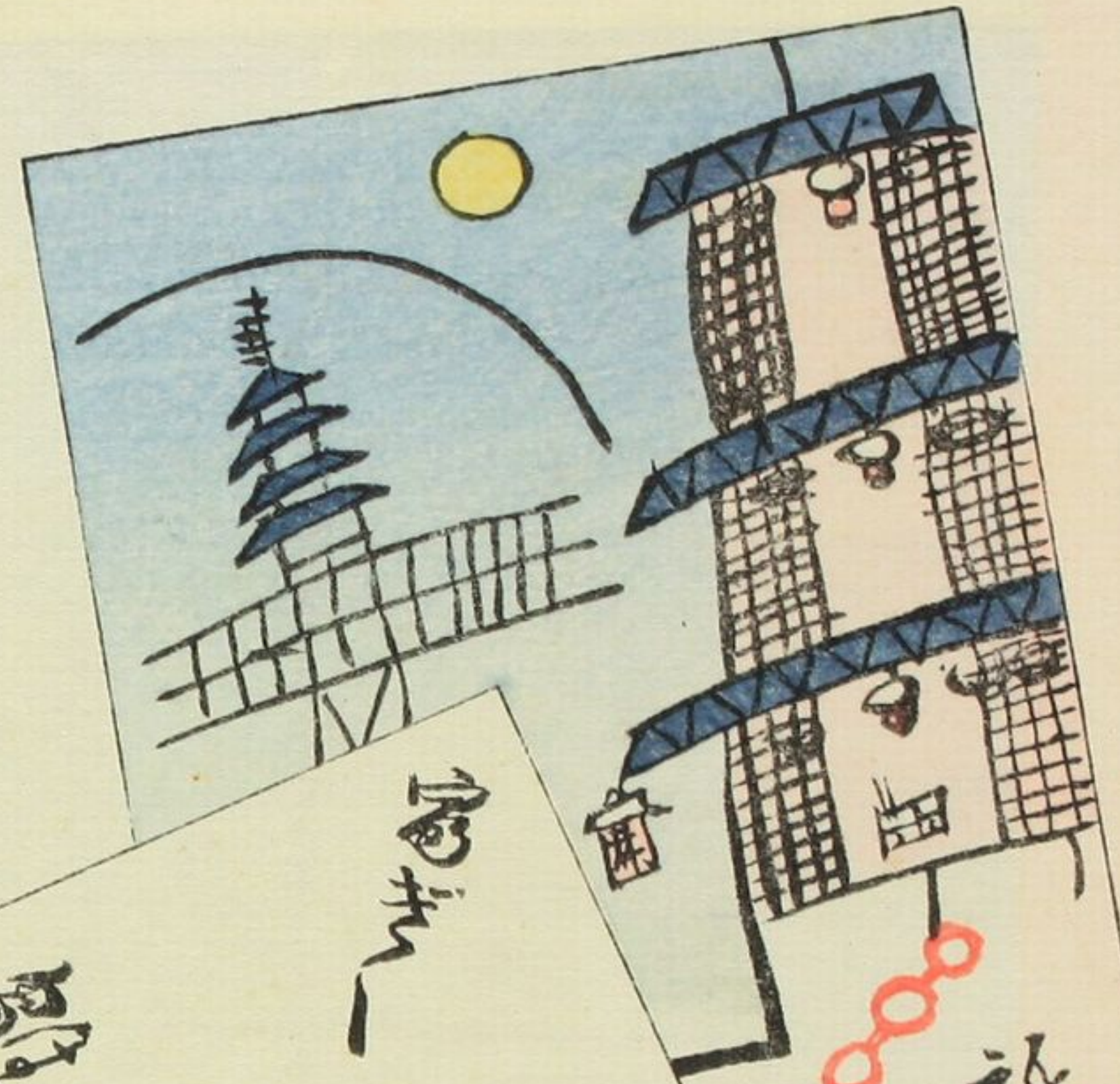


井ノ口
神社

花
札
全
部
上
に
貼
り
付
け
て
お
く
た
い



お
め



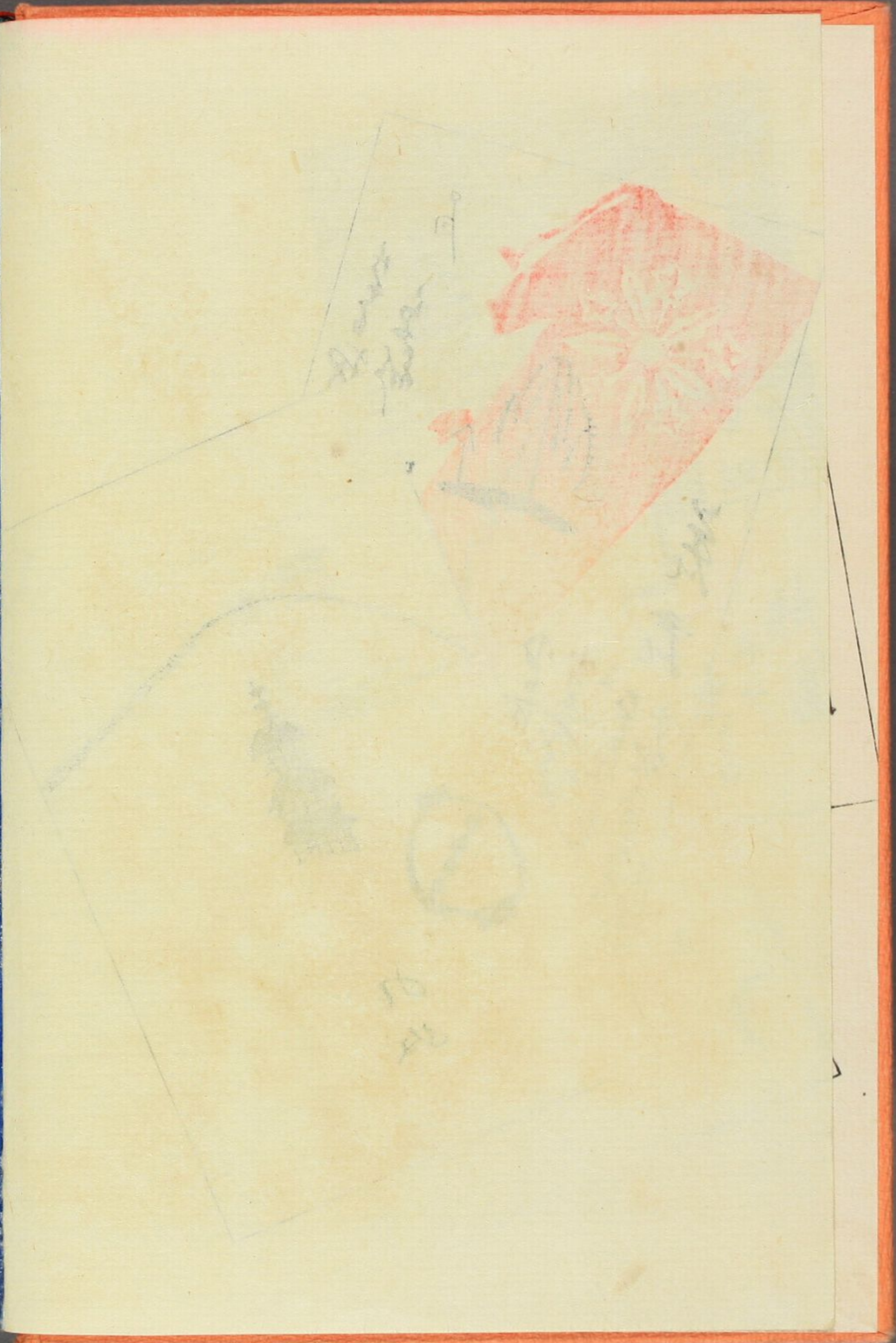
井ノ口
神社

お
め

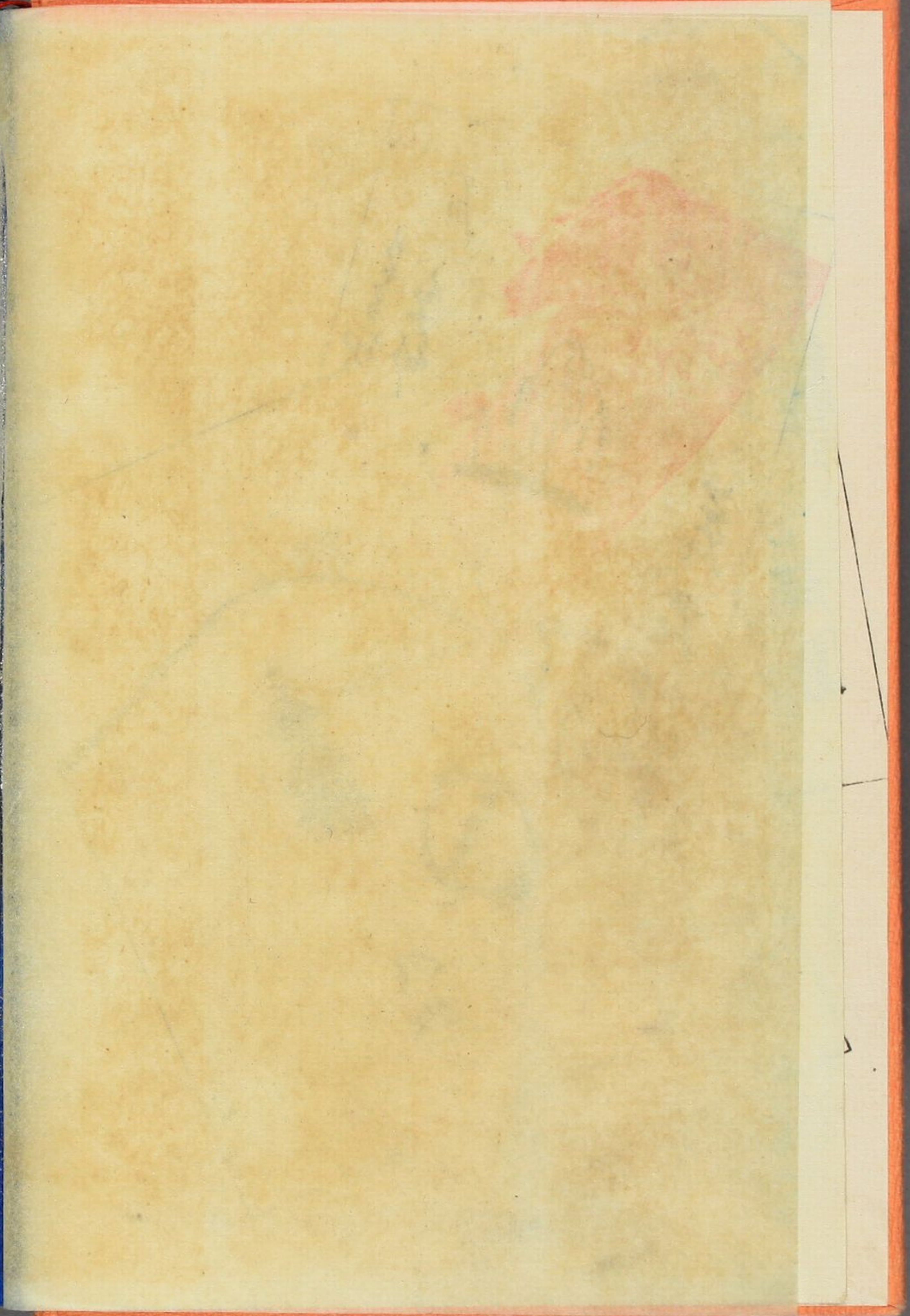
井ノ口
神社
祇園



舞次女



舞吹女



小 短 繪
說 歌 畫

長 吉 中
田 井 澤
幹 勇 弘
彦 勇 光



紀元	作	畫	清	花	逢	燕	春	一	舞	都	夢
ん				見							占
龍子	者	伯	水	路	狀	寒	夜	扇	踊		
.....
九六	五七	五六	五五	五四	五三	五二	五一	五〇	四九	四八	四七

畫
集
舞

姿
(目次)















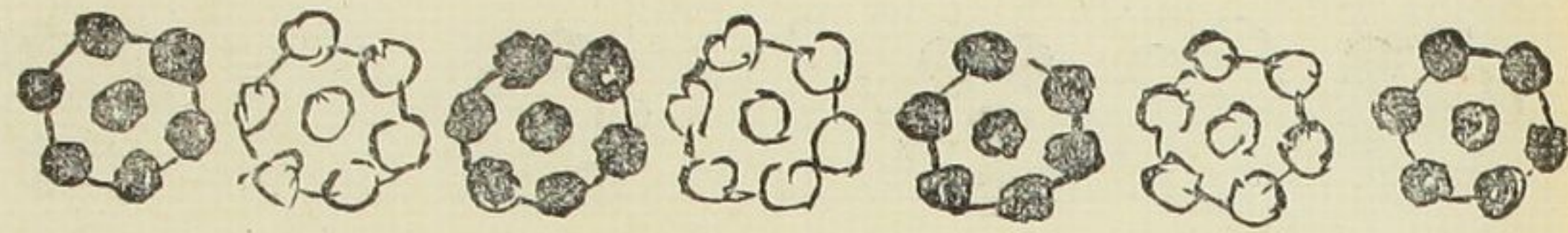




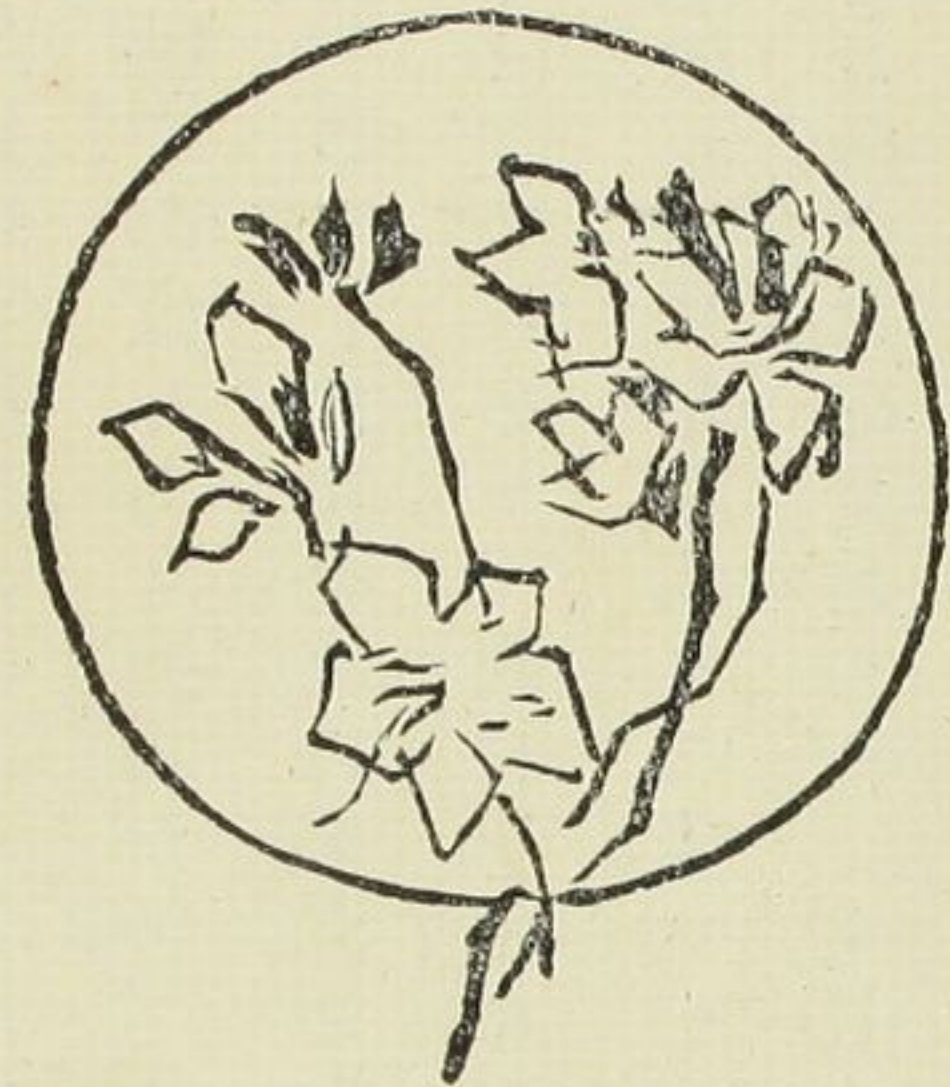








薄絹でふうわりと包んだやうな柔らかな月の光の射しそ
 ふ晩であつた。春は漸う開けて、東山に薫る若葉の緑が祇
 園町の方まで匂ひを送る微風の底には、夜ごとに都踊の
 紅提灯が色氣を含んだ艶女の瞳のやうになまめかしく揺れ
 てる。春は祇園町に戀ごころを吹き込む生命のやうなも



夢占



ので、そこに集ふ人波はその生命に操られる木偶なのであつた。

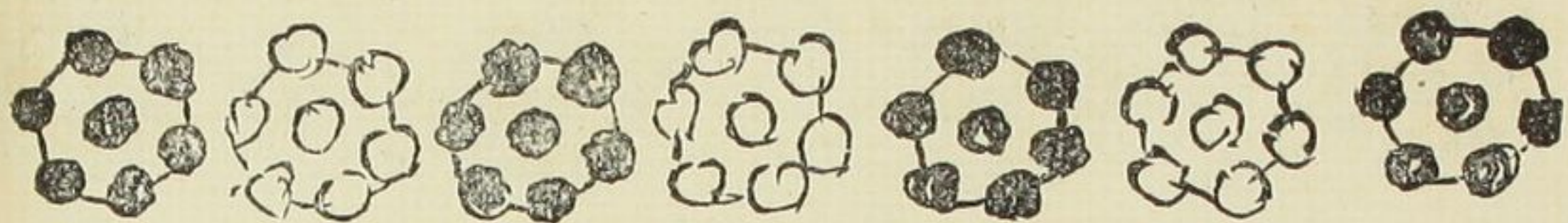
古めかしい茶屋々々の二階からは絃歌の響がしつとりと流れて、妓達の唄ひさんざめく聲のなかにも櫻の花の散り迷ふやうなうすら悲しい戀がひそんでゐる。誘ふ水あらばの唄にもうたはれる情のいきさつは人々の眼に濕んで、末は白川から鴨川のせゝらぎへしつぼりと流れ落ちてゆく。伊勢宇のぼんちと春勇が仲、下河原の仲小路はんと雛龍が仲、さうした相合傘の多愛のない浮名は今日此頃を情の瀬戸に立ちそめて、明日を定めぬ心中沙汰ならねど今の世を近松が昔になぞらへて人の口の端にのぼるのも、皆春がさせる戯れなのであつた。そして東山の薄暗がりから響いて

ニ

来る智恩院の鐘聲だけは浮かれきつた人の胸に薄皮一枚へだて、無常の風をひいやりと滲ませ、茶屋歸りのそゝり唄は粹に口ずさまれても、月影の明るいひけ過ぎの大路を踏んでゆく千鳥足はどうやら生者必滅と抹香くさい字を書いてゆく。

こゝは名も末吉町、軒から軒へ續く茶屋々々はいづれも老舗ぞろひで、小格子のかゝりも昔ながらに古めかしく、角行燈に書かれた屋號は狭い町筋を態とほの暗くしてゐる。そこに行き通ふ人影も何處やら酒の香に滲んで、ふと行燈の影に佇む人の横顔をみても、忠兵衛や治兵衛、さては佐野の某まで思ひ起させ、諸國諸人の集ひながらすつかり芝居がゝりになつてゐる處がこの町の一徳なのである。

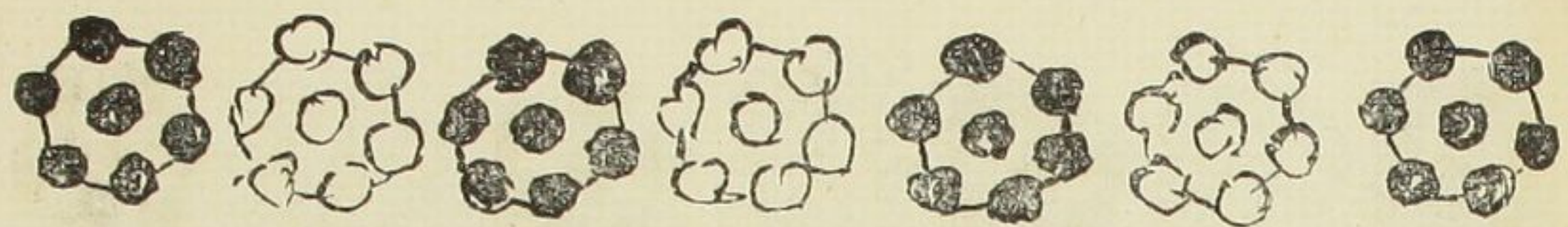
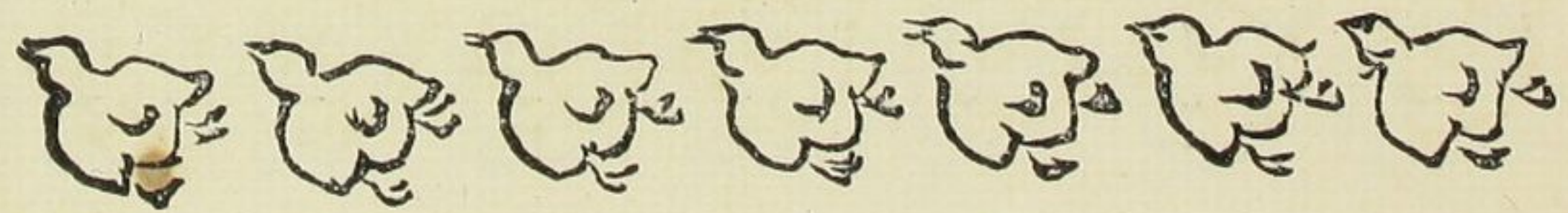




まだ宵の口なので、そこには島田の鬢をふくらませた藝妓の白い顔もついと横丁から流れてくる。花櫛の銀房とだらりの金糸を闇に光らせて、木履の音だけでころ〜と歩いてゆく舞妓もゐる。行きずりに

「玉千代はん姐はん。何處え。」など、艶な聲が挨拶をかはしてゆくのも春めかしく、芋畑はその間を袖を合はせて肩寒さうにちよ〜小走りに駆けぬけてゆく。

大榮の奥座敷では嵐山歸りの花見連がこれから都踊へ繰り込まうと云ふので、妓達の勢揃へをするためにお誂への果ものとかきやを肴にあつさりと盃の数を重ねてゐる。寺町の佛具屋の主人、麩屋町の宿屋のぼんち、それに御幸町の先生まで交つての大一座で三軒家で夜食をした、めたの



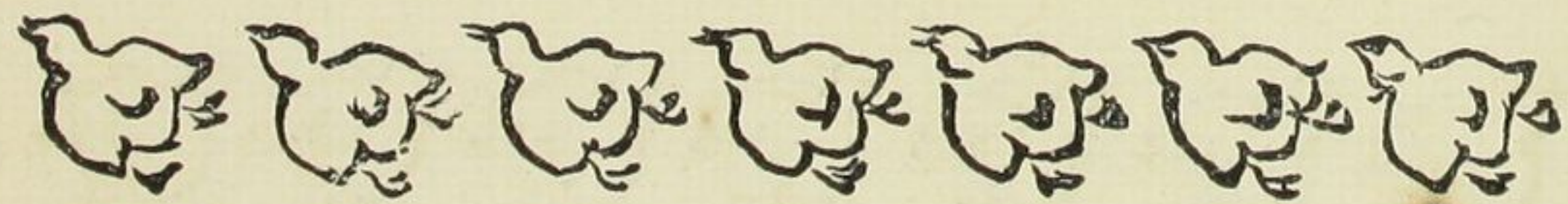
で、なかにはもう頬を眞紅に熱てらして絃も借りずに流行唄をうたつてゐるやうな手合もゐる。

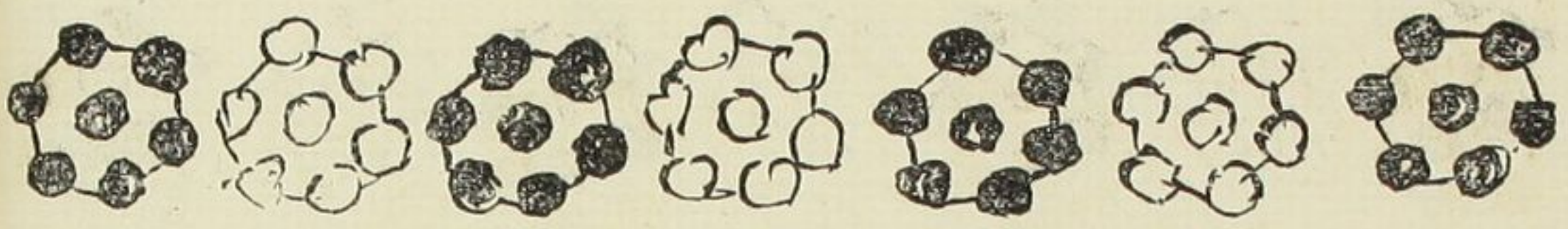
「どうや、みんなもう仕度はよろしいやろ。そろ〜繰り出さうやないか。」と、ひとりが云ひ出すと、他の一人はそれを抑へて、

「ま、お待ちいな。まだしらしした藝妓も舞妓も来やへんやないか。」

「もう来いでも宜しい。何んぼ忙がしうても、私らがしらせるのに、早う来んやうな女ではもうひるきにしてやらんわ。阿呆らしい。」

「ま、そないにお云ひやはんかて宜しいやおへんか。忙しないお方やなあ。」仲居は心得てついと銚子をとる。

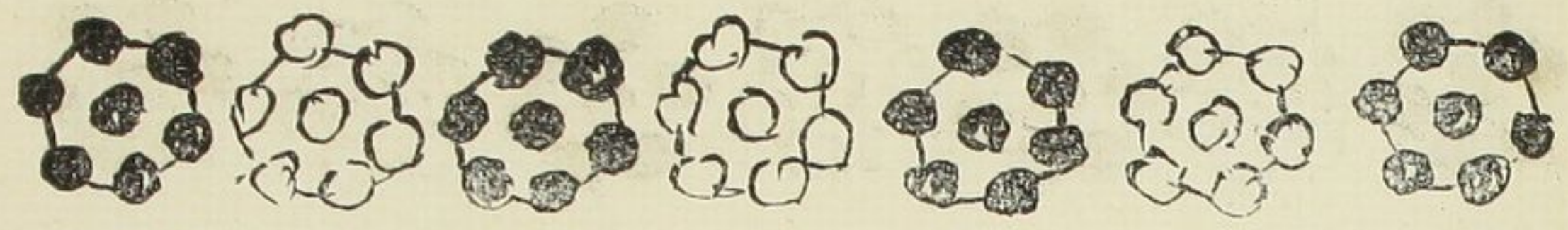




一番口やかましいのが一番先について盃を出して、
 「それ、それ。酒さへ呉れたら云ひ分はないのや。は、は、
 」。そやけどな、こないにして待つてるのは辛いもんや。
 待つ身に辛き……」

「は、は、は、あの聲を聞とみい。あれがほんまの胴破りや。」
 「胴破りちや何んどすね？」仲居は袖で笑ひを抑へながら
 訊く。

「胴破り云ふたらな、……」さう云つた當人が自分から噴
 き笑して、「は、は、は。あの聲で唄ふて貰ふたら、三味線が
 胴から張り切れるやないか。あんたも氣の廻らん人やな。」
 「は、は、は、阿呆らしい。ようそんなことお云ひやすえな
 あ。」仲居は腹を抱へながら顔を背けてしまつた。



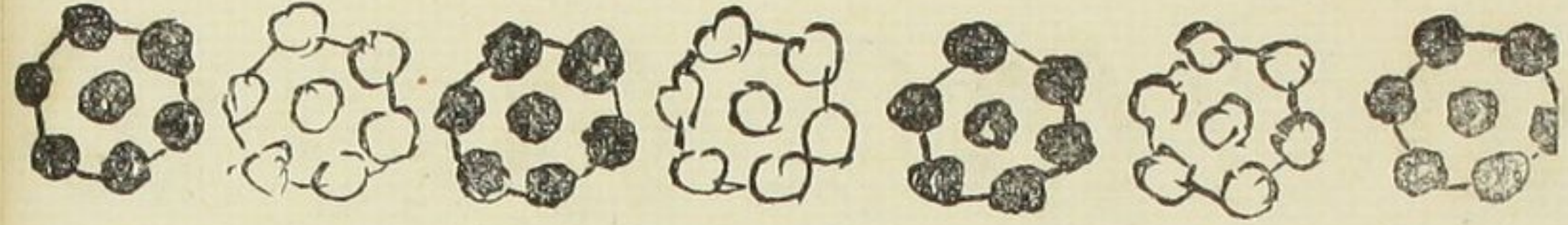
「餘りきつう云つて貰ひますめえぜ。」唄つてゐた男は急に
 南座の狂言で江戸役者の使つた科白の真似をして、

「この聲で鶯啼かせたこともあるわえ。」
 「なんで鶯が啼くもんかいな。そら朝寝の鼾聲で何處ぞの
 鶏が時をつくつたのやろ。は、は、は。」

「叶はんな。」
 一座はてれたやうな顔をして盃をとる男を真中にしてわ
 つと笑ひ崩れた。

その時、通縁になつた小座敷の向ふの紙襖がすうつとあ
 いて、ほんのり點つた籠燈籠の陰から、
 「姐はん、おうきに。」と、云ふ繊細い聲が聞えたかと思ふ
 と、笑ひ聲のなかに藤色友禪の振袖を着た人形のやうな小





さな舞妓が紅いだらりを曳いて入つて来た。

「えらい遅うなつて濟んまへん。」

その妓は口籠るやうに吐きながら伏目になつて何處へ坐らうかと云ふ風にためらつてゐたが、それをみた仲居は眼顔で合圖のやうなことをして、

「あこの旦那はんのねきへおいでやす。」

「へ、ほんならこゝへ坐らして貰ひまつせ。」

と、その儘床の前へ坐つた佛具屋の主人の脇息の傍へ行つて、小さくなつてしんなり坐つた。

「ほ、誰やと思ふたら、菊勇はんやな。あんたいつ見ても人形のやうに小つこうてえゝな。竹取姫のやうに年は取らへんのか。」

「阿呆らしい。私かてお正月には年をとりましたえ。」

菊勇は眞顔になつて云ふ。

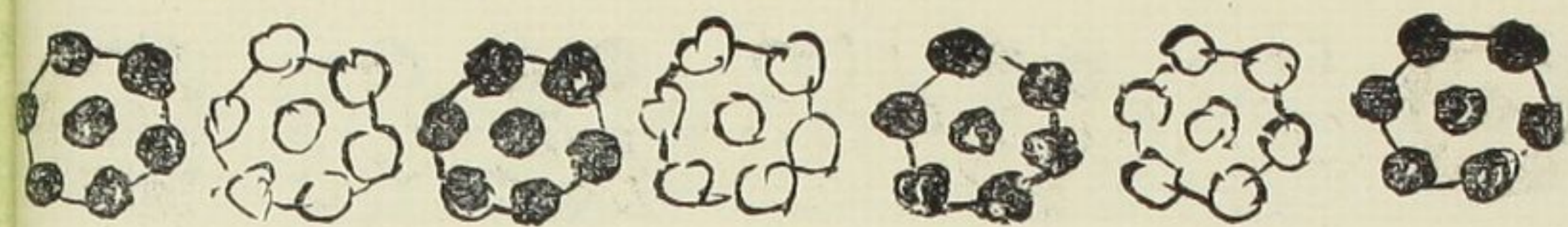
胴破りの聲の主人は又口を出して、

「あんたも怪體な妓やな。年をとらん人間があるか。お正月にならんかて、人間は毎日〱年を老つていくもんや。」

「さうどつか？ そやけど姐はんやお母はんがな、お正月になると年をとるのや云ふて、白朮詣の晩に今夜は寢まんと年の來るのをみといでやす云はりましたさかい、私よう寢まんと起きてたんどつせ。」

「はゝゝゝ。賢い妓やなあ。ほしたら年が來たか？」御幸町の先生は脈をとるやうな恰好をして盃をあげながらませつかへす。





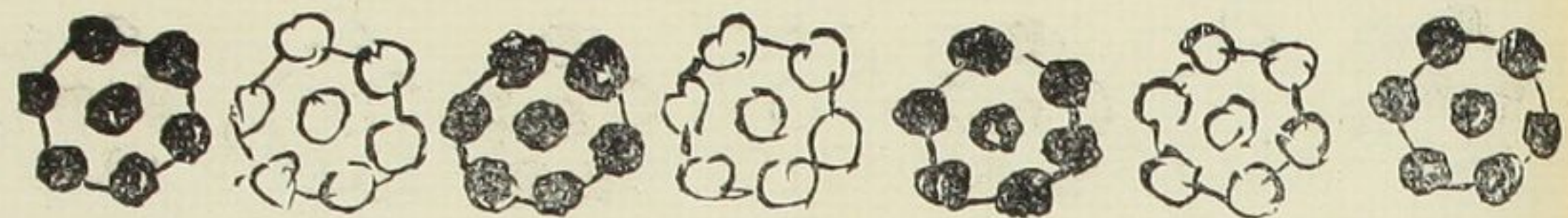
「ふん、来ました。菊勇は益々眞顔になつて、

「丁度臺所で婢衆が火を入れる時に、何やしら山の方で怪體な音がして、すうつと寒うなつたんどつせ。ほんでに私姐はんは寒うて叶ひまへんちうとな、今や、年が遠いところから歩いて来て、あんたの體へ入つて来るのや、云はるのどすがな。」

「はゝゝゝ。面白い。ほんで年は見えたかいな。」（ガッガヤ） 主人は額に皺を集めて、さも面白さうに聞く。

「いゝえ、ちよいとも見えしまへなんだ。ほんでに私、年ちうやうなもん見えしまへんやないか云ひますとな、お母あはんが年の見えんやうな人があるか、そやさかいにあんたには雷さんが太鼓を叩かはるのも見えんのや云ふてえら





い阿呆のやうに云うて呉れやはるのどつせ。」

「はゝゝゝ。こらあかん。悪いお母はんやな。」佛具屋の主

人は腹を抱へて、苦しうに咳入りだした。

一座も腹を抱へて、賑やかな笑ひ聲は障子の外へ來て佇んでゐる春をさゝめかした。

菊勇は怪訝さうな顔になつて、

「そやけど、なあ、へ、ほんまに私を黽らんとほんまのこ

と云ふとくれやすな。あの雷はんちうもんはほんまに繪に

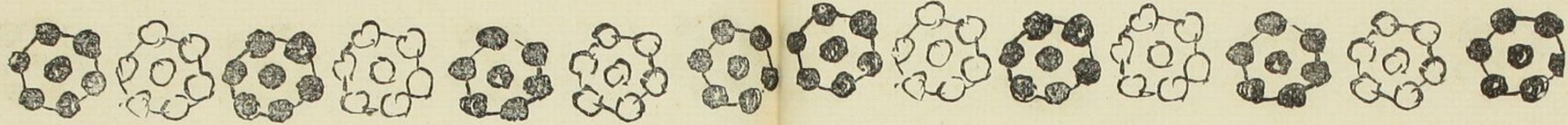
描いたるやうに太鼓を叩かはるのどつか？」

先生はそれを聞くと、又噴き笑して、

「あんた一體幾歳になつたんや？」

「私どつか、私はな、十三になりました。」





「十三にもなつて、雷さん知らいでどないにする。もう旦那はんの出来る頃やないか。あんたも阿呆やな。」

「そないにきつう云はんとおいとくれやすな。私はどうせ阿呆どすさかい。」

菊勇は急に悄れて首垂れてしまふ。
佛具屋の主人はそれをみると彼女の肩へ手をかけながら、

「いや、決して阿呆なことはあらへん。賢い、賢い。今時十三にもなつてそんな罪のない妓は珍らしいわ。」

「悪いお方、いけずやなあ。」
菊勇はその儘傍を向いて口をつぐんでしまつた。そして

その眼には長い睫毛が細かくふるへて、いつか悲しさうに濕んでゐた。

そこへ又通縁の方から二人の藝妓がつながつて入つて来て、

「遅うなつてえらい濟まんこと。もうどだい忙がしうて。」
と云ひながら方々へ割り込んで坐つた。

一座はそれで又賑やかになつて、盃がひとしきり彼方此方へ動いた。都踊の噂や、嵐山の花の噂は各自の口から喧

しく物語られて、軽い洒落や皮肉が云はれる度に、艶めいた笑ひ聲が酒の香と一緒に紙燭の光をゆるがして、ほの暗

い明るさのなかにはてらく光る顔や、黒髪や、着物の美しい色彩が繪のやうに亂れた。

しらした妓の数が揃ふと、彼等は仕度をして、三番の都踊に間に合ふやうに座を立つた。



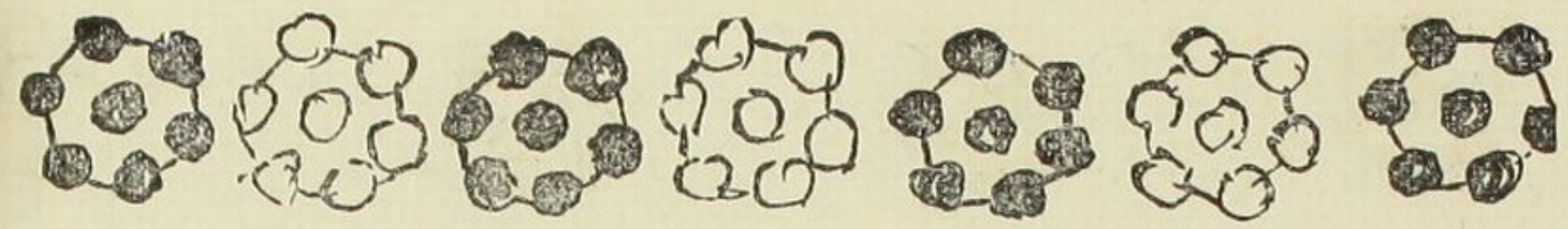


「うすものゝ、軽き袂に、匂ふなり、……」鼓唄のたてが澄んだ美聲でたからかに唄ふと、冴えた鼓がそれに答へて本舞臺では幾十人となし踊り子が花環のやうになつて、練れつほぐれつ美しい舞ひの手を見せる。三味線の連弾は天井に板に打つやうなかなかな撥音を飴させて、太鼓や小鼓のゆるやかな調べとともに、幾十の袂は華やいた染模様と、金糸の繡ひを繚亂と渦巻かせる。しなやかな白い織手はその渦を繰る生命のやうなものであつた。

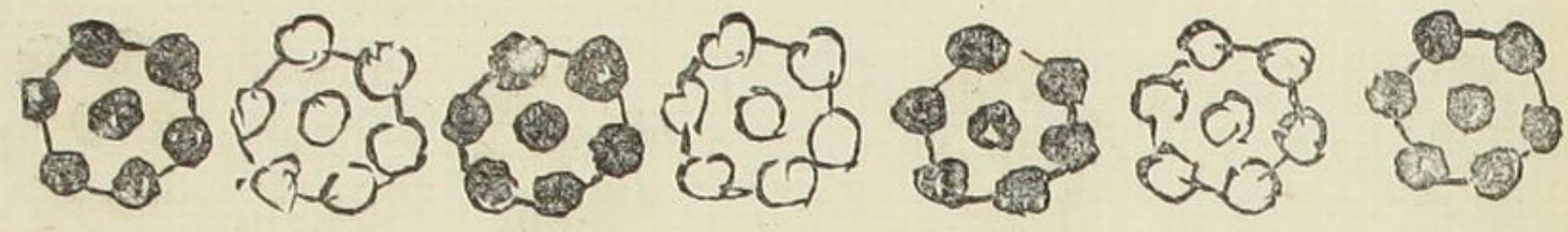
菊勇は藝妓達の一番後に隠れて、前の人々の肩越にそつと伸びあがつて舞臺をみてゐた。そこには自分達のおつれが皆で此處を晴れと舞ひつれてゐる。あそこに舞つてゐるのは春江はん、こつちが玉龍はん。人顔もはつきりと見えて、ぬけるほど白く化粧つた顔がまるでふだんとは打つて變つた美しさを示してゐる。頬の寂しいと思つた人も、こゝでは笑つてゐるやうに賑やかにみえる。丸すぎると思つた人も、こゝでは水の滴るやうに凄婉にみえる。

菊勇はじつと眼を据ゑてみてゐるうちに口には云ひ盡せぬ羨ましさか小さな胸一杯に込みあげて來た。あゝやつて舞ひ續けてゐるおつれ達に比べて、自分は何をしてゐるのだらう。都踊の番組がきまる日には胸を轟かして讀みあげられる書きものをみてゐたが、自分の名がその中になかつた時の悲しさ、今思ひ出しても彼女は涙ぐまずにはゐら





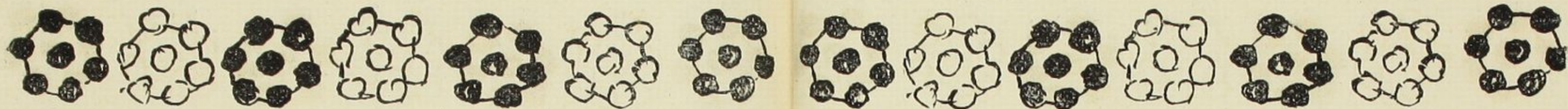
れないほど口惜しい。自分の舞ひは筋がよくても何しろ體の小さいのが舞臺にはふさはず、それによし又舞臺にのぼれても旦那のない悲しさには人並の仕度さへ出来兼ねる。旦那といふもの、話はうすく聞かされてゐながら、唯一圖にそれが恐ろしくて、屋形のお母はんがお茶屋の仲居を相手にどんな跋でも盲でもえさかい、この子を助けると思ふてなど、耳打ちをしてゐるのを聞いた時にはぞつとして心からお母はんを憎んだが、……併し今あゝしておつれ達が踊つてゐるのを見るとその旦那さへあればと云ふやうな氣もする。かうして客達からは阿呆と罵られ、その人達の陰にかくれてこつそり踊りを見てゐる自分の肩身の狭さを思ふと、さすが子供心にも身を切られるやうに悲しくて



彼女は泣かすにはゐられなかつた。いくら抑へようとしても云ひ甲斐のない涙はどうしても抑へることが出来なかつた。

白粉で塗り隠された菊勇の頬にはまだ仇なさを知らぬ涙が幾しづくとなくしたゝり落ちた。そのひとしづくには蜷川を流れる水の濁りはなくて、丁度白川砂の底から湧いてくる泉のやうな淨らかさが輝いてゐた。それを彼女は友禪の振袖でそつと人知れず押拭ひながらさう云ふ時にはきまつて思ひ出す幼馴染のお小夜はんのことを思ひ出した。お小夜はんは菊勇にとつてれた一人あつて二人とない懐かしい心の友だつた。三本木にある小さな宿屋の娘で、年も同じどしの十三歳で、美しさは自分に劣つても人並す





ぐれて賢い、思ひ遣りの深い子だつた。菊勇の両親がまだこの世に生きてゐた時分には隣同志に住ひあつてゐた縁故から二人は親達が親類づきあひをしてゐるまゝにいつとなく絶ち難い縁に囚はれて、到頭今のやうな仲になつてしまつたのであつた。そして打續く不幸から両親に死に別れ、祇園の屋形へ身を賣られるまで二人はいつも手を執り合つて鴨の河原に夏は螢、冬は月影を追ひ求めて歩いたのであつた。そして去年の十一月、初めて見習ひから舞妓の店出しをしてからは變りはてた美しい姿をめで、お小夜はんは京極へ使ひにやられた歸りなどには必ず屋形へ寄つて多愛のない物語りに僅かな逢瀬を楽しんでゆくのであつた。

「お小夜はんと私とはなんで姉妹に生れしまへなんだやろなあ。」思ひ餘つて菊勇がこんなことを云ひだすと、お小夜はんは、



「ほんまになあ、さうやつたら私こんな辛度い思ひをして逢ひに來いでもよろしいのになあ。」

それが二人には越え兼ねる關なのであつた。

菊勇はさうしたお小夜はんのことを思ひつゞけてゐるうちに又いつともなく亡き両親のことが思ひ出された。店出しの時には、美しくなつた自分の姿を喜んでくれるだらうと思つて、わざとだらりまできちんとして、屋形の婢衆と一緒に黒谷の丘の片影にあるお墓へお詣りに行つたが、今ではどうやらこんな身になり果てたことが両親に對して濟まぬやうな氣もする。生きてゐると云ふことゝ、死ぬこ





ととの差別が考へれば考へるほど分らなくなつて、寂しいさゝやかな二基の墓碑をみてもそのなかにあの父親と母親が入つてゐやうとはどうしても想像されなかつた。東山を越えて彼方の何處かにきつと今でも私の行くのを待つてゐられるに違ひないと云ふやうな氣がされてならなかつた。いつぞやもお小夜はんにそのことを話したら、彼女も、「ほんまになあ。」と、云つて眼を大きく睜りながら合點いた。……

舞臺の方ではぱつと薄紅い蠟燭の波が揺れ踊妓達は一齊に小櫻の枝を宙にかゝげた。そして花道の上の囃しでも祇園囃しの重々しい大太鼓と太鼓がゆるやかに鳴りはじめ、冴えた鐘の音が特異な節調を作つてゆく。

三番の踊りはこれで終りを告げたのである。

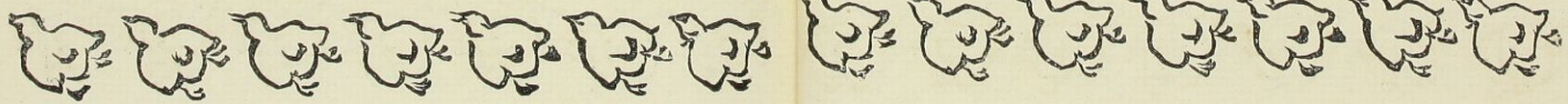
「あゝ、いつみても都踊は美しいな。どれ、そろそろ立たうか。」佛具屋の主人は感じ入つたやうに呟きながら後を振り返つた。

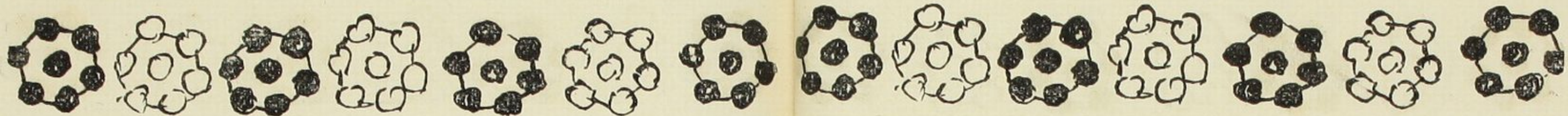
仲居はそれを聞くとうつとりと夢から醒めたやうに微笑んで、

「もうちよつとお待ちやすな。えらい人どすさかい。」と、云ひながら、花道へ引上げてゆく踊妓の列に見入つてゐる。

先生はいつのまにか柱に倚りかゝつて、少し口をあきながらさも快よさうに寢入つてゐた。

「ふわ、怪體な、こつちやの旦那はんよう寢とゐやずせ。」





ひとりの藝妓が頓狂な聲で叫ぶと、皆はやつとそれに氣づいて、

「こらあかん。ほんまに不心得な男やな」と、云ひながらいきなり両方から肩をとつて引起した。

と、先生は煩さうに伸びをして、

「誰れや。なんぞ早う出来るもの持つといでやす。」

何處かの茶屋にゐる夢でも見てゐるとみえて、口のなかでぶつゝ寝ごとを云ふ。

「はゝゝゝ。せうむない。」

皆は思はず噴き笑さずにはゐられなかつた。

端にゐる客も立上りながらその容子をみて笑つた。

その聲が餘り大きかつたので先生はやつとぽつかり眼を

三

あけてきよろきよろしながら立上らうとした。

佛具屋の主人は透さず、

「都踊は美しかつたな、先生。」

と云ふと、彼はてれた笑顔をして、その儘うつとり舞臺の方へ眼をやつた。

皆は又ひとしきりくすくす笑ひだした。

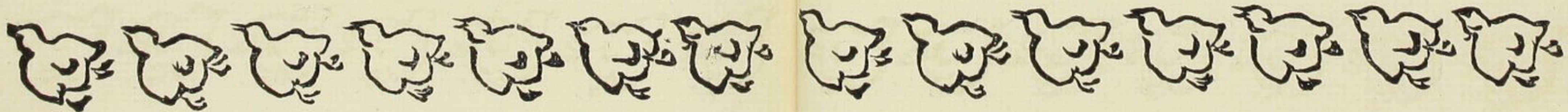
歌舞練場の外へ出ると、いつの間にか夜もしつとりと更

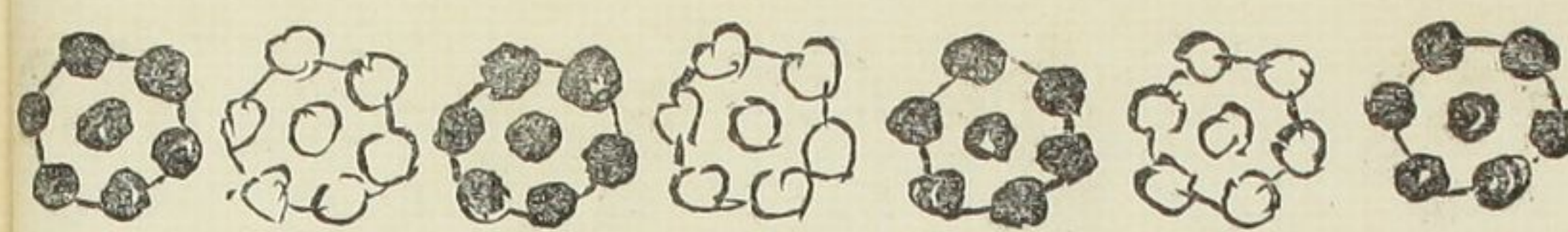
けて、夜寒が行き通ふ人の縮めた首筋にしみついてゐる。

道の片側には篝火の煙が紅く流れて、物賣る商人の聲も何

處か薄寒く、さすがは山近い京の街のことゝて路にうつる

燈影のなかにも惱ましげな春の色がすつかり消えてしまつてゐる。

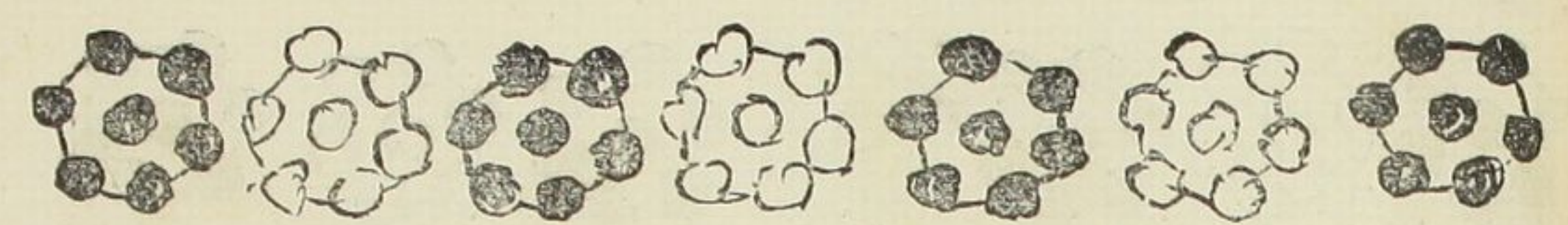




万亭の角まで来ると、托鉢歸りらしい一人の美僧が、しよんぼりうなだれてゆく菊勇と法衣の袖を摺り合はせながら山の方へ歸つて行つた。

三

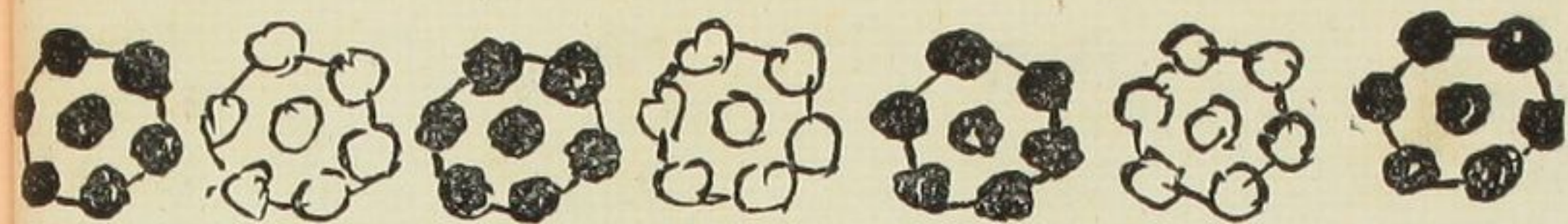
その夜も更けて、もはや草木も睡る丑満時である。菊勇はほかの藝妓や舞妓達と一緒に旦那はん方に連れられて、八坂の上にあるさる席貸の奥座敷に寝てゐた。雑魚寝の折はきまつて宵の口を騒がすおつれの妓達も今はもうぐつすりと寝静まつて、聞えるものといつては庭の遣り水のひそやかな吐きと聲を争ふ甌の音ばかり、吹く小夜風も聲をひそめて、四邊は物凄くほど深沈と更けてゆくのである。



菊勇は何かの夢に驚かされてふつと眼を睜いた。枕もとには影のやうな丸行燈が點つて、ほの暗い物の影はあやかしやうに奈良壁の面に吸ひ込まれてゐる。床の間にかゝつた達磨の幅は白眼だけちらちら光らして、青貝の螺鈿の入つた料紙管や、硯管、さては又よく拭き込んだ床柱までものを云つてゐるやうにほのかに冷たく輝いて、枕屏風の銀が墨繪の竹を浮きたせたまゝそこはかたなく冷炎を燃やしてゐる。

菊勇は何故かぞつとした。直ぐ隣りに寝たおつれのつね勇はそれとも知らずに快よさうに眠りこけてゐる。こゝへは踊場がはねるとすぐよ

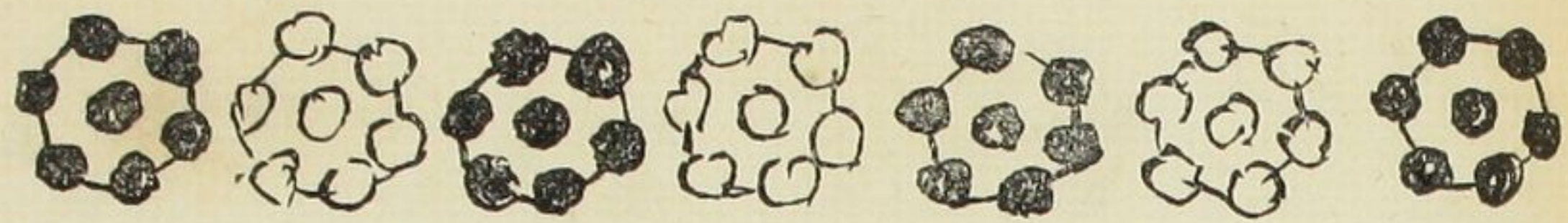




ばれて来たので、宵の口の疲れで前後も知らず寝てゐるの
 である。髪も大形のおしどりに結つて、頭よりも大きい花
 櫛の數々はそのまゝそつくり床の間へぬぎ捨て、燃えたつ
 やうな紅鹿の子の長襦袢の袖に頸を埋めて、友禪縮緬の夜
 着から乗り出すやうにしながら寝てゐる。舞妓のなかでも
 一二を争ふ美形なので、行燈の光に照らされるその寝顔は
 祇園の誇りのひとつであつた。濃い白粉を油で拭きとつた
 あとがほんのり残つて、鼻の陰や、頬の片陰は薄墨でぼか
 したやう、そして一文字にひいた睫毛と、濃い口紅だけは
 圓くのばした絨に落とした顔料のやうに匂つてゐるのであ
 つた。

その隣りにも、またその隣りにも同じやうな寝顔がさま





ざまな形かたちをしながら繪えのやうにはほの見みえてゐる。

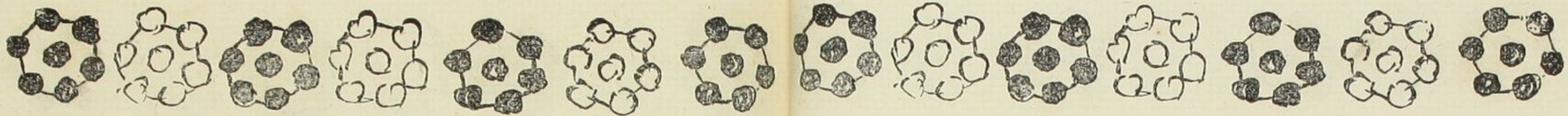
菊勇きくゆうは何故なぜか又またぞうつとした。

ふと見みると、縁端えんぱんの障子しょうじの面おもてには異様いやうなものゝ陰影かげがしみついてゐる。蒼あをざめた、定さだかならぬ人ひとの姿すがたで、手てを斜はしに垂たらした先さきから蒼あをいしづくがたらたらと滴したたり落おちてゐる。そして首くびがふらふらと彼方あちこち此方こちへ動うごいて、その度たびごと毎ごとに體からだが膨ふれたり縮ちぢまつたりする。——それは雨戸あまどの隙すき洩りる落おちがたの月影つきかげであつた。

菊勇きくゆうは恐おそろしさの餘あまり首くびを縮ちぢめてふるふる慄ふるへてゐた。

少しでも體からだを動うごかすと冷汗ひやあせがすうつと滲しみ出でるやうで、たゞ生唾なまつばを吞のみながら痺しびれた舌したを強つよく噛かんでゐた。……
何處どこからかかすかな呼よび聲こゑがする。





春月のお八重はん姐はんの聲だ。

「菊勇はん。何をうろろしとゐやすのえ。早う梅の間へ
いとおくれやはんか。旦那はんがきつうせいとゐやすさか
い。……。」

菊勇はそれをきくとはつとして起ち上つた。

緋鹿の子の寝衣を着てゐると思つたのが、いつか自分の
一番好きな卯の花模様の襲ねに變つて、姐はんから譲つて
貰つたお納戸に龜甲の大模様を繡とつただらりまでしめて
ゐるのである。

菊勇は嬉れしくなつて、旦那はんは誰やしらと思ひなが
らいそいそ暗い廊下を渡つて行つた。廊下の板のきしむ音
が異様に響きあがつて、角につけた籠燈籠の灯影がいつに

二元

なく暗い。そして庭の樹立から射しそふ月影はそこらに敷
いた白川砂の面ではんのりと光つてゐる。

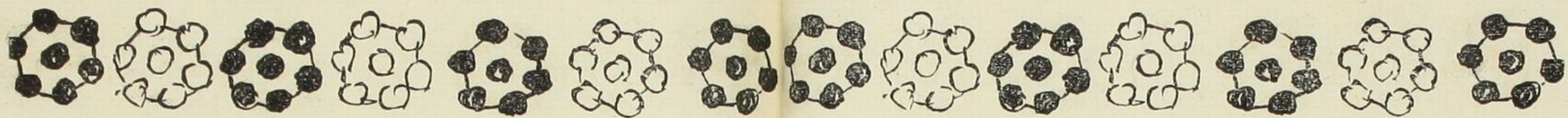
梅の間の前まで行くと、菊勇は、

「姐はん、おほきに。」

と小聲で呟いて、その紙襖をすうつと開けた。それと
一緒に彼女は客の旦那が餘り不思議なので悸乎として思は
ず後へ身をひいた。

床の間の正面のところには菅笠をかぶつて眞黒な法衣を
纏つた僧形の人がたつたひとりでしよんぼり坐つてゐる。
成駒屋のやうに面長な、美しい顔の若いお坊さんで、き
つと眞一文字にひき結んだ唇は泣いてゐるやうだつた。そ
していつになくそこにはたつた一臺の紙燭が點されてゐ





るぎりで、壁の色も定かならぬほど四邊が朦朧としてゐる。

菊勇は薄氣味悪くなつてぶるぶる慄へてゐると、お坊さんはやがてこつちの方へ眼を移して、

「あんたが菊勇はんか。ほんまに長いことやつたな。」と、優しい聲で言葉をかけてくれる。

菊勇はその様子がいかにも知人らしく思へたので、「忘れて濟んまへんけど、あんたはんは誰方はんどしたかいな。」

と、おづおづ訊いてみた。

と、坊さんは笑ひもせず、

「私はな、黒谷の寺にゐた青蓮や。もう忘れてしまふたか

頼りないこつちやなあ。」

青蓮といへば兩親の葬ひの時に何くれとなく世話を焼いてくれた老僧である。幼な心にも白髪のままじつたあの長い睫毛だけは忘れぬが、それにしてもこんな美しい若僧が青蓮はんと名告るのはどうしても腑に落ちなかつた。

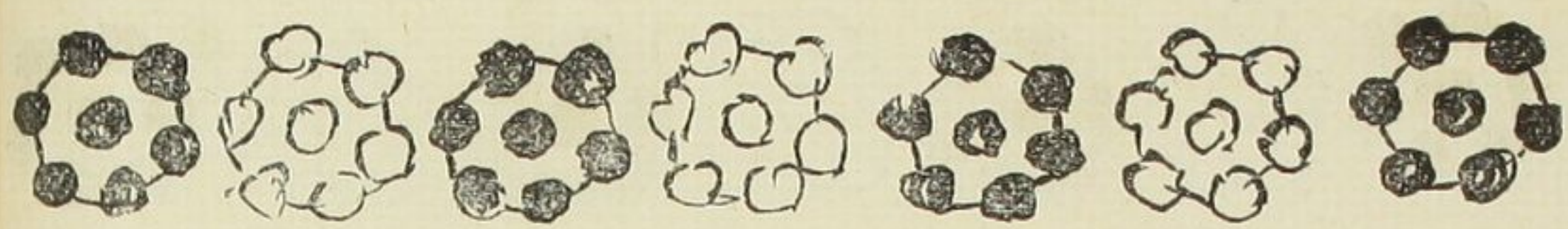
菊勇はその儘靜かに起つて、紙襖のなかへ入つた。

「もうあんた私を忘れてしまふたか。ほんまに頼りない子やなあ。」

坊さんは同じ事を繰返して立膝の上に重ねた白蠟のやうな手を動かしながらそつと手招きをした。

菊勇はその言葉を聞くと急に何かしら悲しくなつて、「どうせ私は阿呆どすさかい。」

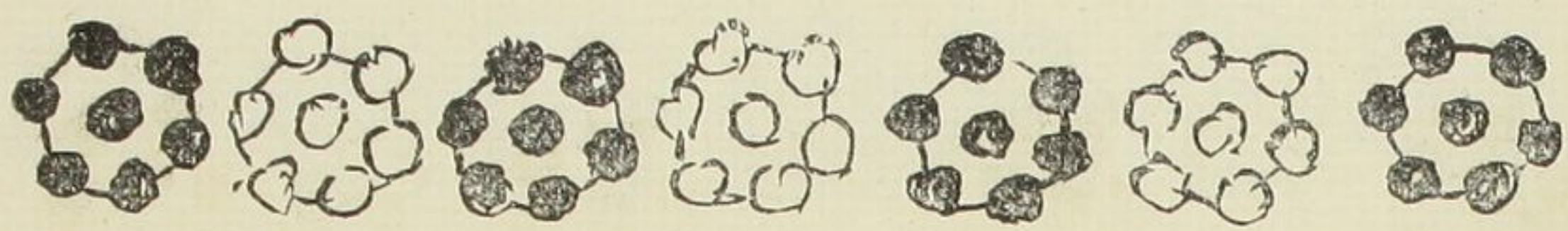




と、云つて、小さな聲で啜り泣きをしました。
 坊んさんはそれを見ると、急に眉を曇らせて、
 「え、子や、え、子や、私を忘れたかて大事ない。私はあ
 んたがいつち好きや。な、そないに泣かんと、もつとこつ
 ちやへお寄りいな。」

「おほきに。そやけどな、此頃みんなして私のことを阿呆
 や阿呆やいはるよつてに、私、それが悲しいて悲しいて
 叶はんのどつせ。あんたはんお坊んさんどすさかいに、ど
 うぞあんじよう教へてお呉れやす。ほんまにどないにした
 ら賢うなつて、都踊やたら、温習會やたら出さして貰ふや
 うになりまつしやろなあ。」

菊勇は思ひ入つたやうな調子で首を傾げながら訊く。

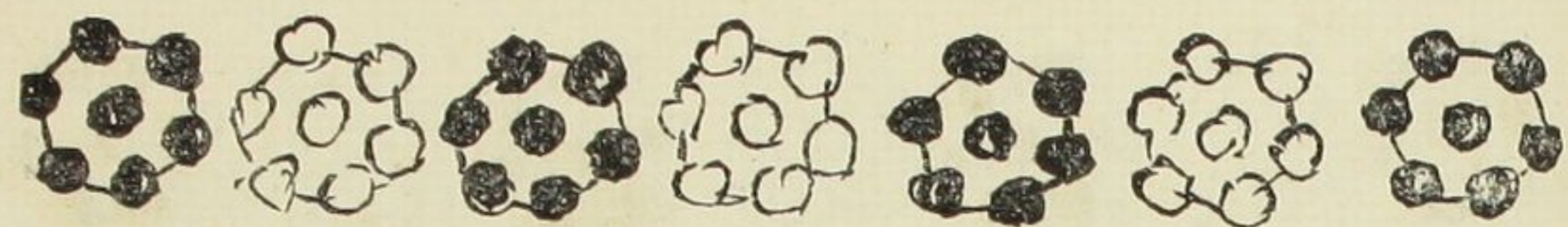


坊んさんはさういふ顔をしげしげ打眺めてゐたが、一言
 も返事をして呉れない。餘りなと思つて此方でも涙ぐんだ
 眼でじつと見上げてゐると、やがて坊んさんは細い女のや
 うな指を法衣の袖からそうつと出して、あらぬ菊勇の後の
 方を指ざした。

ふと振顧へると、そこには冴え返つた月光のなかに、庭
 の櫻がまるで花傘をひろげたやうにはの白く一面に咲き亂
 れてゐる。花はひとひら一片五つの花弁をみせて、そのな
 かには一様に露のやうな月のしづくを湛へてゐる。

「ほんまによう咲いてゐますえな。この座敷においでやす
 お客はんは誰方かて美しい云ふてお讚めやすえ。」
 菊勇は花の姿が餘り美しいので、ついつと見惚れ



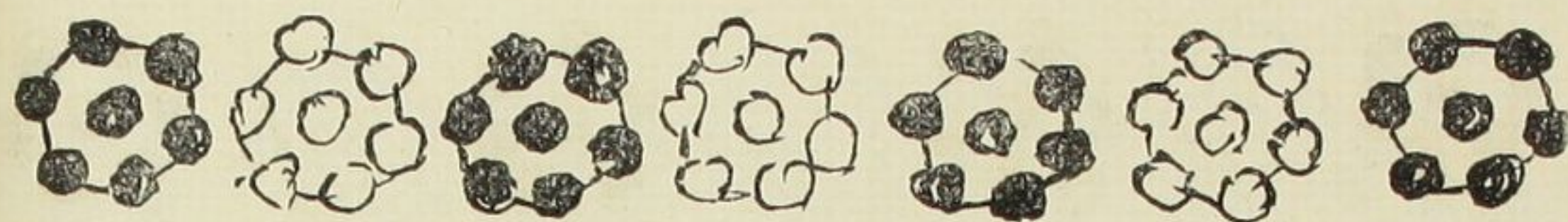


お小夜はんにはその聲が聞えなかつたかして、ものも云はずに石像のやうに立ちすくんでゐたが、吹く風もないのに櫻の花が雪のやうにちらちら散り迷ふと、それに驚いてかお小夜はんはすうつと顔をあげた。

「お小夜はん、あんたはんどうおしやした。いつこゝへおいでやしたんどす？」

菊勇はさう叫びながら跣足でそのまゝ敷石づたひに花蔭へ下りていくと、お小夜はんはやつとその姿をみつめて

「ほ、おみよはん。私な、さつきにからあんたを待つてたんどつせ。これから伏見の小母はんのとこへ行きまへうやないか。私もう衣裳をちんと着かへて、他處行きの出来るやうにしたるのどつせ。」



ながら呟いたが、坊さんの指がまだその花の下陰をじつと指さしてゐるので、不思議になつて思はず眸を凝らすと、その時、彼女は櫻の根がたに思ひもかけぬ人の姿を見出した。

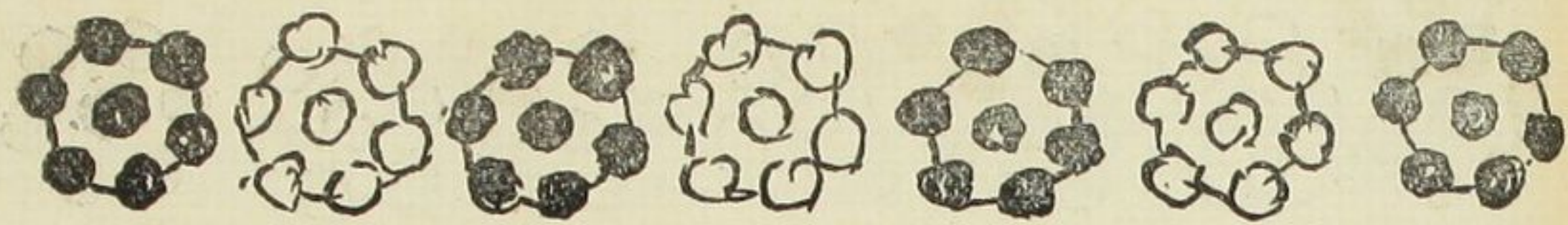
そこには暫らく逢はなかつたお小夜はんが来て立つてゐる。黒繻子の襟のかゝつた青い着物を着て、ちんこだらりをきちんとしめて、髪も舞妓風に結つて、まるでいづそやの芝居でみた中將姫のやうな姿をしながら櫻の根がたにしよんぼり俛首れて立ちつくしてゐる。

菊勇はそれを見るとはつと嬉しくなつて、

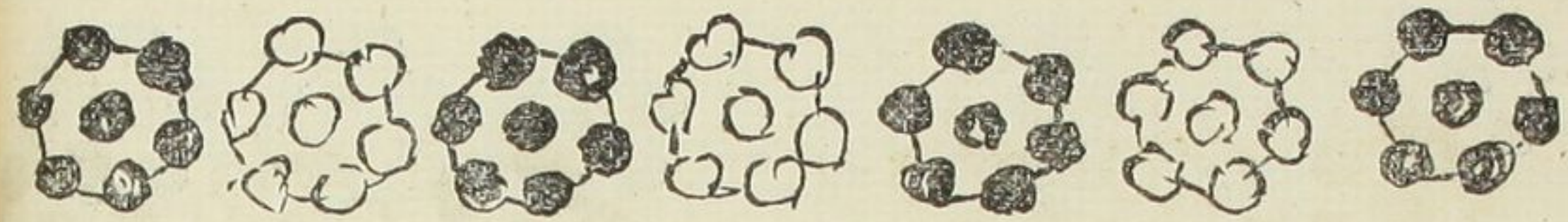
「まあ、お小夜はん。あんたはんどうおしやした！」

と、叫びながらすらすら起上つて縁端の方へ出て行つた。





とまた私のお母はんが追うて来やはつて、きついめにたよ
かはるに違ひない。私、今日はなにも悪いことしいへんの
に、きついめに叱られたんにやわ。」
さう云ふお小夜はんの眼には大きな涙の玉がほろほろと
流れてきた。そして袂を顔に押當て、しくしく聲をたて、
啜り泣きしはじめた。黒縷子の襟は月の光に冷たく光つて
袂は嗚咽するたびに細かくふるへた。
菊勇はふつとお小夜はんのお母はんの顔を思ひだした。
疝性で、氣むづかしやで、一寸のことにもよく腹を立て、
はお小夜はんを打つたり、叩いたりした。その怒つた時の
顔を思ひ出すとぞつとして、一刻の間もかうしてゐられな
いやうな忙はしない氣になつて、友禪の裾もちらほらと一



お小夜はんはやつと花の下から敷石のところまで歩いて
来て、丁度着物を見せびらかすやうに兩袖を蝶のやうに廣
げて後姿をみせる。その背にはさまざまな紅や藤色や、黄
色の模様が縫れたりくづれたりした。
菊勇にはお小夜はんが舞妓になつてゐるのが少しも不
思議には思へなかつた。もう遠い昔から一緒に女紅場へ通つ
てゐたやうな氣がして、懐かしさがしみじみと胸に滲みと
ほつて来るやうだつた。
「ほんまに私も伏見へ連れていて欲しいわ。そやけど、私
も衣裳をかへて来んなりまへんな。」
菊勇は今更のやうに自分の姿を見廻はしながら云つた。
「阿呆らしい。あんたはそんなりで宜しいわ。早う行かん
三六





生懸命に所定めず驅けだした。

「これ、菊勇はん、お待ち。なんぼあんたが遁げたかて、

もう駄目や。」

何處かで鋭い聲が聞えたかと思ふと、突如肩のところを冷たい手がむんづと攫んだ。まるで氷のやうな冷たい手だった。

「あゝ、お小夜はんのお母はんが。……」と、思ふと、はつとして彼女は足がたちどころにすくんでしまつた。折角春を祝ふて貰つた衣裳が破れると思つても、恐ろしくてどうしても後を振向くことが出来ない。唯いたづらに両手で空を攫みながら悶えてゐると、その時、すぐ耳のそばでやつと魂消るやうなお小夜はんの絶泣が聞える。菊勇はお

小夜はんが慘らしくずた／＼に斬られてゐるのだなと思ふと、急に恐怖のあまり聲を放つて泣きだした。……

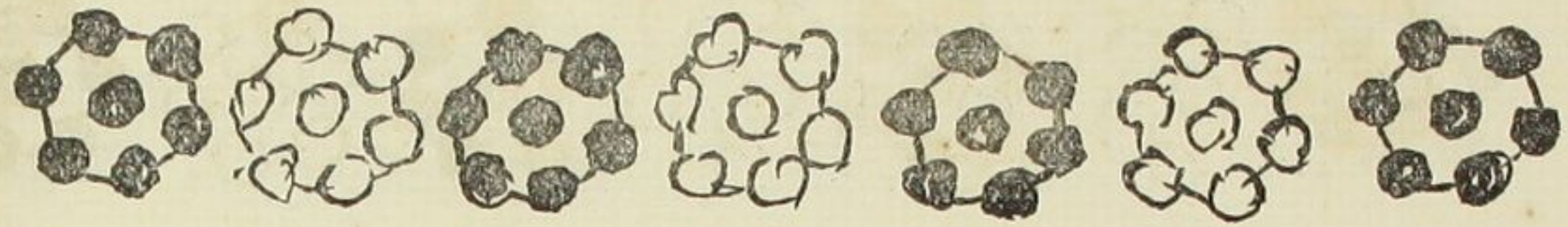
「菊勇はん。」菊勇はん。

遠いところで誰れかい名を呼んでゐる。

苦しさ、切なさにあふつと眼を睜くと、今迄とは似てもつかぬ席貸しの奥座敷で、小窓から射してくるすがすがしい光は消え残つた行燈と光を争ひながら四邊を暁方らしい色で彩つてゐる。雑魚寝の人はまだぐつぐつと寝入つてゐて藝妓の花之助はん姐はんだけが派手な長襦袢の肩を寒さうに夜着から出して、細い煙管で煙草を吸ひながら此方をまじまじ見てゐる。

「菊勇はん。なんぞ恐い夢でも見たんか。えらい泣聲をた





て、ま、どうえ。」

菊勇はまだ冷たい手で肩をしつかり攪まれてゐるやうで身動きが出来なかつた。

「なあ、あんた。まだ夢が醒めんのか。私の顔が分るか？」
さう云はれて菊勇はやつと我れに返つた。今のは夢であつたかと思ふと、ほつとして、腋の下へ冷汗がじとじとと滲み出てゐるのをはじめてそれと感じた。

「はあ、夢やつたかいな。私もう恐うて恐うて、……」と云ひかけると、彼女はなにかしら譯もなく嬉れしくなつて思はず涙をばらはらと枕のうへへしたゝらした。

その朝、みんなひと風呂つかつて、田舎亭のお料理で朝飯をよばれる時、訊かれるまゝに菊勇は夢のいちまきをす



のかり物語つた。

黙つて聞いてゐた佛具屋の主人は、語り了ると嚇すやうに、

「悪い夢を見たもんやなあ。その夢占はようないえ。」と、笑ひもせず云つた。

「ほんまどつか。私恐いわ。」

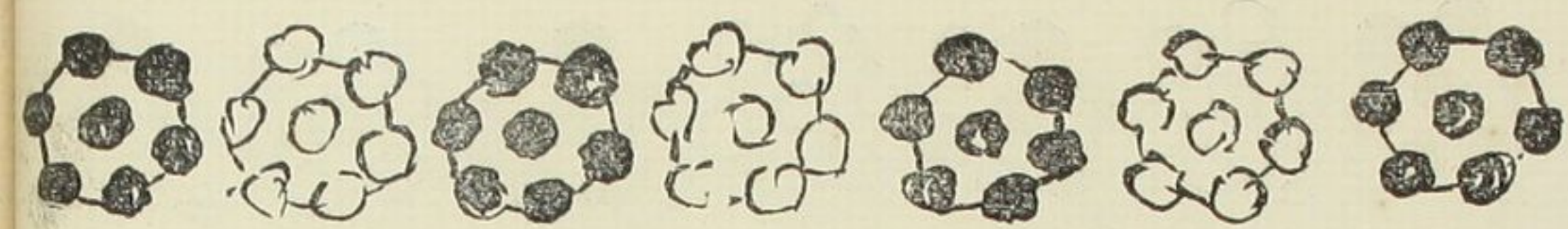
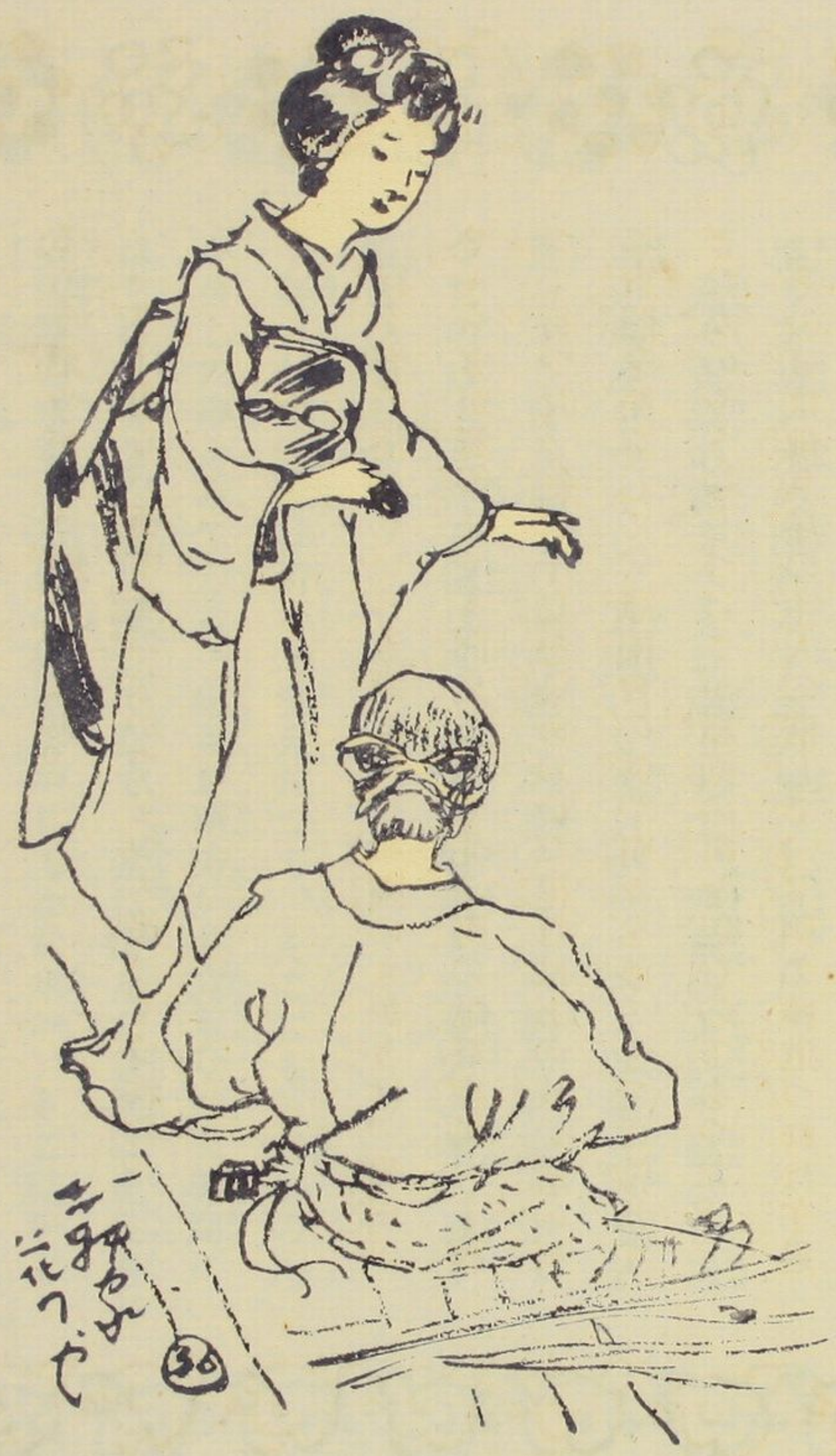
菊勇は眞蒼になつて一座の顔を見まはした。座にゐた老妓は、

「ほんまどころかいな。そないにして坊さんの夢をみたもんは近いうちに如來様のお傍へ上らんらんえ。」

「姐はん、ほんまどつか。私、もう厭やわ。」

菊勇はおろおろ聲になつて袂を顔に押しあてゝしまつた。





「はゝゝゝ。せうむない。その夢占はえゝ旦那はんが出来
るちう謎やがな。阿呆やなあ。」

一座は明るい朝の光のなかでどつと笑ひくづれた。

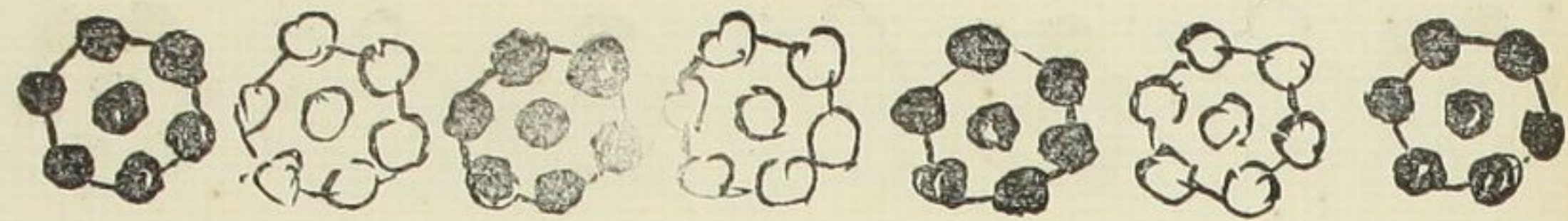
四

行く春の惱ましい日も過ぎて、祇園のさかりは、鴨川の
せゝらぎが舞臺までも聞えて来る先斗町の歌舞練場へと移
つて行つた。紅に千鳥を染めぬいた提灯はあの狭い廓の軒
に宵闇を照らして、祇園會の鉾が町々を渡るまでは沙汰す
ぎた女のやうなしづけさが祇園の町を包むのであつた。

その日は佛具屋の主人の催しで、又例の極道づれは午過
ぎから俵をつらねて大榮の門を出た。そして汽車で木幡ま

三



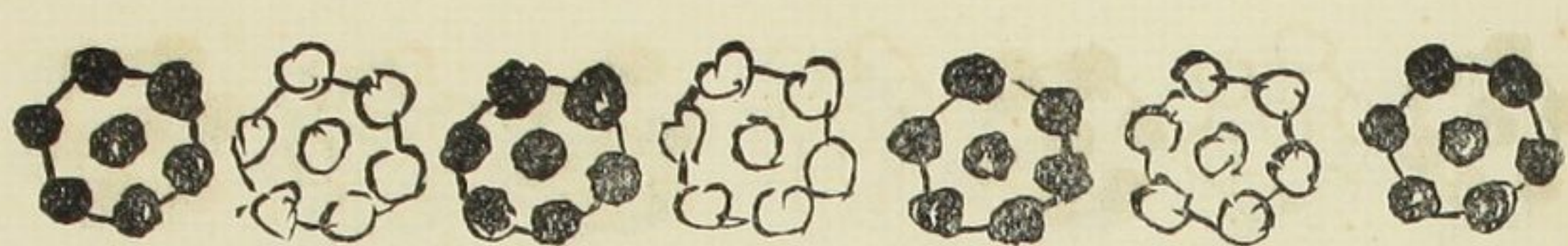


で行つて、そこから又八臺の俵をつらねて茶園のなかの日
盛りを清い水の流れる宇治の里へと志した。

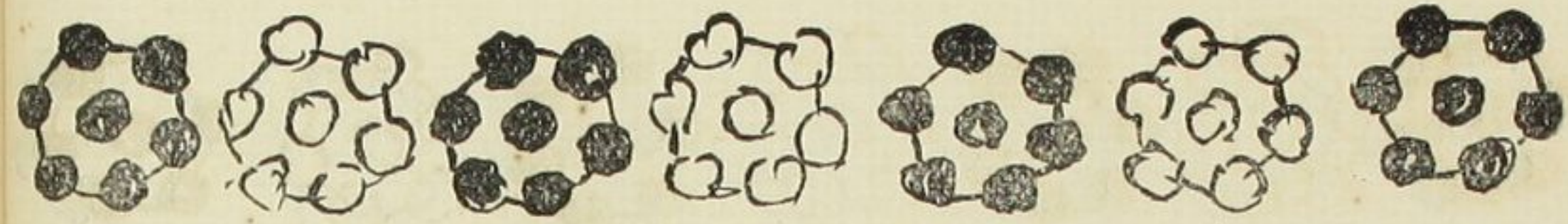
途々黄檗の御寺へもお詣りして、門前の茶店で鄙びた冷
酒の馬鹿をつくし、茶園に日蓋をかけてゐる茶摘女の唄を
驚ろかしたりしながら古風な勾欄のある宇治の長橋へかゝ
つたのはもう汗を催ほすくらゐな日射しが愛宕の峯へ春く
頃ほひであつた。

近江境の連峯は青々と燃えたつて、そこにも五月がのん
びりした夢をみてゐる。山々が両方から立重なつた谿間に
はそれでもまだ春が残つてゐて、紫に澄んだ急瀬は比良邊
の雪解の水か、石山の櫻を溶かしてゐた水か、そこはかと
ない花の匂ひをば浮べてゐるやうにも思はれ、十三重の魚



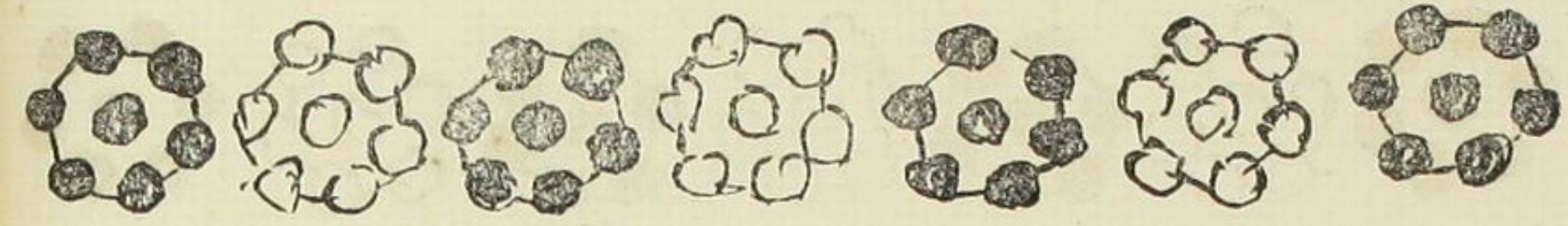


間もなく日はとつぷりと暮れてしまつた。
 その夜である。
 御幸町の先生は藝妓の花之助と、それから宿屋のぼんち
 は同じく藝妓の勝千代と、粹がきいたかきかぬかしてひと
 足さきへどこかの座敷へ姿を隠してしまつた。そして佛具
 屋の主人は一番しまひまで座に残つて、京都から持つて來
 させた鷺しらすを着にちびちび盃をあげてゐたが、これも
 いつの間にか姿を消してしまつた。
 跡に残つた菊勇はほの暗い紙燭の影にしよんぼり坐つて
 袋のなかゝらそつと押繪の人形と小鞠を出して人知れず樂
 しんでゐたが、そこへ大榮のお母はんがにやにや笑ひなが
 ら入つて來て、



供養の寶塔も白く洒れて、浮舟の洲には蘆荻がもう行々子
 の巢をつくつてゐる。そして平等院のこんもりした樹立に
 も、堤の並樹にも青葉が重々しく匂つてゐるのである。
 俣の上から振顧つて川しもの方を眺めると、伏見、中書
 島、さては淀、八幡につゞく川沿ひの平野や巨掠の池は唯
 みる蘆荻の緑と、菜の花の黄で、一筋の流れが盡きるところ
 には西山城の山々が日射を斜にそらして夢よりも淡く煙
 つてゐる。河面からは下り船の艦聲もたえて、空には揚雲
 雀の囀りだけが喧すしい。
 一行は先づ菊屋の門で轆棒を下ろさせた。
 「お越しやす お越しやす。」の聲に迎へられて、川つきの
 座敷へ通されると、すぐまた酒になつて、河原へ出て遊ぶ





「あんたまあいつまでそんなものを大事だいじにしてゐるのや。ほゝゝゝ。」と笑わらひながらじつと菊勇きくゆうの顔かほをみつめたが、少しば時ときたつと、笑わらつてゐたお母かあはんの眼めは妙めづに嚴こらしくなつて来て、そこにあつた湯呑ゆのみに水みづ注みしの水みづをつぐとお盆ぼんのまゝ菊勇きくゆうの方ほうへ突き寄よせて、

「さあ、あんたこの水みづを持もつてあこの旦那だんなはんのところへいといでやす。行儀ぎやうぎようするのえ。」

菊勇きくゆうは黙だまつてそのお盆ぼんを持もつて廊下らうかづたひに離はなれの方ほうへ歩いて行いつた。お母かあはんはその足音あしおとにじつと聞き耳きみみをたてた。

夢占ゆめうらゆめ占うらはかうして敢あへなく解とけてしまつても、あの菊勇きくゆうが阿呆あほうと笑わらはれぬ日はいつになつたら來くるとであらう。

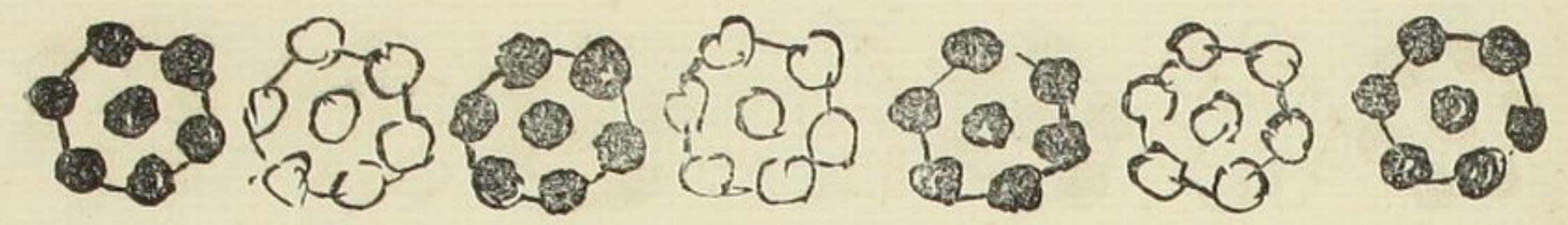


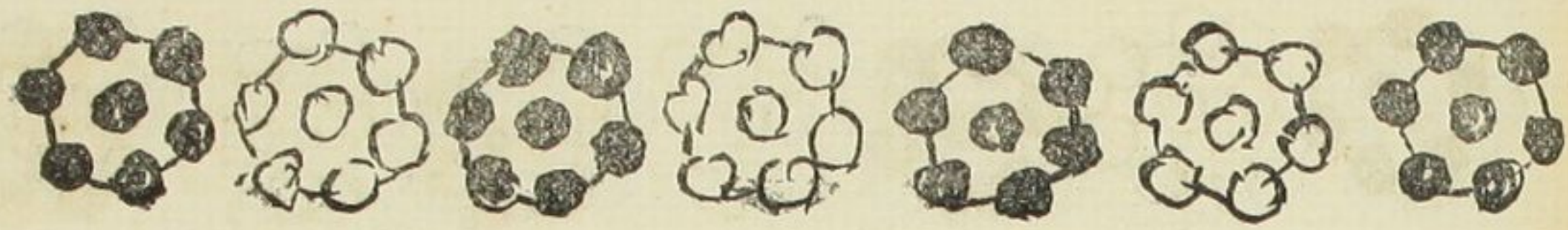
都踊

君は小鼓打つと云ふ、都をどりをひとをどり。

夜よごとくに都みやこをどりを見みにゆきぬ歌うたの友ともなる京みやこのたはれを

繪えのごとくつなぎ團子だんごの皿さら置おきぬ都みやこをどりの番組ばんぐみのうへ

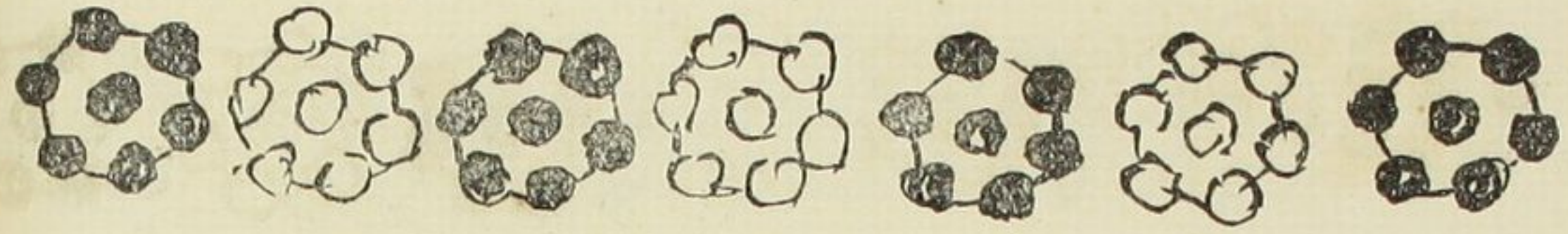




次の間に君の脱ぎたる舞まひころもありてな
まめく夜半よはなりしかな

いつの一夜ぞ。舞ころものあるじは誰ぞ。
いづれは春の夜の夢とおもへば、あかつきがたの口
惜しさ思ひ遣られていとをかし。

一夜

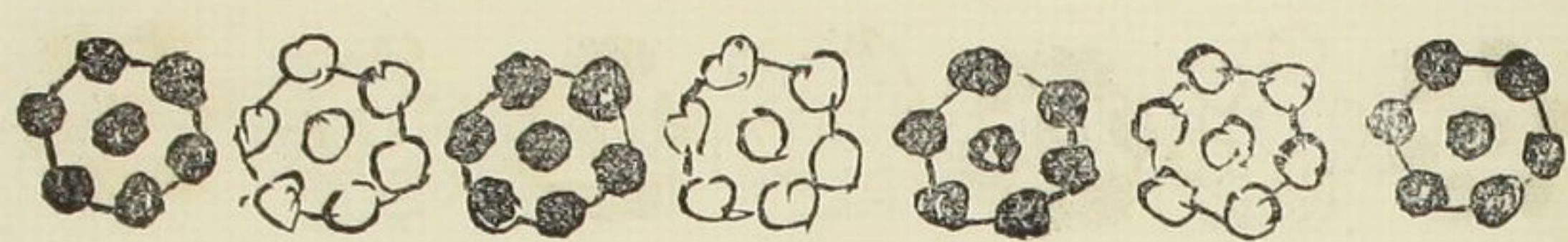


舞扇

忘れてゆきし舞扇をひらけば、涙のごとくはらばら
と、金泥われの膝にこぼれぬ。あるじに別れて悲し
かりけむ。

よきひとと聴ききて心こころも急せくままに忘わすれて
ゆきし舞扇まひあふぎかな

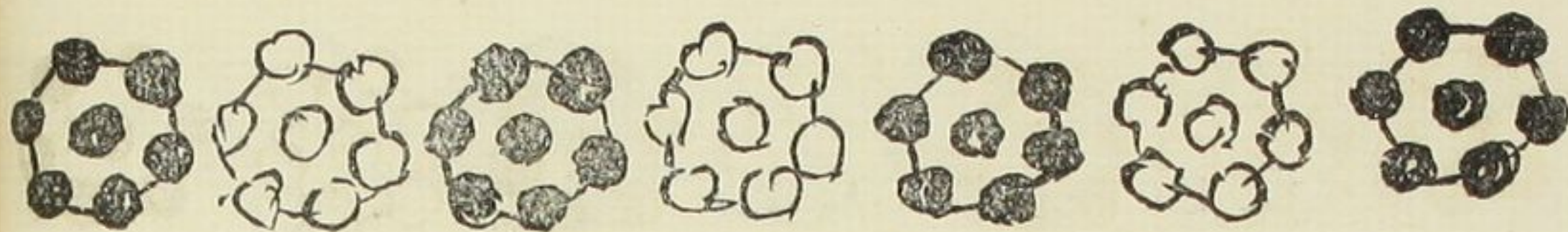




わが家の燕の巢をば見に来ずやなどと屋
 形に誘ひたまひぬ
 悪僧が磔を打ちて殺したる燕の骸に泣く
 は誰が子ぞ

燕

ふたたび京をおとづるるまで、われな忘れそ、つばくらめ。




春 寒

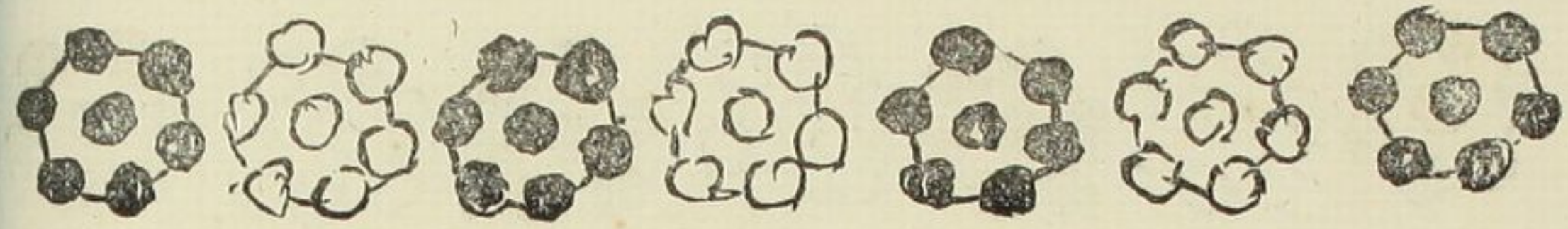
舞ころも脱ぎ棄つるとき悲しさはいかばかりぞ。
 われは舞姫に逢ふことに襟かへの日のかなしみを思ふ。

襟かへの日もちかづきぬ舞姫が春の寒さを
 を思ひ知るるとき





あまのこ




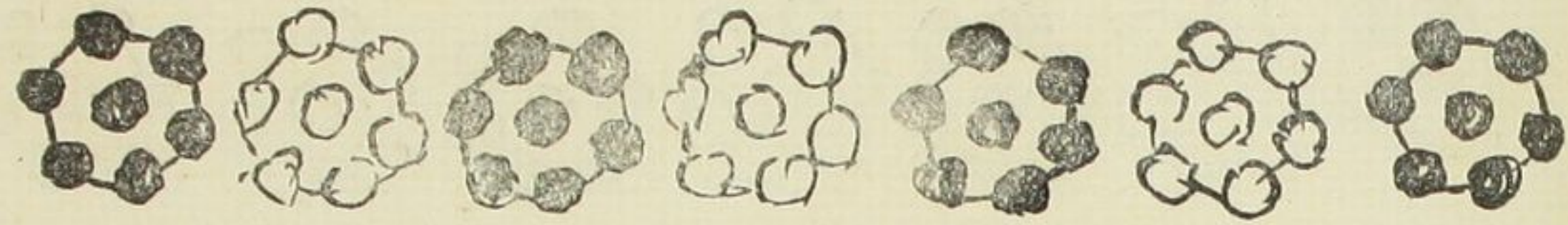
逢 状

逢状は殿達の見るものでなし。——遊魚。

わが思ふ子の逢状にふと見たる仇人の名
 の妬ましきかな

五二

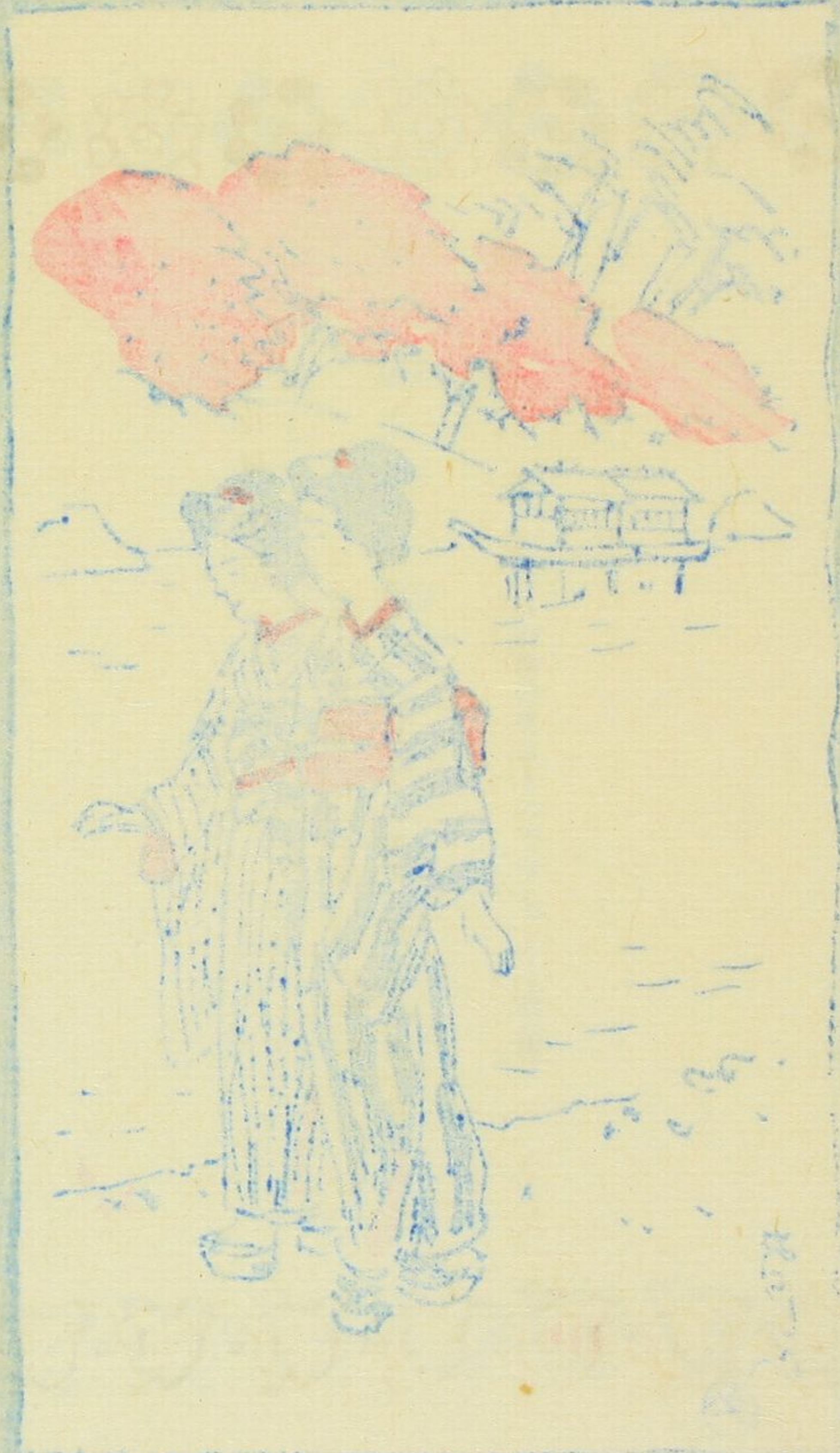


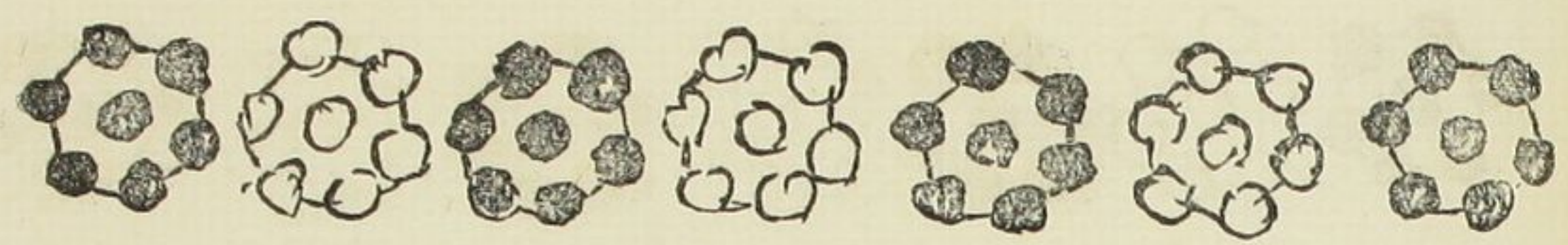


る 夜半となりぬる
 ゆく 春の花見小路に 月さして 鏡花めきた

花見小路

鏡花子の京を描きたる小説に「揚柳歌」あり。花見小路をゆくことに、この美しく怪しき物語を思ふ。

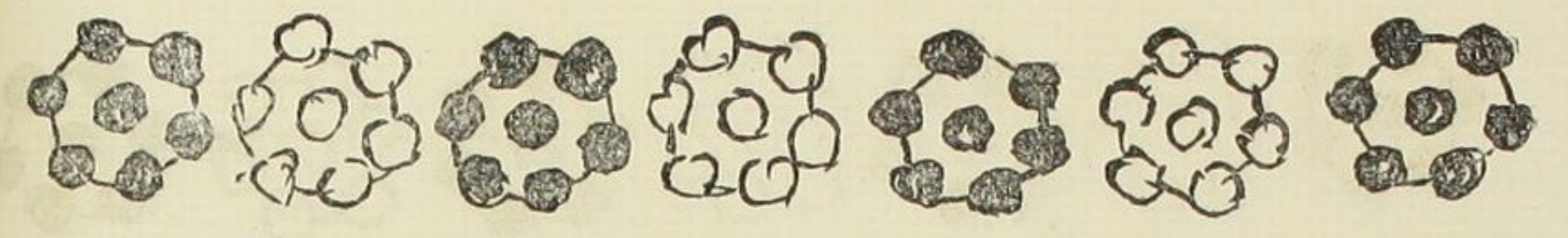




書まだくみの顎あごの髻ひげよな舞まひ姫ひめがをかしとわ
らふ顎あごの髻ひげよな

書伯

なにかしの書伯と呼ぶるひと、舞姫のてんごう
口やはかのかれじ。書伯よ、君をわらふ舞姫はゆめ
美しく描きたまふな。

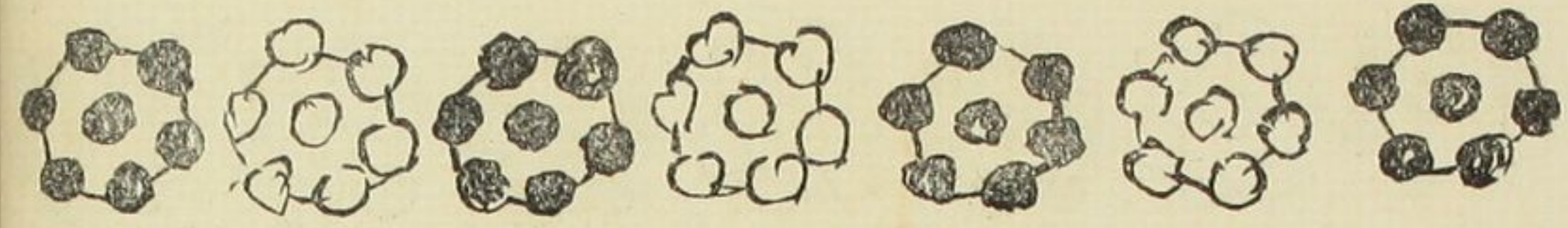


清水

これも或る夜の夢ならむ。あまりに夢のおほきな
れば。

清き水みづの舞まひ臺たいを下おりし蝶てふふたつやがて二ふた人り
の舞まひ姫ひめとなる



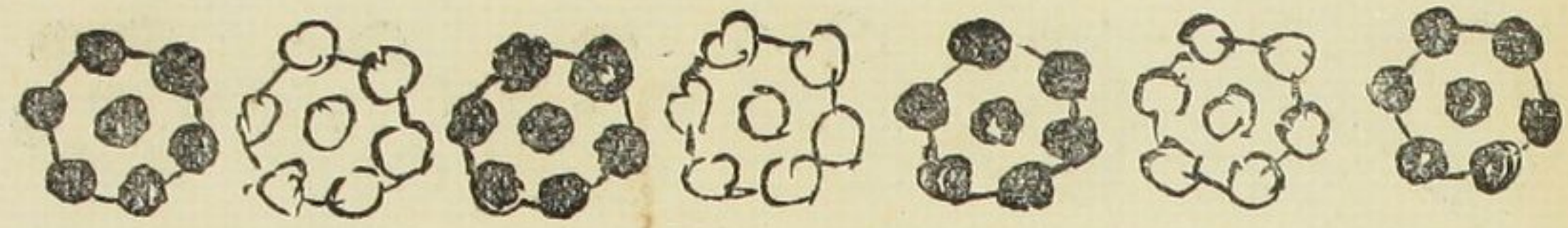


作者

われもいつしか作者の群に、數へらるる身とはなりぬ。なまじこの世に名を知られて、生耻さらすその果は、いづこいつまでさすらふ身ぞ。

作者などはれがましくも呼ばれつつ祇園
 に来しも春なりしかな





糺の森

……舞臺は唯見る一面に吉野の櫻雲で、薄紅色のまぼろしの間には、今にも揚雲雀が朗らかに啼きつれながら舞ひたちさうな春草の萌えた山膚がみえてゐる。出語りの太夫の頬に寄る皺の數までよまれるやうな明るい光が何處からともなくその書割の面にかつと燃えて、甲に入り呂に移る唄聲は三味線の忍び音にまつはりながら綿々とした情緒の波を織りだしてゆく。ぬけるほど色の白い狐忠信と、静





御前とがそのなかで初音の鼓をかせに使ひながら狂喋の翅のやうに艶やかな衣裳の袖をふるはしてゐるのである。

大阪から来た若い役者の連中で見物に来てゐた舞妓の里菊はそこまで見てくると、芝居のなかに溢れた温氣にむされて、ぐらぐらと眩暈を催して来た。昨夜富永町の大千賀のおはなで春の夜寒に曉方ちかくまでも雑魚寝の夢を結ぶことが出来なかつたせゐか、今日は朝から風邪ごゝちで、ふだんから體の弱い彼女はともすると頭が熱つぱく浮いてくるやうな氣がしてならないのであつた。じつと眼を据ゑてゐると、舞臺のうへにあるものはいつの間にか薄い靄のやうになつてくる。旋轉し始める。役者の顔も天井から垂れ下つた紅や青の幟も重苦しく眼先へ押し重なつて、體



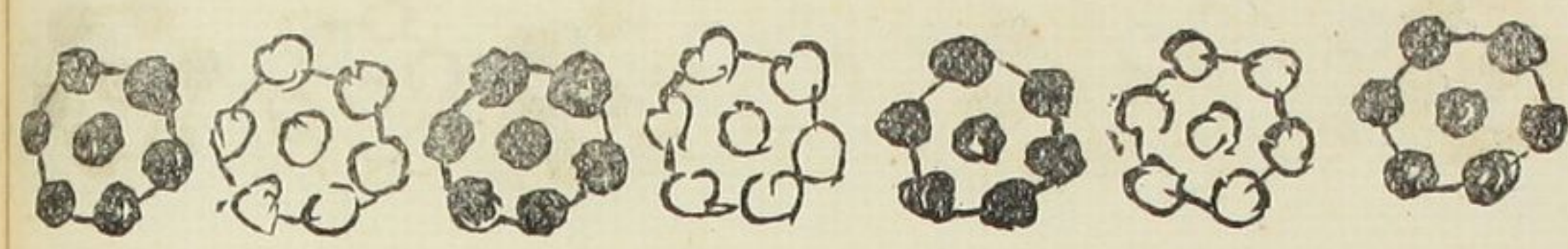
ごと何處か深いところへ沈んでゆくやうな氣がして来る。彼女は到頭我慢が出来なくなつて、櫻の花櫛をさした京風の重い鬘をその儘がくりと土間の棧のうへへ俯向けにしてしまつた。重ねた兩方の手の甲へのせた額はじつとり汗ばむでうはつらだけが火のやうに燃えてゐた。

「ほ、里菊はん。あんたどうおしたんえ。」すぐ後に坐つてゐた老妓の松吉はびつくりして、彼女の肩へ手をかけながら訊いた。

「どないにもしまへんけど、私、眼がまうて……。」里菊は俯伏せになつたまゝ切なさうに呟いて、

「なあ、へ、姐はん。えらい濟まんこといつけど、どうぞ冷たい茶ひとつよんどくりやはいな。」





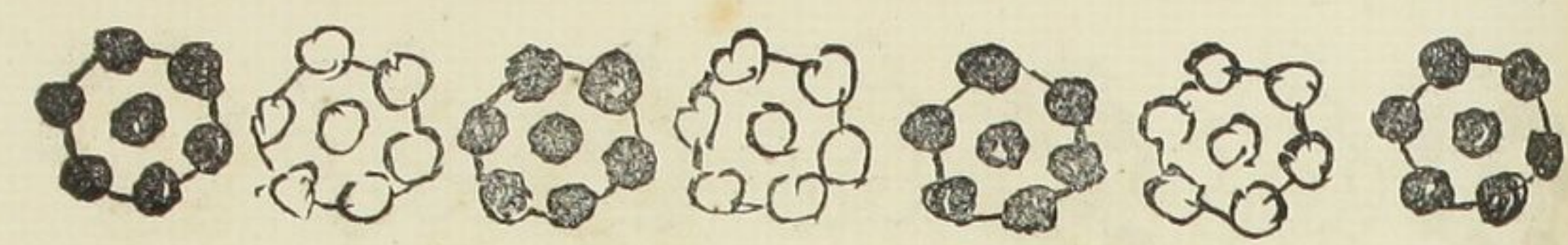
傍にゐた藝妓の春菊は惜しさうに舞臺から眼を離しながらありあふ茶碗に茶を注いでだした。里菊は

「へ、おほきに。」と、消え入るやうに云つて、慄へる手先でそれを受取つてそうつとひとくち唇へ含んだが、そのさまを見てゐた松吉は心配さうな顔色になつて、

「あまり時候が暖いさかい、のぼせたんやな。顔色もえらう悪いえ。それやつたらもう無理せんと、早うお歸りやす明日はあん都踊の出番やないか。」

春菊はその言葉を横合から引取つて、

「さうどす、さうどす。茶席にも出んならん大事な體や。早う歸つて、おかあはんにあんじよう云うて、寝んどゐやすな。」



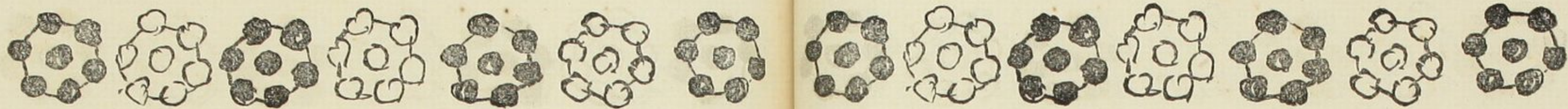
里菊はさう云はれるといつても親切にいたはつて呉れる姐はん達の情がしみぐ覺えられて、なにかなしに薄く眼を濕ませてしまつた。とつて十五の感じ易い胸には、春の日の惱ましさか今日此頃は自分でもそれと知られるくらゐ深くふかく根ざして、ふとした拍子にも妙に頼りない心持ちが眼先を暗くしてしまふ。

里菊はやがて心をきめて、

「ほんなら濟んまへけんど、私ひとりお先へ往なして貰ひまつさ。」と、云ひながら、友禪の振袖を引絞つてしなな起ち上つた。

周圍にゐた観客達は緋毛氈の懸布のなかゝら立つ舞妓の美しさに思はず此方へ顔を振向けた。





ひとつ先の櫛にゐたおつれの小菊はそのさまを氣の毒さうに見てゐたが、これもすらりと立ち上つて、

「姐はん、私ももう往んでよろしいか。里菊はん氣分が悪うおしたら私をこまで送つていてあげまつさ。私、おはなで大榮はんへ廻らんまりまへんさかい。」

二人はその儘そつと裏の戸をあけて、姐はん達に見送られながら廊下へ出た。

芝居茶屋の門を出ると、眞蒼に芽をふいた柳の樹蔭からはすぐ下に加茂の河原がひろくとうちひらけてみえる。

向岸の矢尾政や千茂登や西石垣の家並は薄靄に煙つて、灯の影がまるで紅い繪の具をしたゝらせたやうにその底に點々と滲んでゐる。そして四條の橋の袂まで歩いてくると、

六三

彼等はその時になつてはじめて今宵もまた東山の頂に夢のやうな薄月がのぼつてゐるのを知つた。薄月の影は町の

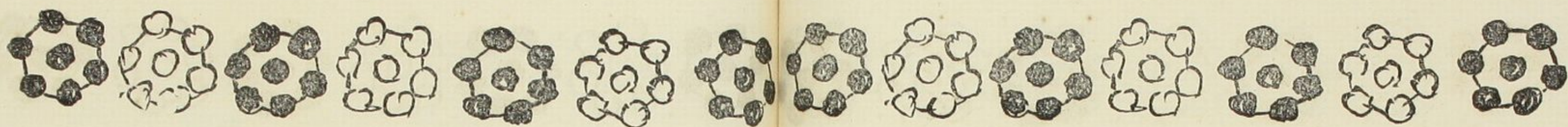
灯の色に溶けて、そこいらには狐でも化けて通りさうなほつかりした春風の吹くなかに、都踊を見にゆく人や、夜櫻へ行く人が肩と肩とを摺りあはせながら歩いてゐる。

「ほ、えらい人どすやないか。こないに行かはるのんがみんな京の人どすやるか。」小菊は呆れたやうに可愛らしい眼をくるく／＼させながら云ふ。

「さうどすなあ、大方京の人どつしやろえ。」と、里菊は言葉小なな答へて、氣が浮かぬやうに道の片陰をえつては歩いてゆく。

「そやけど、それやつたらえらいとすえなあ。こないにし





て數ねて見たら、大方なんぼほどゐやはりまつしやろな。」
「そんなん分らしまへん。」

「ほゝゝゝ。私も阿呆やな。……ほ、あこから來やはる人
はおのぼりはんえ。怪體な風をしとゐやすやないか。ほし
てきつう酔ふとゐやすえなあ。」

小菊は彼方から春風のなかを千鳥足に歩いて來る本願寺
詣らしい四五人の地方人を指さしながら無邪氣な聲で笑ひ
だしたが、そのひと連れが酔つたまぎれにさも物珍らしさ
うに彼等の方へ寄つてくるのを見ると、今度は急に顔色を
かへて里菊の袂をとりながら小走りに道の向側へ驅けぬけ
て行つた。

繩手から富永町へ入る横丁の角まで來ると二人はそこで

右と左へ別れなければならなかつた。

「なあ、へ、里菊はん。ほんなら私こゝで別れまつせ。早
う家へ歸つてあんじようしとゐやす。ほして明日また逢ひ
まへういな。」

「おほきに、ほんならよろしい。」

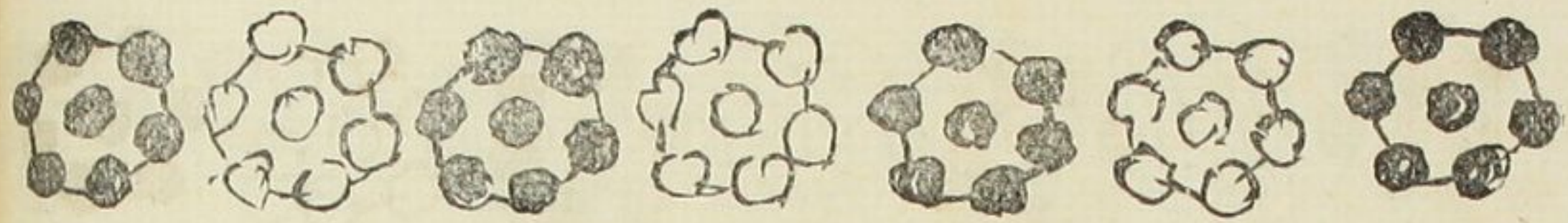
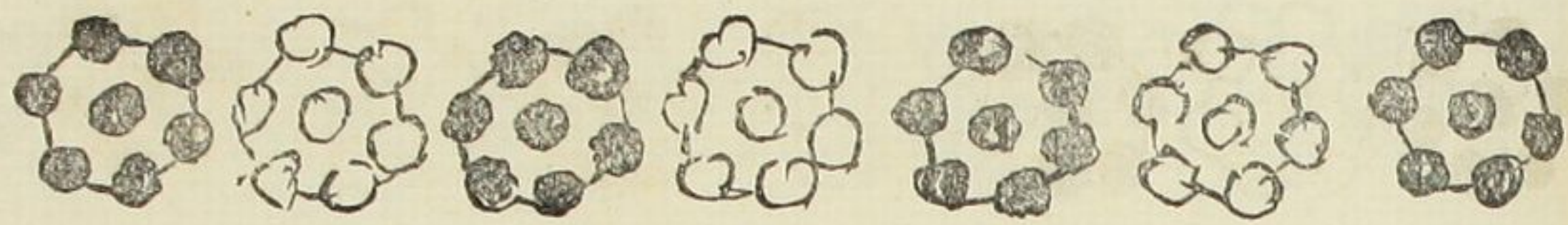
「さいなら。」

「さいなら。」

ひとつの木履の音はそのまゝ横丁の宵闇へころゝと消
えてゆく。

たつたひとりになると里菊は氣分は悪いながら急にうす
ら寂しくなつた。この儘屋形へ歸つて臥床へ入る氣にはど
うしてもなれない。その晩は月例の六部講なので、晝でも





小暗いあの奥の間では今頃池松のおかあはんや、大利の爺さんが集まつて、陰氣な鉦を叩きながら和讃をあげてゐるに相違ない。さう思ふと彼女の耳には地の底へ滅入つてゆくやうなその鉦の音が聞えて来て、さうしてゐても胸がうづくやうに寂しくなつて来るので、到頭また群衆を慕つて我れにもなく四條通へ歸つて来た。

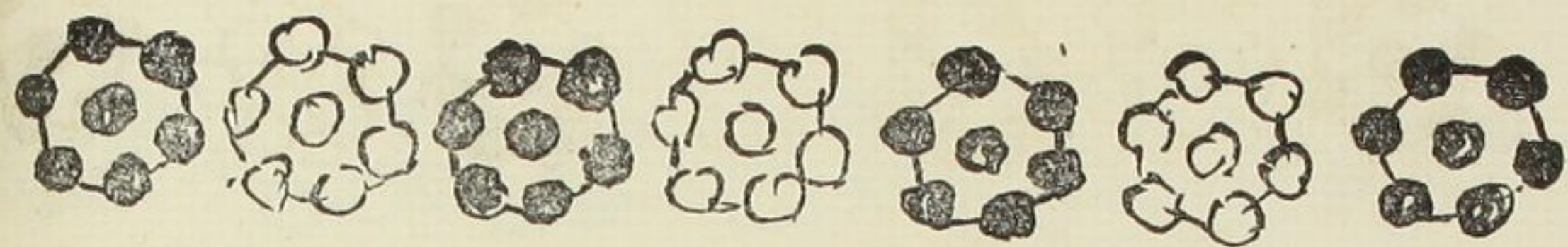
歩いてゐるといくらか氣持ちがなほるやうなので、足に任せて圓山まであがつてみると、さすがに廣い公園の樹の間も行樂を追ふ人の群で一杯になつてゐた。白鶴、澤之鶴など、銘酒の名を書いた小旗は茶店々々の軒にひらめいて、紅毛氈の映りはえる葦簀の陰からは煮ものや酒の匂ひと一緒に、

「お寄りやす。」

「おはいりやす。」と、鼻へかゝる尻あがりな聲で婢衆達が群れつどふ客を呼んでゐる。廣場には玩具を賣る露店や、手品使ひ、猿まはしのやうなものまでが、眞黒な人の群を呼び集めて、風船の笛、子供の喚く聲、さては又商人の賣聲などが一脈の雑音になつて、燃えのぼるカンテラの煙と一緒に祇園社の森の方へ流れてゆく。

名代の枝垂櫻はもう少しづゝ散りかけてゐた。柵の周圍には篝火の火影に幾組となく紅毛氈を敷いた花見連れがあつて、孫子のありさうな老婆までが浮かれて三味線を弾いたり亂舞したりしてゐる。雪のやうな花びらは時折り微風につれて篝火の煙にもつれながらその群のうへへはらく

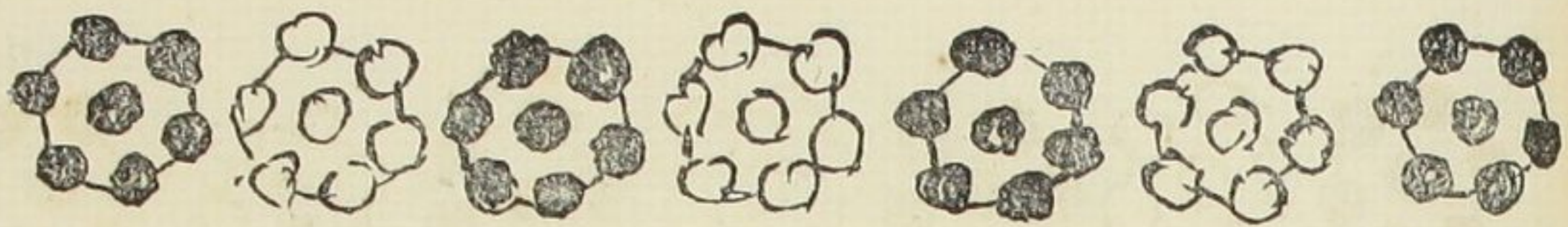




と散りかゝるのであつた。

とある群の前まで来かゝると餘り騒ぎが面白さうなので里菊もつい足をひかれて立寄つてみた。そこには下京あたりの小商人連の花見とみえて、三十がらみの眉を落とした女房達が茶屋から借りて来た縁臺のうへへ坐つたり腰をかいたりしながらざやあぐ騒いでゐるのであつた。重箱につめた肴も大方は空になつて、煮ぬきの卵の殻や、盃の散亂したなかで今ひとりの男が紅手拭を肩へかけて妙に色づくりながら踊つてゐる。膝をくづした女づれの頬には淫らな酒の酔ひがほんのり燃えて、節面白い流行唄がその口から次々と唄はれる。

里菊は少時の間群衆の後から伸びあがつてみてゐたが、



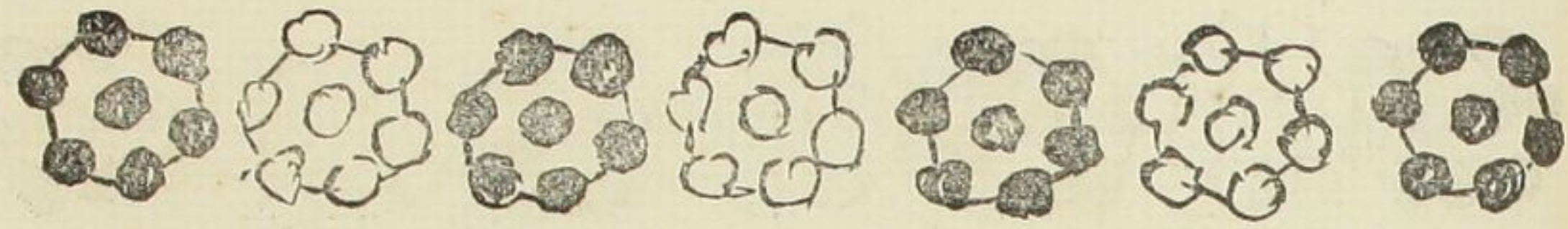
その時、自分のすぐ傍に青く剃つた頭がみえて、時々ほの白い顔がそつと此方を見上げるのに氣がついた。と、みると、それは屋形の寺に當る宗海寺の了念といふ小坊主だつた。年はまだ十三だつたが、出家には惜しいほどの美少年で、人並すぐれて小柄なので、黒の法衣を着た姿がまるで遠忌の折の侍童のやうに可愛かつた。

「ほ、了念はんやおへんか。今頃何處へ？」里菊はぼうつと赧くなつて、それでも紅の青く光る唇には微笑みを浮かべながら小聲でつぶやいた。

了念はさう云ふ里菊の顔をうつとり見上げてゐたが、急に顔をそむけて、

「私、山までお使に來たんや。」と、膠もなく云ひ放つた。



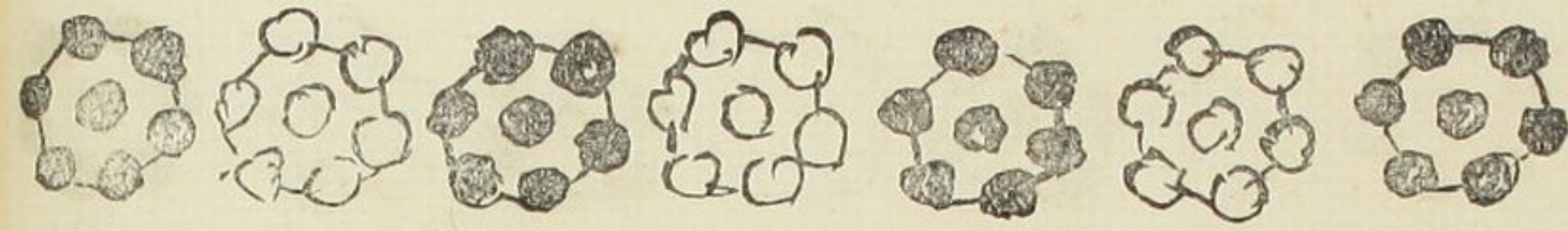


「たんどす？」里菊は黙つてゐるのも變だと思つたのか、やがて歩きながらこんな事を訊きだした。

「何の用で、そら云へんがな。」了念は人目が薄くなつたので里菊の方へ寄つて來ながら云つたが、「まあ、えゝわ。あなたのことやさかい、云うてもだんないやろ。私な、長いこと宗海寺に置いて貰うたけど、今度は近いうちに伊勢のお寺へ行かんならんのか。ほんでに今日は一日山へいてた。」

「へ、伊勢へおいきやすくて？ 阿呆らしい、嬲らんとおきやすな。」

「ほんまや。なんであんた嬲るもんかいな。」了念は不平さうに云つて、「伊勢の四日市たら云ふとこの大けなお寺へいて、その子になんのか。伊勢で遠いとい處やぜ。あんた



なるほどさう云へば、紫の鹽瀬に華頂山の櫻の紋どころを白く染めぬいた袱紗のかゝつた大文箱を大事さうに小脇に抱へてゐるのである。

「さうどつか。ほしてこれからお寺へお歸りやすのか？」

「う、……」了念は唇を引きすぼめながら無邪氣に答へる。

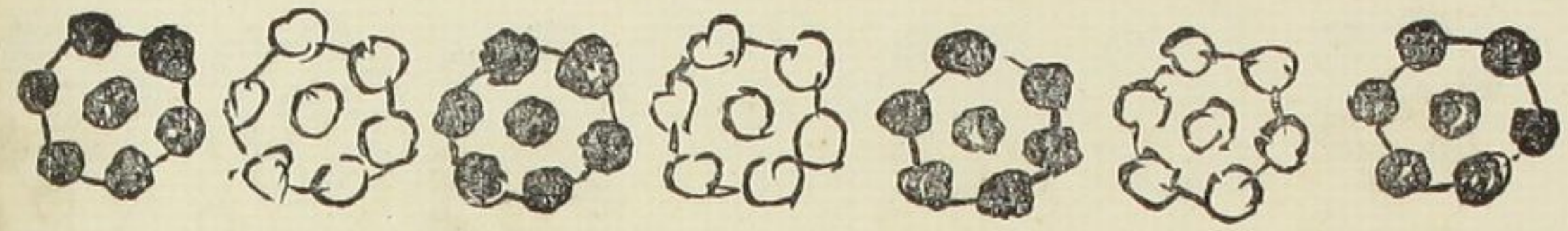
「ほんなら一緒にそこまで行きまへういな。私も家へ往なんなりまへんさかい。」

里菊はこの妙な出逢ひを四邊の人にぢろく見られるのが氣恥かしさに胸を躍らせながらそのまゝ又歩きだした。

了念はちよつと考へてゐたが、さりげない顔でとこ〜ついできた。

「なあ、へ、了念はん。あんたはん山へ何の御用でおいき





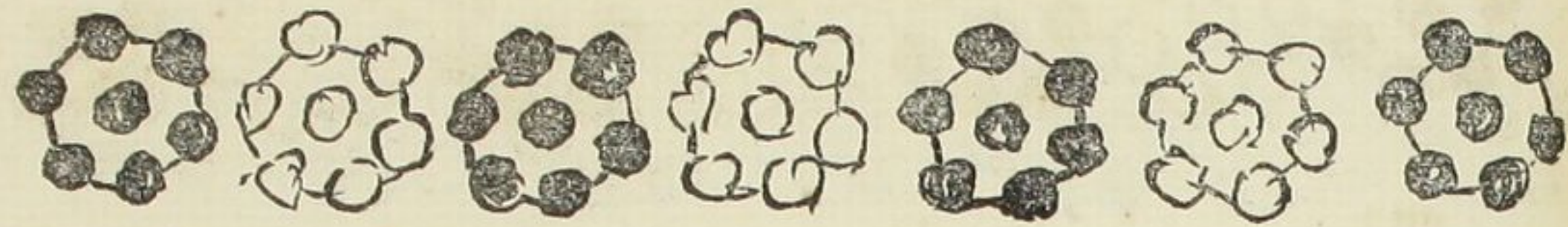
知つてるか。」

「知りまへん。そやけどほんまにおいきやすのか。」里菊は
まだ信じないやうに云つたが、了念が薄月の光に青頭を傾
げながら黙つて歩いてゆくさまを見ると急に心細さうな調
子になつて、「なあ、了念はん。ほんまのこといつか。好か
んこと。」

「なんぼ好かん云うたかて、もうあかんのや。私かてそん
な遠いとい處へいきたいことはないのやけど、その尼は
んの子にならんことには、もう宗海寺に置いてやらん云は
ゝるさかい、……。」

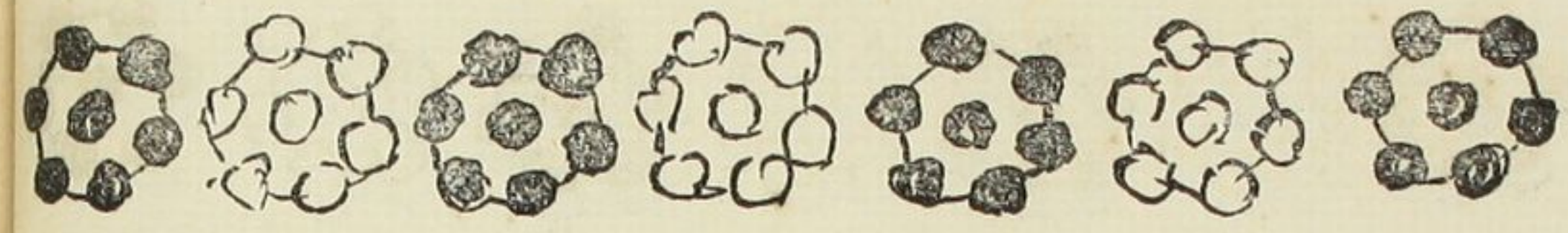
その言葉は云ふ了念よりも聞く里菊にはひとしほ悲しく
聞きなされた。なるほどさう云はれてみればたしかにあり

七三



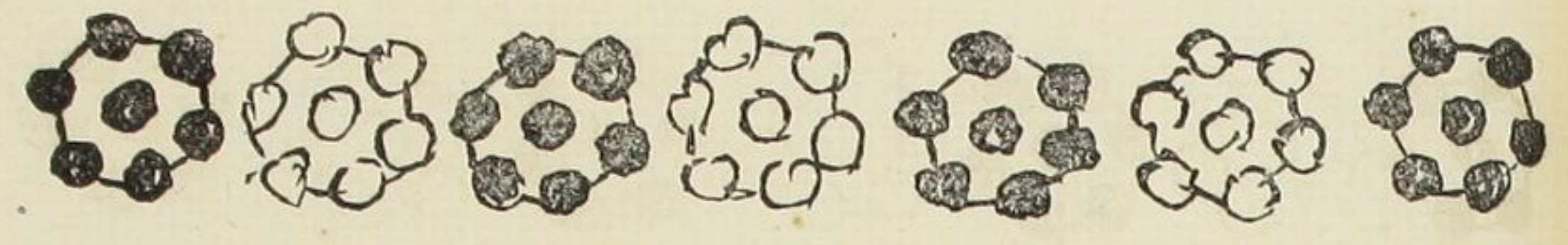
さうなことである。どつぞやも宗海寺のお住持はんが法事
で來られた折に、家のお母はんにこんなことを云うてゐら
れるのを聞いたことがあつた。了念は孤兒で、賢い子やさ
かい、どうぞして田舎のえゝ寺を貰うてやつて、夏安居や
秋の加行の折には御本山へあがれるやうにしてやつたら行
未はきつと見込みのある奴や、あんな美しい子やさかい、
萬が一をなごにでも魅入られたらもうどだいあかん、など
云つてゐられるのをちらりと耳にしたことがあつた。そ
れにうちうらの噂では、宗海寺も先住が極道をしやはつた
ゝめに今では内證もだいぶきついやうな様子である。さう
考へて來ると里菊にも了念のだしぬけな言葉がやつと確か
な事らしく思はれて來て、それと一緒に口には云へぬ悲し





さが胸に迫つて来た。もうずつと以前から知らず識らずのうちにこの美僧了念のことを何とか思つてゐたやうな氣もして、遠い遠い伊勢へ行つてしまふと聞くと、別れるのがひどく悲しいのであつた。

道はいつの間にか平野家の横から智恩院の山門の前へ出て、二人はうはの空で歩いてゐながらそれと氣がつく頃には、小堀の御門へ下りる廣道へ出てゐた。そこらは往き通ふ人影も稀で、薄月の射し迷ふ夜の闇には、道の兩側に咲亂れた櫻がしつきりなしにちら／＼音もなく散つてゐる。そして時偶行き逢ふ人は朧ろげな落花の間を歩いて來る二人をばあやかしとでも見るのか、誰れも彼も一度は必ずほの白い顔を此方へ振向けてゆく。



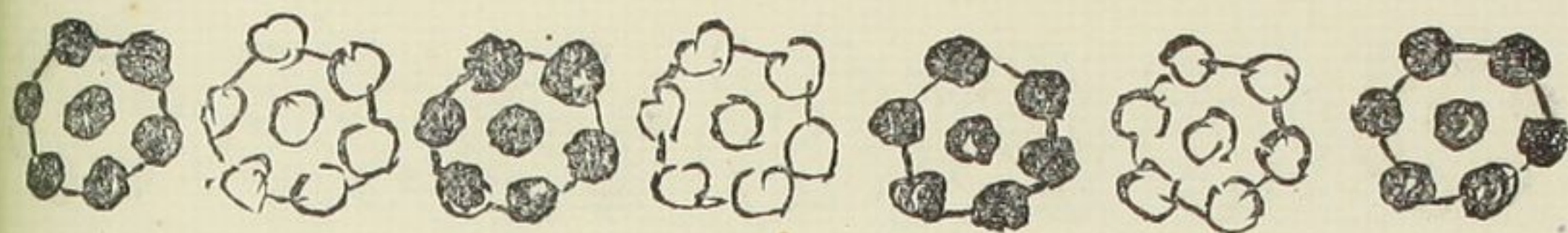
二三歩あとへ遅れた了念はふと里菊に追ひ絶つて、何と思つたか、小聲で

「舞妓はん」と、呼びかけた。
「そんな怪體なよびやうておすか。私には里菊ちふ名がありますさかい、名を呼んどくれやす。」

「ほんなら里菊はん。」
「好かんこと。」さう云ひながら里菊は何氣なく振り向いたが、その時了念の顔が餘り近く寄り添つてゐたので、思はず少し肩を斜めに引いた。了念の法衣には、山で佛前の鏡張りへでも坐つてゐたものと見えて、沈香の甘い匂ひがほのかにしみ残つてゐた。

「里菊はん。私、伊勢へ行くのは厭やなあ。京がいつち好





「きや。」

「ほんならもう行かんとおきやすな。私もあんたはんがお往にやしたら寂しうおすわ。」

了念はそれには返事をしなかつた。唯物思はしげに首を傾げて、朴の木齒の下駄で小石を蹴散らしながら歩いてゐたが、今度はまた此方を振返つて、

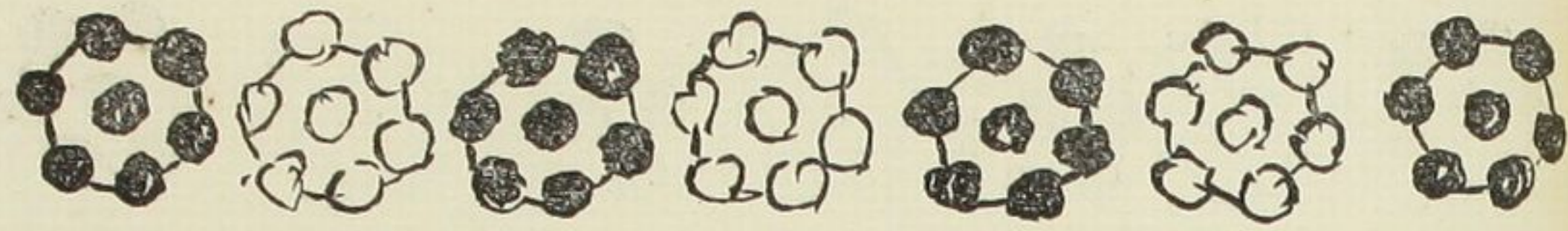
「なあ、里菊はん。私、をなごはん嫌ひえ。」

「なんでどす？」

「なんでどすて、をなごはんと一緒に道を歩いてると、何んやしら怪體なことがあるかして、よう人がみよるやないか。ほ、又見ていきよる。怪體な人やなあ。」

里菊はそれに答へるさへ何となくうら悲しかつた。





繩手の屋形の前まで歸つてくると、了念はつなぎ團子の
紅提灯のともつた格子先へ立止つて、名残惜しさうにして
ゐたが、やがて、

「なあ、里菊はん。しばらくあんたんとこへ寄せて貰うて
もよろしか。あんたのうちのお母はんはえゝもんよんどく
れやすさかい、私好きや。」

「どうぞお寄りやすな。そやけどそないに遅うなつても大
事おへんか。」

「だんないとも。山へ行くといつかて御本堂廻りして歸る
のやさかい。」了念は事もなげに云つたが、ふと氣づいたや
うに、「そやけど、なあ、里菊はん。さつきに云うた伊勢へ
いくちふこと誰れにも云はんとおいとくれやすや。まだ隠



してあるのやさかい、和尚さんに知れると、私、きついめに叱られんならんよつてな。」

「私、云はしまへん。」

里菊はさう云ひながらそつと小格子を開けた。なかうらは今まで戸口へ来て待ちかねてでもゐたやうに鉦の音が寂しく聞えて来た。

「今戻りました。おかあはん、宗海寺の了念はんが来やりましたえ。」里菊はそのまゝ藍暖簾の下をくいつて奥の方へ入つて行つたが、その時、奥では和讃の聲がふつりと途切れて、おかあはんの聲が、

「あ、お歸り。あんた何處へ行てたんえ。今南座から喜久彌はんが戻つて来やはつて、あんた氣分が悪い云ふてささ

へ往なはつたちはゝるさかい、皆して心配してたところや」

「えらい濟んまへん。あんまり氣分が悪うおしたさかい、

山へいてました。あこで了念はん逢ひましたんどつせ。」

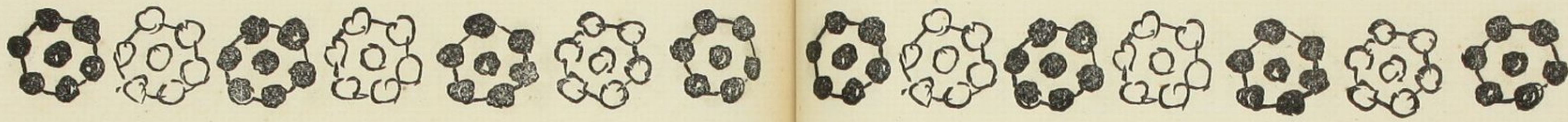
「さうか。ほしてもう氣色はすつぱりしたんか。」

「へ、もう苦しいことおへん。」

二人の話は暖簾の陰でかはされてゐるので向ふ側の小障子にはだらりを垂らした里菊の姿が薄墨で描かれた玉菊の亡魂のやうに映つてゐる。鉦の音は陰氣に沈んでも、春の夜の艶めいた心持ちはそこにも佇んでゐるのであつた。

やがておかあはんは小障子のところから顔だけだして、「ほ、了念はん。よう來とくれやした。私はまだお勤めが濟んまへんさかい、あんた奥へいて遊んでおとくれやす。」





あとで私もいきますさかい。」

「へ、おうきに。」了念は紫の袷紗を恭しく持ちかへながら滑稽けた様子をして挨拶した。

里菊はそのまゝ了念を上へあがらせて、階子段の下の暗い小廊下から自分達の部屋の方へ連れていつた。籠行燈の光はほの暗く縁板にしみついて、そこまで来ると、二階座敷には誰れぞお客が散財してゐると見えて、三挺ばかりの三味線の音が何處からともなく洩れ聞えてきた。

舞妓や藝妓達の部屋は加茂川に面した八畳の下座敷だつた。すぐ隣りの臺所口から河岸へ出られるやうになつてゐて、二丁ばかり下で落ちる疏水の水音がその窓下からひそひそと匂ひあがつてる。そこには舞妓の喜久彌に花勇、そ

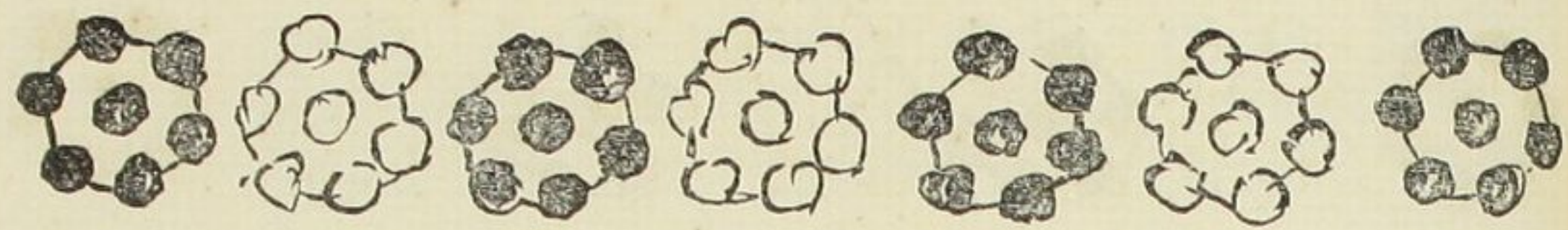
れに藝妓の里子の三人が今芝居から歸つて来たばかりと見えて、だらりや、友禪の襲ねを落花のやうに四邊へ引散らしながら夢中になつて芝居ばなしをしてゐるところだつた。暖かさにのぼせてしどけなくぬぎかけた着物の胸からは、紙燭の光のなかに、緋鹿の子の襦袢が艶めかしくこぼれてその間にみえる足袋の白さまでが妙に春の宵らしい氣持ちを湧かせる。

思ひがけない了念が入つて来るのをみると、彼等はぴたりと話をやめて、

「ほ、了念はん。お越し。」と、一様に云つて皆座を開きだした。

「なあ、へ、此處へ来て坐つとくれやす。」と、眞先に喜久





了念はさう云はれると急にてれたやうに外方を向いてしまつた。

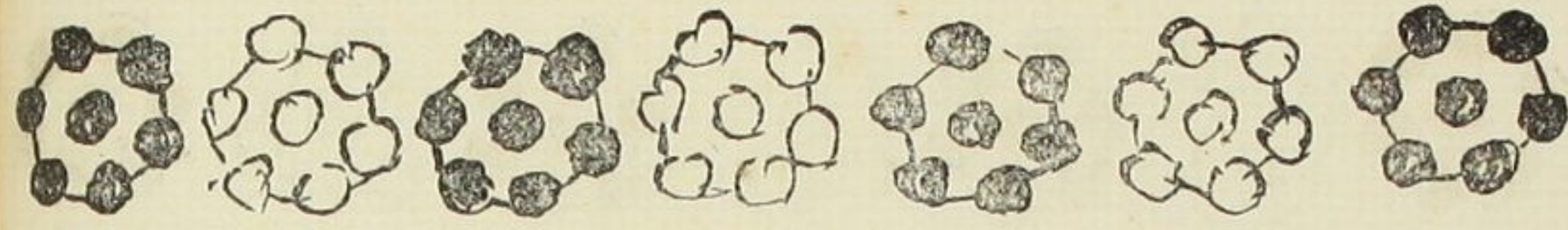
花勇はわつと噴き笑して、

「ほ、きつい氣！ お坊んさんがそんなことお云ひやしても大事おへんか。和尚さんが今度めに來やはつたら云ひまつせ。」

皆はその頓狂な聲でくすくす笑ひだしてしまつた。

喜久彌は里菊の傍へ摺り寄つて、氣分はもうよろしいかなど、頻りに心配さうに聞いてゐたが、やがて

「なあ、里菊はん。私ら今こゝでせんど云ひあひをしてたんどすが、あんたはんもひとくち入つとくれやすな。今日の芝居でな、「堀川」がありましたやろ。あのなかで猿まはし



彌が云ふと、今度は花勇が、

「私のそばへお坐りやすな。私、長いこと逢はしまへんなあ。」

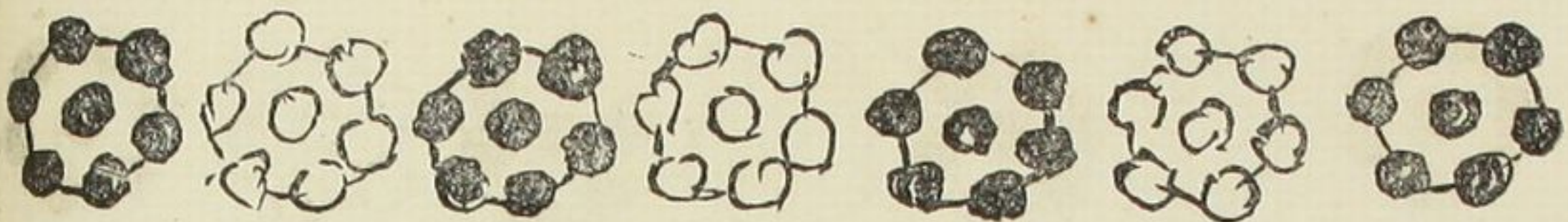
了念は文箱を持ち扱ひながら間うちを胸はしてゐたが、にこ〜笑ひながら到頭里菊の側へ引添うてびたりと坐つた。

「私、こゝがえ〜。里菊はんがいつち好きや。」

「ふわツ。なんで里菊はんをそないにお好きやすのか。」花勇はすぐさま詰るやうに云ふ。

「それやつたら知れてますやないか。」喜久彌はその言葉を受けて、小さな妬みを眼に輝かしながら、「そら里菊はんがいつち美しうおすすさかいなあ。」



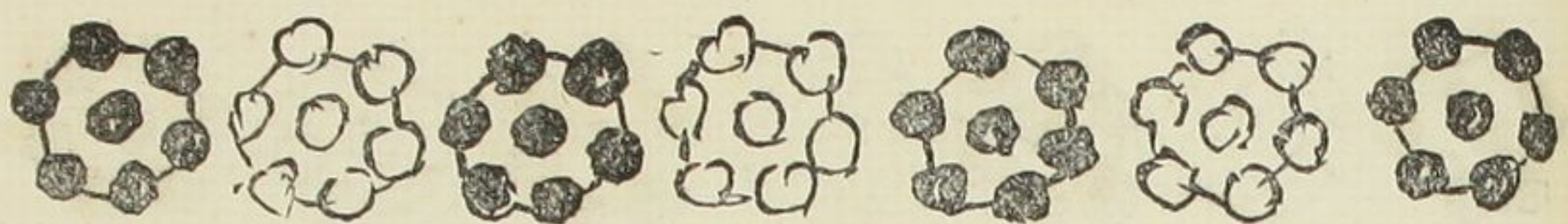


になつて出ていかはるお俊と傳兵衛はほんまに心中しやは
 るのどつしやるか。それとも助からはるのどつしやるか。
 あんたはんどつちやとお思ひやす。

里菊は餘りだしぬけな問ひなので答へ兼ねたが、やがて
 いつぞや大阪のお客から聞かして貰つた話を思ひだして、
 「そらあんたはん、心中しやはるにきまつたるやないか。

義太夫はんが云はる文句にも、ほれ、何たら云うた、「名
 を繪草紙に……名を繪草紙に……やつす姿も女夫づれ、名
 を繪草紙に聖護院」や。そや、「森をあてどに辿りゆく」ち
 はるやおへんか。ほんでにあこの聖護院の森で死なはる
 のやわ。」

「さうどつか。そやけど聖護院に森てありまつか。私、せ



んど銀閣寺へ連れつて貰うた折に聖護院とほりましたけど
 何もあらへんかつたわ。」

「そら昔のこといすやないか。」里菊は笑ひながら云つたが
 ふとまた別なことを思ひだして「そやけど、私こんなこと
 も聞きましたえ。聖護院いはるけど、ほんまはそやなう
 て、糺の森で死なはつたちふ話もあるのどすてな。心中す
 るのやつたら糺の森の方がよろしいわ。」

「私もそないに思ひます。せんど葵まつりの折にいてみま
 したけど、加茂のお宮は芝居よりも綺麗なわ。あこで成駒
 屋はんの忠信と、福助はんの静が心中しやはるのやつたら
 さぞ宜しうおつしやるなあ。」喜久彌は今まで観てゐた南座
 の舞臺をまぎりと眼先に描き出してゐるやうな眼つきを





した。

「阿呆らしい。そんな怪體なことでおすか。忠信の惚れて
やはるのは静やないさかい、心中しやはる道理がないわ。」
藝妓の里子は笑ひながら口を挿れる。

「姐はん、さうかて、二人とも美しいうつくしい人どすや
ないか。」

「ほゝゝゝ。あんたも阿呆やなあ。美しい人同志かて必ず
心中しやはるときまつたもんやおへんえ。」

花勇の罪のない云ひ方はみんなを笑はせた。

了念は怪訝さうな眼つきをして云ひあひをしてゐる妓達
の顔をみくらべてゐたが、やつと眞顔になつて、

「なあ、その心中ちや何んやね。私、分らへん。」

「ほゝゝゝ。こら出來ましたな。ほんまに了念はんには分
りまへんやろ。」里子は手を拍つて笑つて、「あんたはん方そ
んなこと知らいでも宜しいわ、お坊さんどすさかい。」

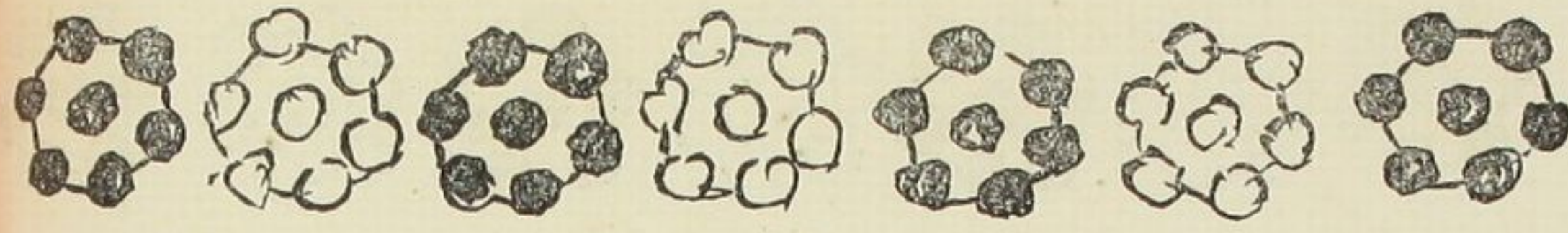
「さうか。そやけどお坊さんかて、世の中のことは何んで
も知いではいかんて、私のとこの和尚さんは云はゝるえ。」
了念はきよとりとしたこましくくれた顔をして云つた。

「ほゝゝゝ。あの顔が可笑しいわ。今にあんたはんにもそ
れがよう分るやうになりまつせ。」

「そんないけず云はんとちよつと教へて呉れたらよろしい
やないか。……ほんなら寺へ歸つてから了順はんはんに訊ねた
ろ。」

「阿呆らしい。お寺でそんなこと云ふたら、あんたはんき





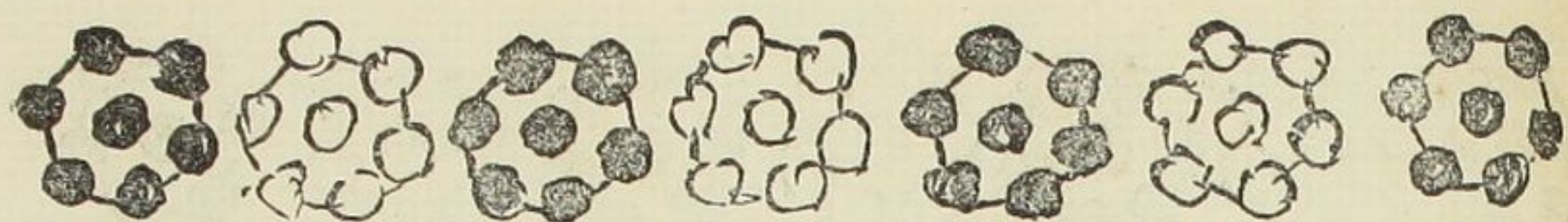
ついに叱ひかられまつせ。ほゝゝゝ。喜久彌きくやは卵うの花模様はなもようの袖そでで唇くちびるを抑おさへながら笑わらつたが、やがて、

「そないにお云いひやすなら、私あてえがあんじよう教をしへてあげますさかい、私あてえのねきへ來きとくれやす。そんでなうては話はなしが遠とほうて出で來けしまへんえ。」

了念れうねんは素直すなはに立たち上あつて、それまで膝ひざのうへに載のせてゐた文箱ふはこを床とこの間の傍そばの大鏡臺おほきやうだいの處ところへ置おいて、つかくと喜久彌きくやのわきへ寄よつて行いつた。そしてぬぎすてただらりをしゆつくと音おとを立て、後うしろへ押おしやりながら、喜久彌きくやの肩かたへ縛もれるやうに坐すわつた。

喜久彌きくやは思おもはず一座ざの顔かほを見廻みまはしたが、急きふに嬉うれしさうな笑顔ゑがほになつて、





「あんたはん、いつ見ても綺麗なわ。私にあんたはんの眼
おくれやはい。」

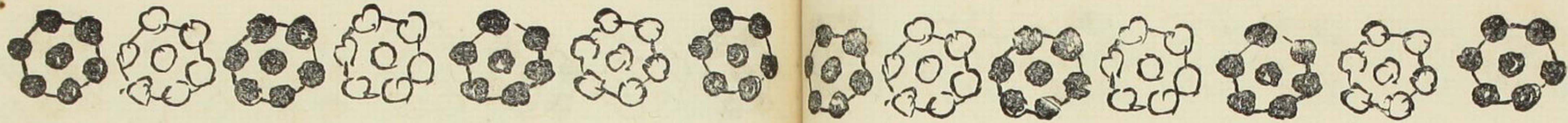
了念はてれて、喜久彌の唇を指ではじきながら、

「そんないらんこと云はいでもよろしい。それよりも早う
云ふとくれやす。」

「あ、痛。そないにきつうおしやはんかてよろしいやない
か。」喜久彌は又袂で口を掩ひながら、「ほんなら教へてあげ
ますさかい、そのかはりいつぺん私の云ふとほりにおしや
すな。私の云ふことをなるべく早う云ふとみやす。こない
に云ふのどつせ。聖護院の森、糺の森、信田の森。」

「そなこと云はれいでどないにすんのや。聖護院の森、糺
の森、信田の森。」





「まちよつと早う云ふのどすがな。ひと息に云はなあかし
まへん。」

「聖護院の森、糺の森、信田の森。」

「信田の森の狐を釣らうよ。ほゝゝゝ。」喜久彌はぼうつと
上氣した頬で笑ひ崩れながら、いきなり眞白な了念の手を
とつて狐のやうに引きつらせ、法衣の下から白の下着の裾
を尻尾のやうに手早く引出して、そのまゝ小さな了念の肩
をじつと抱きすくめた。そして了念が振り離さうと足搔く
のを猶ほも抑へつけながら、

「心中云うたら、こないにして女はんと男はんと一緒に死
なはるのどつせ。分つてますか？」

了念はやつと喜久彌の手を振りもぎつて、肩にかゝる美

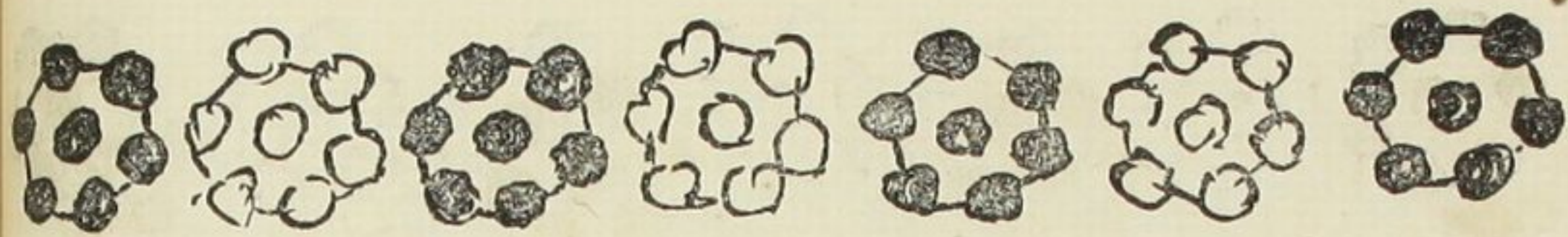
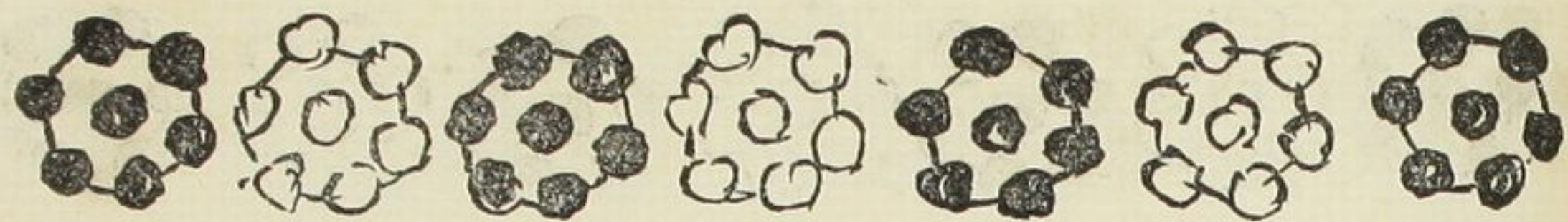
しい振袖の陰でせいせい息を切らしながら、

「阿呆やなあ。そんなんが心中やつたら、私もうやめにす
る。法衣もなにも破れてしまふやないか。」

一座はその様子を見てわつと笑つた。その聲に答へるや
うに、河原の方からは柔い春の夜風が吹き寄せて来て、こ
とくと窓の障子を鳴らして行つた。向ふ岸の先斗町で唄
ひさんざめく絃歌のどよみが、その風のあとを追ひながら
鴨川を渡つて遠く聞えて来た。

そんな多愛のない悪巫山戯に耽つてゐるうちに里菊はま
た少しづつ氣分が悪くなつて来た。脊筋にはぞくぞく寒氣
がしてゐながら、頬ばかりぼつぼとほてつてゐる。しまひ
には皆の笑ひ聲がだんぐと遠くなつて、濕んだ瞳の底に





は色の白い、眼の美しい了念の顔ばかりがぼうつと滲んでくる。彼女は眩暈がするので窓際の鏡臺のところへ行つてうすら寒い風の當るやうに障子を細めにあけながら、衣裳箆の前へがくりと體をもたせかけてしまつた。

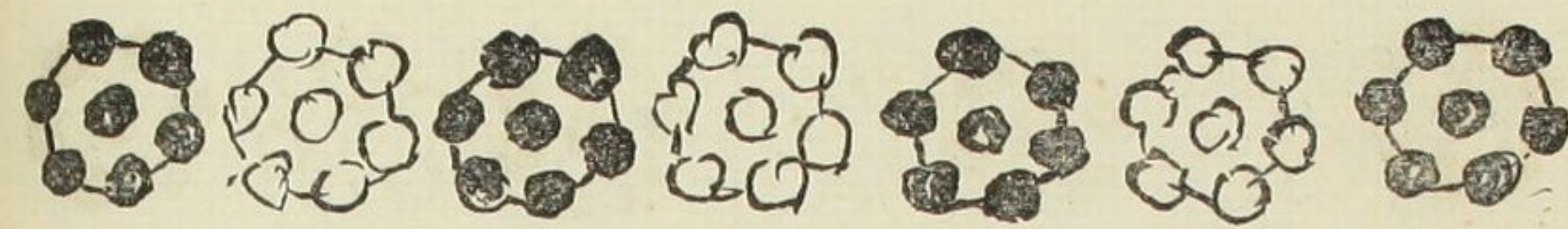
皆の話聲や笑聲が其時にはもう遠くの方から忘られた記憶のやうに彼女の耳へ響くばかりであつた。彼女の眼の前にはやがて熱に浮かされた不思議な幻影の世界がひろがつて來た。さつき芝居でみた吉野山の舞臺面のやうに、そこには煦々とした春光に彩られた緑の森がある。樹々の梢からは日の光が斑のやうに隙洩れて、黄いろい樹幹の立重なつた奥には繪に描いたやうな浅い丹塗の加茂の御宮が玩具ほどに小さくみえてゐる。すぐ眼の下には眞四角な神泉が

あつて、雪とも紛ふ白砂の底から、小さな水の球がぶくぶく湧き出てゐる。四邊には鳥の聲さへ聞えず、耳にしみ入るやうな静けさが漲つて、どこをみても眞緑の靄がぼうつと眼界をかすめてゐるやうな氣持ちがする。

ふと見ると、彼女の側には狐忠信の着つけをそのままに淺黄繻子の脚絆をはいた一人の子が打倒れてゐる。よくみるとそれは了念で、片袖の八つくちの處からはふだん持つて歩いてゐる母親ゆづりの水晶の珠数が半分顔をだしてゐる。

彼女は吃驚して、思はず、胸を躍らせながら、「了念はん」と、叫んだ。
答へがない。

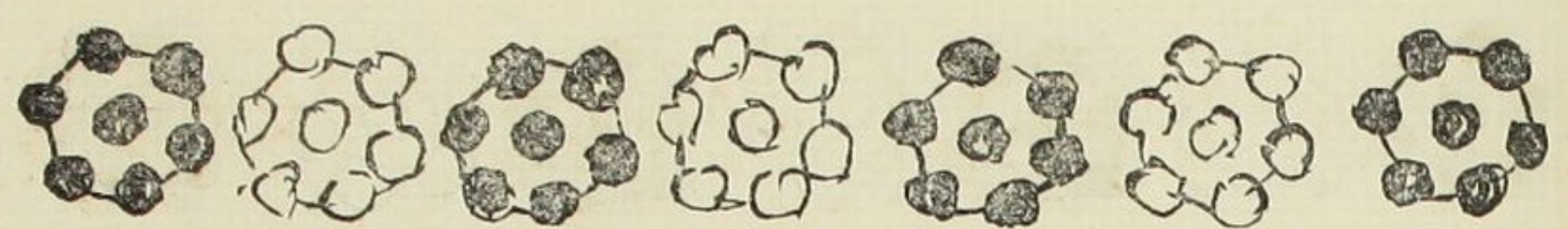




顔をのぞき込んでみると、了念の雙眼はいつぞや大彦のおかあはんが死なはつた時のやうに白眼だけみえて、黒眼は上眼蓋の睫毛の陰へ隠れてゐる。

里菊ははつとして、ひよつとしたら了念はんと心中に來たのではないかと氣づいて、おろ／＼聲で今一度、
「了念はん。」と、呼んでみた。

何處か遠くで多勢の人のわあ／＼笑ふ聲が聞える。……
「は／＼／＼。怪體な、里菊はん、あんたは居眠りして寢言云うてやはるえなあ。」と、云ふ了念の聲で、ふと眼をあけてみると、紙燭の影には里子や喜久彌や花勇が呆れたやうな笑顔をしながら此方を眺めてゐて、すぐ眼の前には了念がさつきの文箱をまた小脇に抱へて突立つてゐる。



「眼が覺めましたか。あんたも居眠り坊主やなあ。私、雨が降つて來たさかい、もう往にまつせ。ほんならあのこと誰れにも云はんとおゝきやすや。私往ぬ前にま一度寄せて貰ひまつさ。」了念は里菊の耳に囁いた。

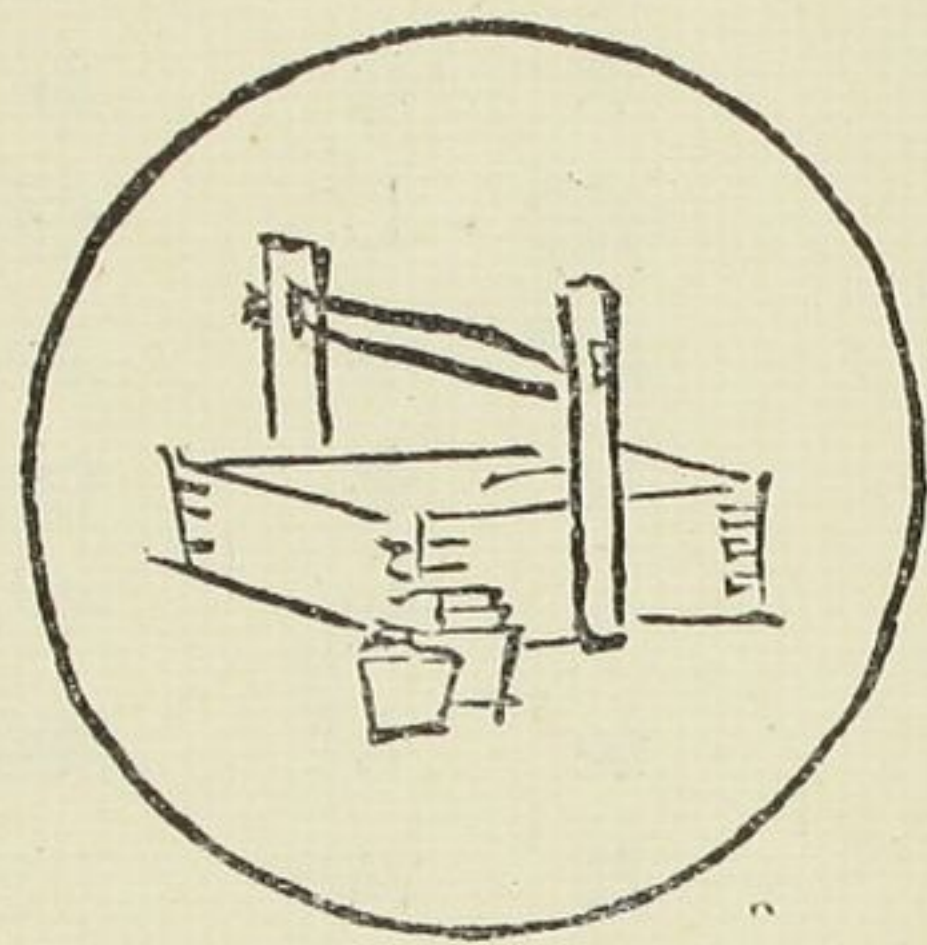
その時、覺めきらぬ里菊の耳にはまた臺所口の方から、
「お君どん。お糸どん。早う干しものを入れとくれやす。雨が降つて來ましたえ。」と、慌たしく叫ぶおかあはんの聲が聞えた。

と氣づいて、細めに開けた障子からのぞくと、空には薄月が残つてゐながら先斗町の灯はいつの間にか銀のやうな雨の脚に煙つて、三條の大橋にはもう二つ三つほの白い傘が動いてゐる。河原に降りまよふ雨の音はまるで春が忍び足





に歩いてゆくやうだつた。
 里菊はそつと了念の法衣の裾を抑へて、涙ぐんだ眼でその顔をみあげた。

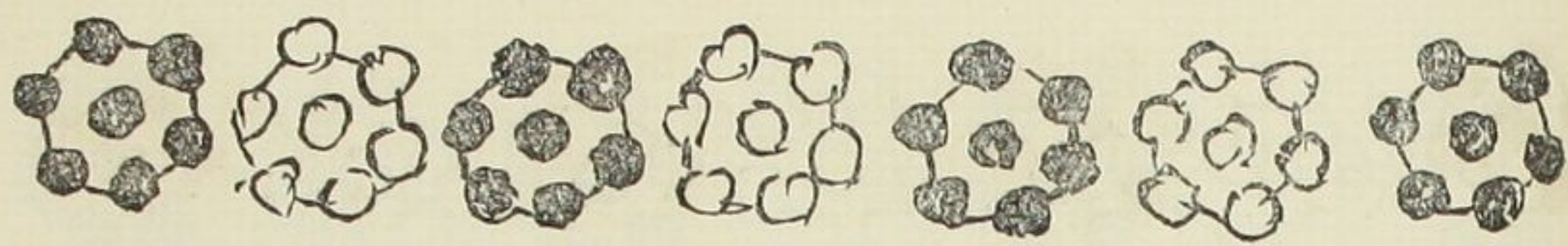


だん子

だん子の美しさは夏のごとし。

西の京祇園の春は早ければだん子はすでに戀を知るらむ
 横顔は男寅に似るとたはむれに云へばだ
 ん子はよろこぶものか

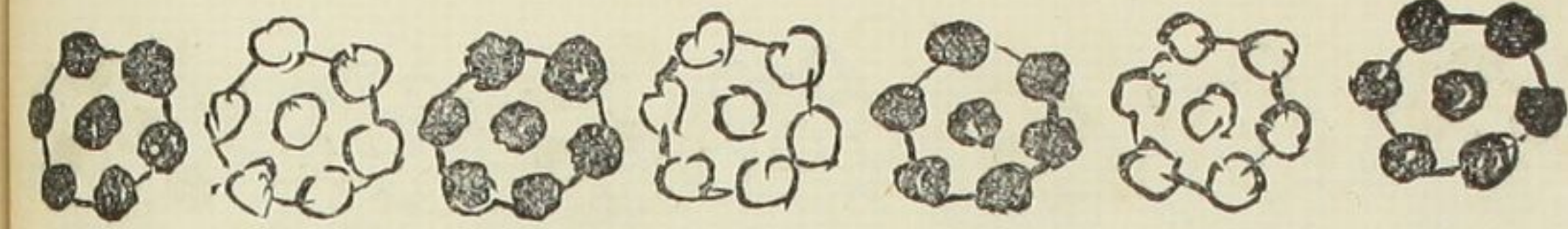




舞まひころも脱ぬぐ日もあらばうつくしき富とみ菊きく
 いかに悲かなしからまし
 富とみ菊きくがひとりさびしき顔かほをするときを思おもひぬわれも寂さびしく

富菊の美しさは秋のごとし。

富 菊

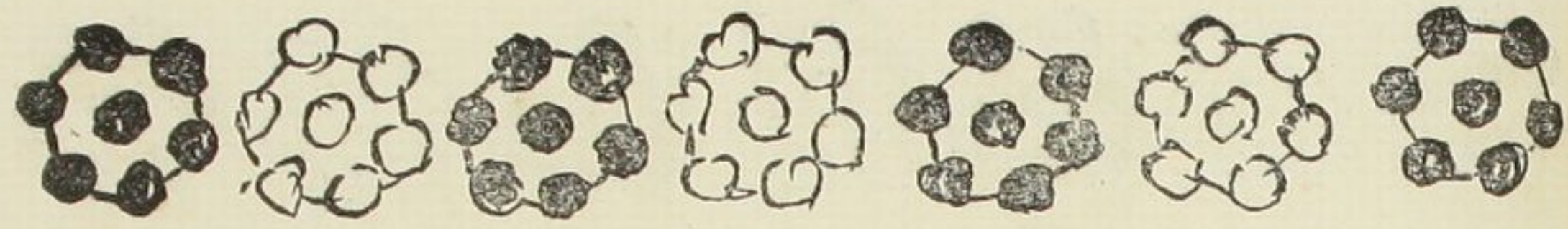


桃もも龍りゅうは春はるの精せいかと問とふや誰たれ消きえもやす
 とあやぶむや誰たれ
 かなしみを知らぬがごとく桃もも龍りゅうは美うつくしけ
 れど長なが閑かなるかな

桃龍の美しさは春のごとし。

桃 龍





かたはらに君によく似し歌麿の繪がねむ
 りある京の閨かな

閨

雑魚寝の人はやうやう寝入りぬ。蘭燈の光ほのかに
 わが傍に寝るは誰、夜ごとにかはる枕かな。

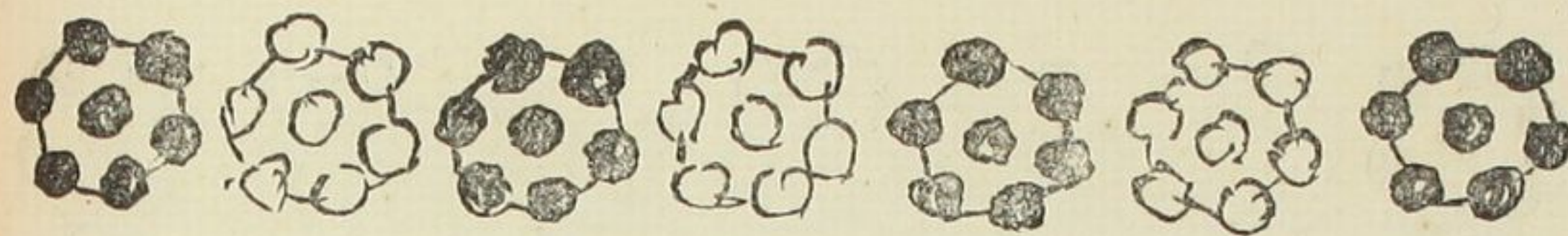


とらんぶ

このごろの舞姫にてとらんぶ持たぬものもなし。京
 の手遊びにも流行すたりのあるものによ。

戀もなく豆とらんぶをもてあそぶ舞姫な
 ればかはゆきものを
 君が膝二尺はなれてとらんぶの俱樂部の
 王はものを思へる





ねがひ

わがねがひ、京にある日のわがねがひ、なかしと云ひてわらひ給ふな。

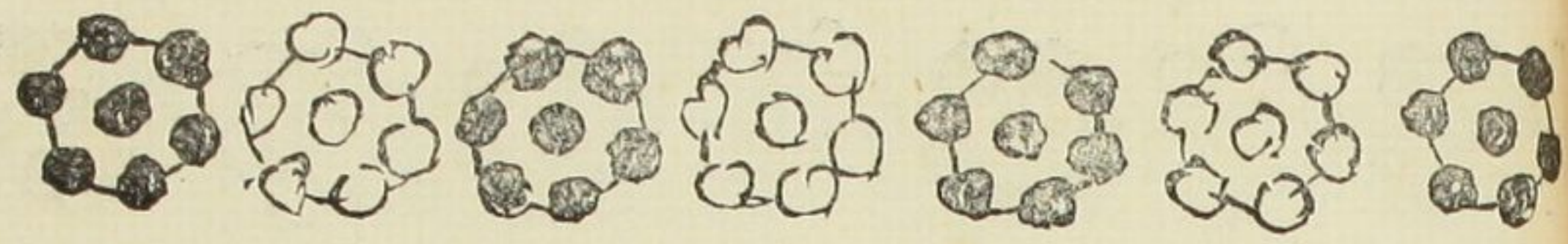
踏^ふまるるもよしやかなしき香^かを立^たつる河^か

原^{はら}蓬^{ももぎ}とならましものを

打^うたるるもよしや玉^{たま}手^てに抱^{いだ}かるる君^{きみ}が鼓^{つづみ}

とならましものを

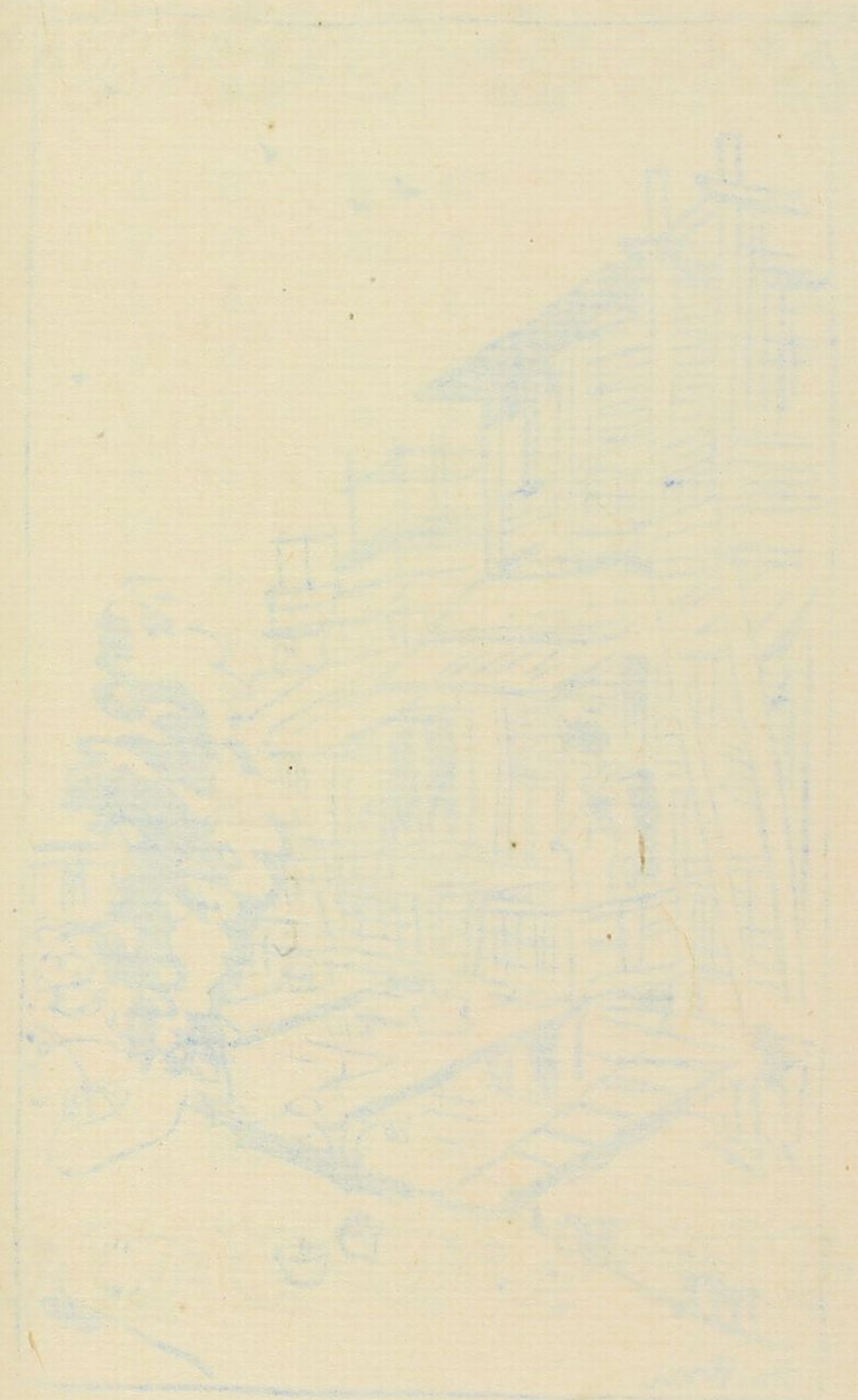




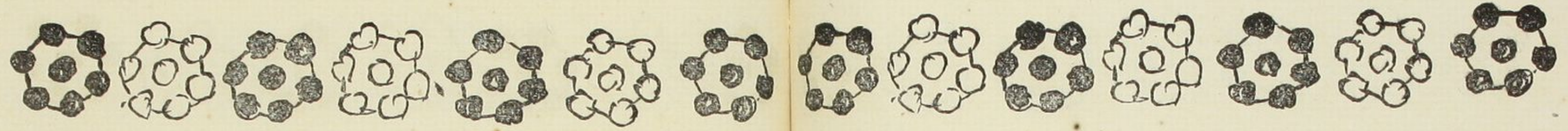
杜鵑亭

大悲閣の鐘を聴いて智恩院の鐘を思ひ、大堰川のせせらぎを聴いて、そぞろに加茂川のせせらぎを思ふ。

うつつなき彌生の京の遊びにも倦きてわ
が來し杜鵑亭かな



104



春
雨

京に入りて七日になりぬ。夜毎あばれ酒に夜を更か
せば、晝夜のけじめもわかずなりて、うつらうつら
の夢ここち、これぞ眞實に夢の浮世や。

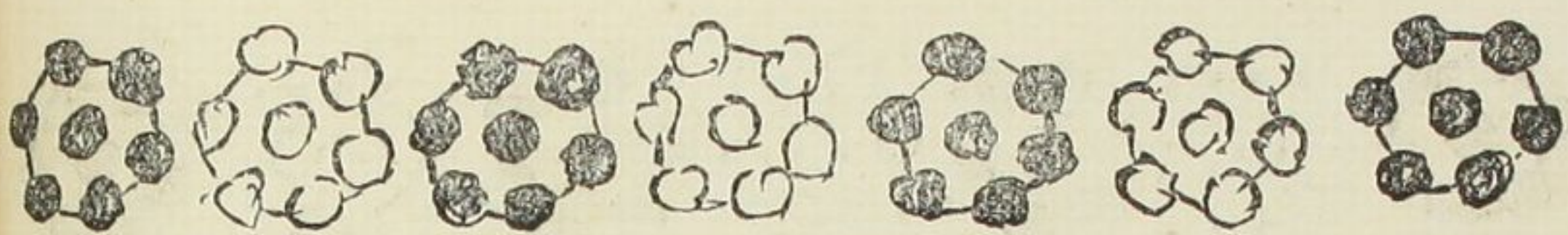
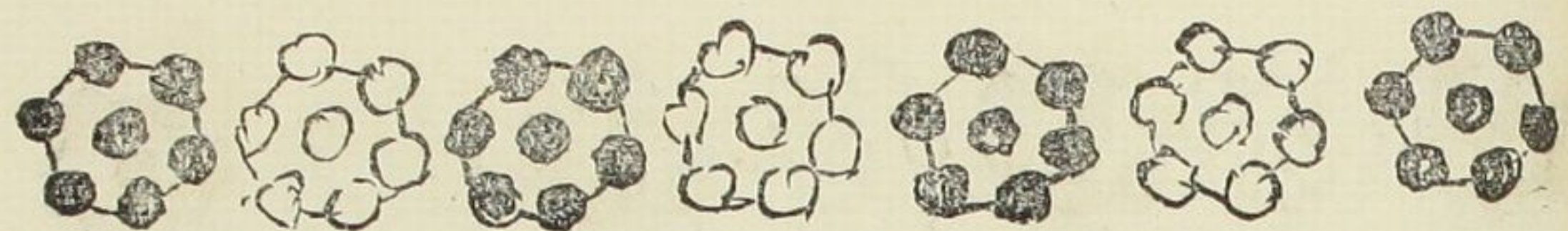
京^{きやう}と云^いへば遊^{あそ}び疲^{つか}れしわかうどの姿^{すがた}も見^み
ゆる春^{はる}の雨^{あめ}かな

洛
外

午さがり、誰と二人ぞ。斑猫に整されたまふなと、
氣づかほしげに云ふ聲す。菜の花畑の午さがり、誰
と二人ぞ。

洛^{ろくわい}外^{がい}の菜^なの花^{はな}畑^{はた}の花^{はな}ざかり二人^{ふたり}はぐれて
往^ゆきてかへらじ

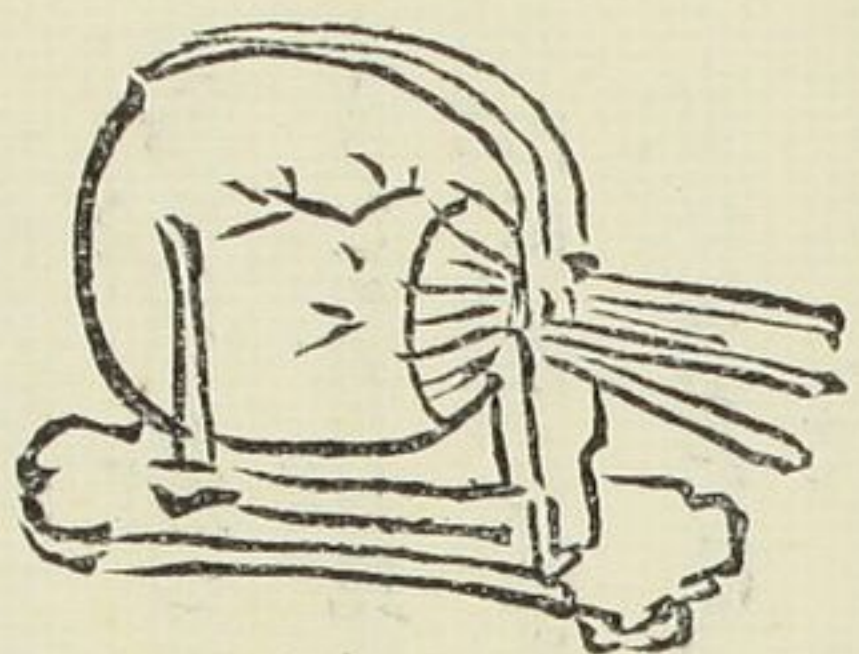




光琳波

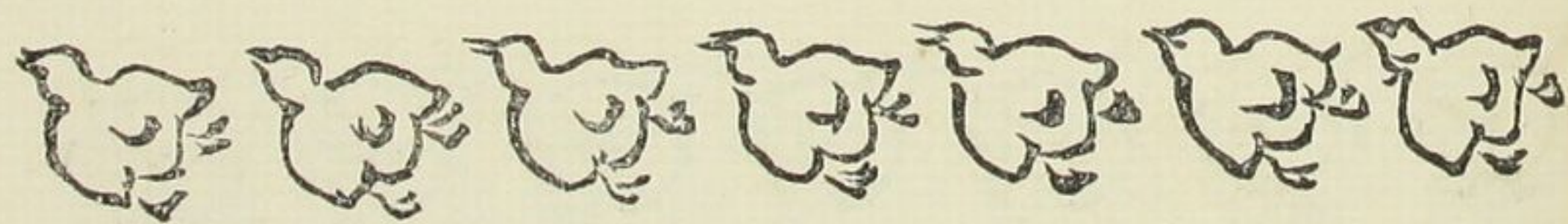
まばゆきは襖のみかほ。こは幻にあらすやと、われ
とわが目をうたがひぬ。

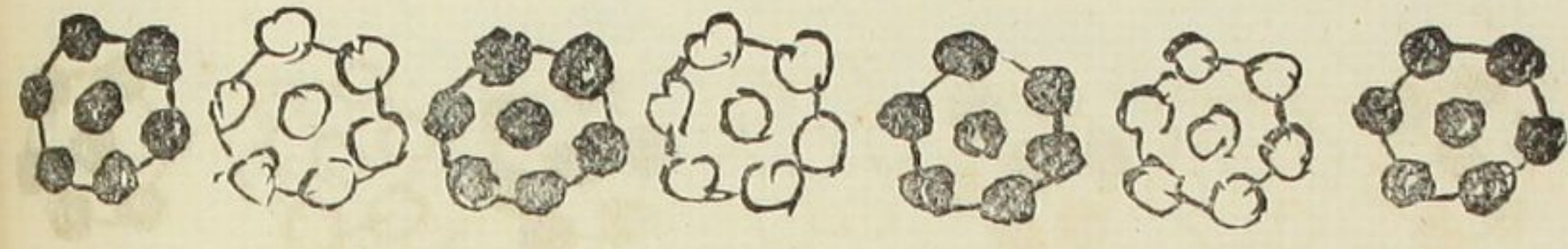
三四人そろひて入り來舞ころも光琳波の
金襖かな



鴨川

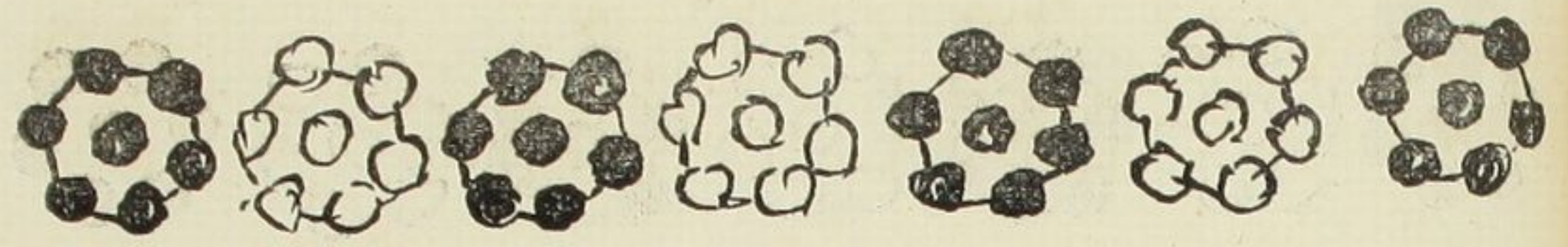
千鳥の啼く冬の寂しさにひきかへて、鴨川の夏景色ほど
心憎いものはない。京都の夏の美はこのひと筋の河瀬を中
心として織りなされ、すべての生命は口健めに歌を吐いて
ゆくそのせゝらぎのなかゝら生まれ出てくるのである。
先斗町の鴨川踊がすんで、夜毎に河瀬に映る千鳥模様
やさしい紅提灯が消えてしまふと、間もなく、上は二條橋





から下は遠く松原、五條の河しもまで、岸の家々には縁先から清い水の流れる河原へ床が懸けられる。青嵐が吹き過ぎて、釜底のやうな蒸し暑さが京の町をつむ頃になると床のうへには宵ごとに人影が濃くなつて、簾越しにともる雪洞の光が河岸の夜を得も云はれぬ艶めかしさで飾るのである。

三條大橋から上には二筋に分れた河原の洲に河原蓬や雑草が青々と煙つたやうに生ひ茂つて、そのなかには夢みるやうな淡い月見草の花がなよなよと夕暮を嘆いてゐる。北山は紫に染めなされ、加茂の森は黒く、薄月のほめく黄昏などには、不思議なほど眞蒼にみえる河原蓬の間をとめ歩む浴衣の人の姿がまるで白鷺のやうに美しい。



吉井勇氏の歌に、

悲しみは蓬の香よりきたるなり

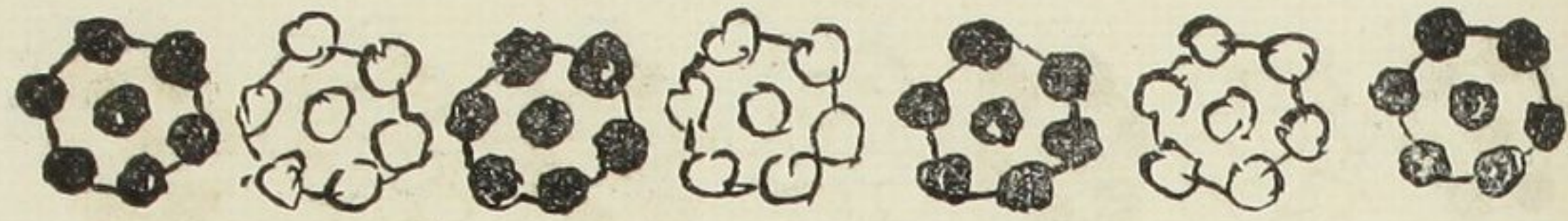
お蓮な寄りそ鴨の河原に。

病みあがり吉彌がひとり河岸に出で

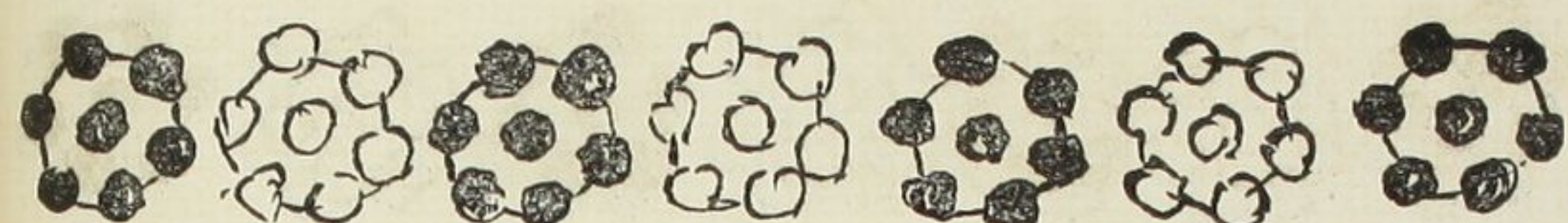
河原蓬に見入るあはれさ。

眞蒼な蓬の色をじつと見入る子の思ひはさうした黄昏の悲しみにふさはしい。また胸に頼りない悲しみを懐く子の瞳には、煙つたやうなその草叢の緑が悲しみのものゝ彩りとも映るであらう。漸次と宵闇に掩はれてゆく河岸には涙ぐむだやうな灯影がぼつぼつと夜氣に滲んで、いつもなしにその草叢も一様の闇に姿を消してゆく時、傷み易い人の胸にはさらでだに一脈の淡い哀愁が膊動してくる。私



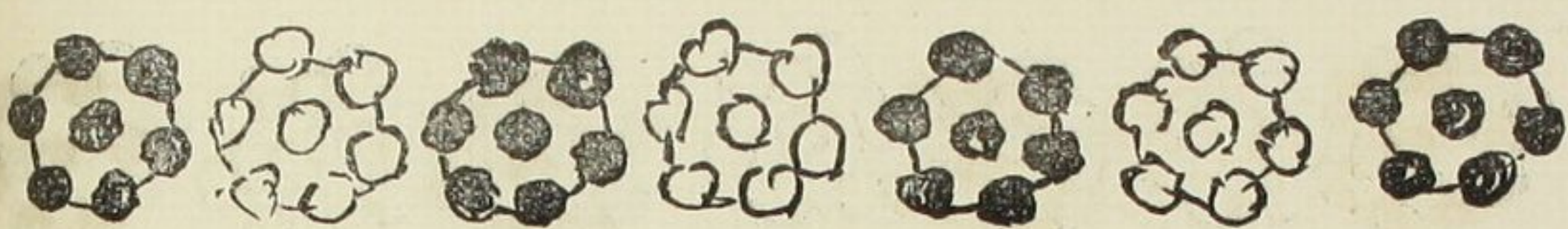


京女の美しさを今更ながら嘆美しすにはあられもない。
 河原の床のうへで涼んでゐると、夜が漸次と更けまさるにつれて、大氣が玻璃のやうに透明になつて来る。殊に夕立がざあつとひと降り通り過ぎていつたあとの晩などには、四界がまるで秋の良夜を思はせるやうに隈もなく澄み渡つてくる。西へ廻つた月は蒼白い濡色をくつきりと河原の礫に浮き出させて、蓬の草叢にすだく蟲の聲々までがさながら透き見せられるやうにほの明るい。宵の口にはそれでも少しづつ、息づいてゐた微風も夜とともにはつたり死んで、東山の山影や、町々の灯がもうそろそろ静かな夢に沈んでゆかうとするなかには、河瀬の咽ぶせゝらぎの聲だけが涼しげに響きあがつて来る。そして床のうへにともした絹張



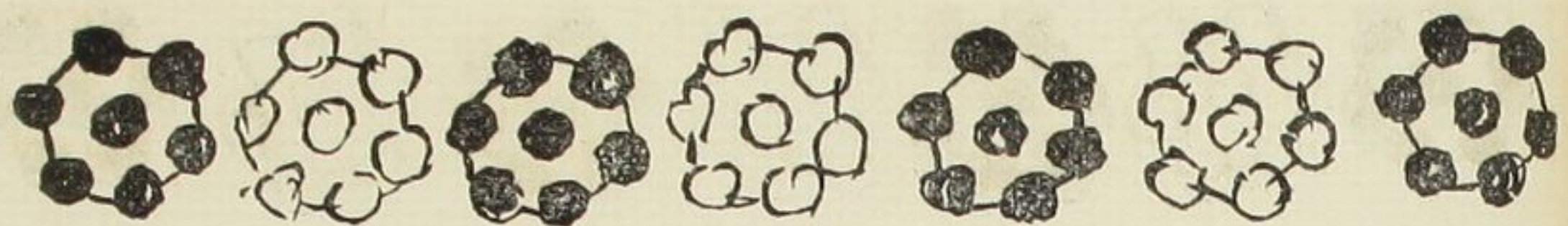
はこの尊敬すべき抒情詩人によつて、鴨川ならでは得られぬ可憐な、優婉な情趣を簡素な言葉でかくまで巧みに、かくまで纖麗に歌ひ残されたことを感謝しすにはあられのないのである。
 夜になると、三條の橋の下には幾つとなく紅提灯が點される。浅い水のなかに置き並べられた涼みの縁臺には人影が往來して、清い流れに足を浸す妓の脛は絛からぬけ出して來たやうに艶めてみえる。河瀬の咽ぶ音に紛れて、辻占を賣る小娘の聲が彼方此方へさまよひ歩く。やがて東山の頂から射す月が鴨川のやさしい心をほの白く照らし出すのである。
 鴨川の夏の夜を思ひ起す度に、私はその夜を飾る数々の





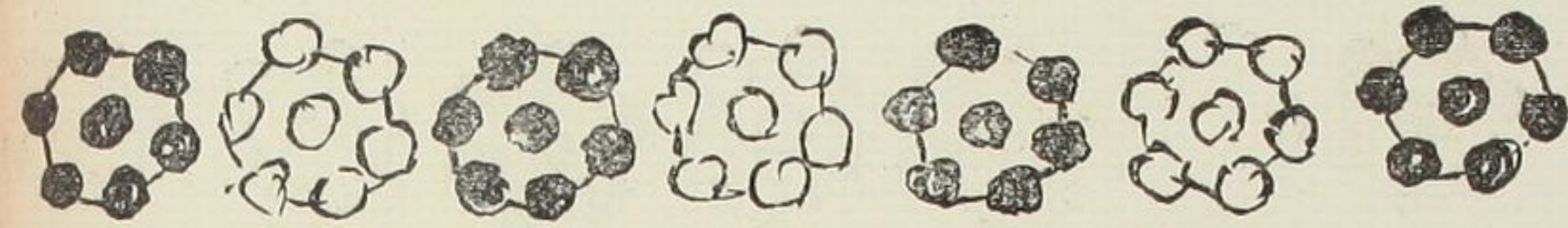
りの雪洞は三つのうち二つまでは消え落ちて、残りのひとつがほんのり涙つばい光を薄縁の面に投げてゐる。

賑やかな笑ひ聲をたてゝゐた藝妓や舞妓達ももうその頃には大方遊び疲れて誰れからともなくいつのまにかふつりと口を噤んでしまふ。端近に坐つたものは欄干に片腕もたせかけて、小扇を頬に押し當てたまゝうつとり無心な瞳を遠くさまよはせてゐる。灯影のそばのひとりほしどけなく横坐りに坐つて、光を盗みにくる蟲をば長い袂で慵けに追つてゐる。また小簾の片陰では、しなやかな手つきで拍子を刻みながらひそひそとやさしい小聲で唄をうたつてゐる。さうした妓達の黒髪の色は晝みると違つて、鴨川の精氣に染められてか、まるで漆のやうにつやつやしい。眼の色も



黒く、冷たく濕んで、瞬きをする度に睫毛までがちらちら月の光が映してゐる。夏に疲れた肌は眼にたつか、たぬほどの夏瘦せをみせて、汗の名残と夜露とにしつとり潤ほひながら紵のやうにほのかに匂つてゐる。縮緬の軽さうな單衣もその肌を包むには惜しいほどである。なかのひとり着た長襦袢の蘆分け小舟の模様などはそんな夜の色のなかでも上着の光琳水の薄染めを透かして、柔らかな肉のまゝるみをその儘まざまざと描き出してみせる。殊に月光と雪洞の光の溶けあつた朧ろげな薄明りのなかにほめく彼等の襟脚は何ものにも譬へられぬ美しさである。そしてともすると媚びるやうに忍び寄つてくる髪油の匂ひも白粉の匂ひも、夏なればこそまたひとしほの艶めかしさを添へるの



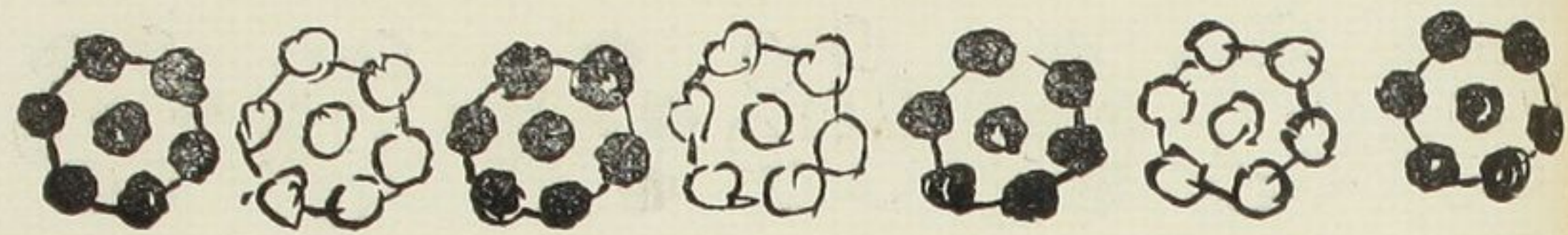


である。私は觸つたら消えもしかねまじいその一瞬のあえ
かさを嘆美しずにはゐられない。

床の灯影も消え盡くして草木も眠る丑満過ぎになると、
鴨川はしばし月光と蟲の聲と、そして短夜を嘆く流れの音
ばかりになるのである。祇園幾十百の美妓が溶いて流す脂
粉の水は冷たい柳の樹影や、茶屋々々の軒行燈の影を映し
て夜の底を忍び足に流れてゆく。行く水にもし心あらば、
法皇が堰を据ゑ兼ねた昔にひきかへて、今宵木屋町の離座
敷に、はたまた茶屋々々の奥二階に、小蚊帳に浮世を距て
ながら明け易い夏の夜を戯れ明かす若人の浮名をばどんな
に喧しく河原の石に歌つてゆくことであらう。



114



酒中花

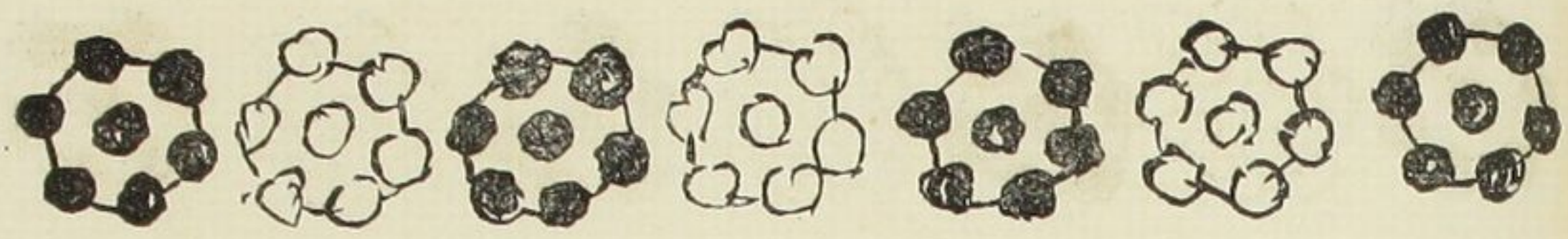
酒中花なれど杜若、あやめの花はしほらしや。舞姫
なれど富菊は、あやめのやうにしほらしや。

いぢらしき舞姫なるよ酒中花を見る目は
やくもうるみけらすや



酒中花

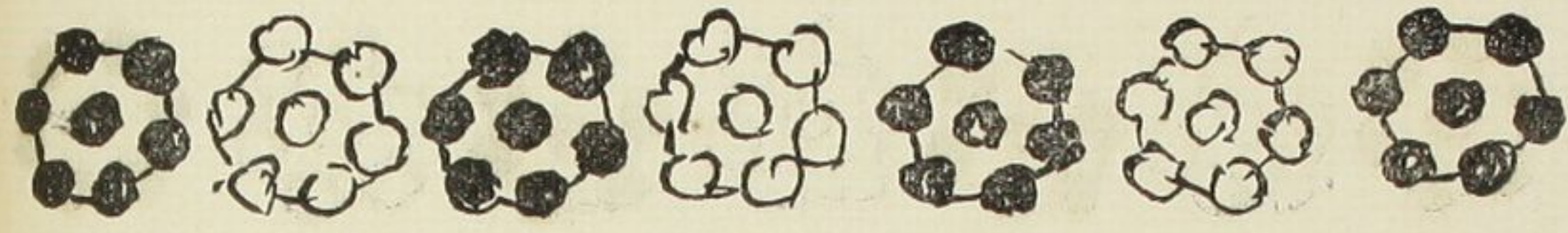




加茂川の床よりながす水瓜ふね白蠟のせ
ていづこまでゆく

たはむれ

川上の床より一つ二つ流しはじめぬ。蠟燭乗せし水
瓜ふね、さては板ぎれ。かかる果敢なきたはむれも
夏の夜なれば興もあれ。

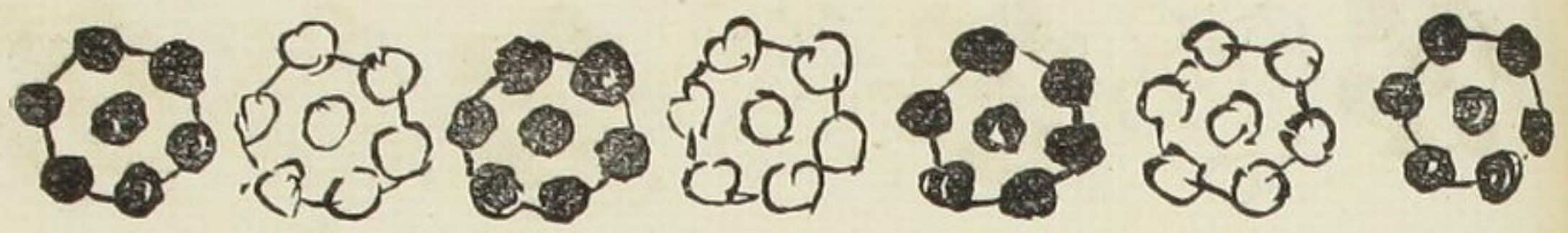


叡山行

山ゆきのおもしろさ、君とならば雨も厭はじ。

比叡おろし天狗礫の降るなかを舞姫のゆ
く山のぼりかな
山ゆきの仇約束もままならぬ雨ゆゑなれ
ば恨みたまふな

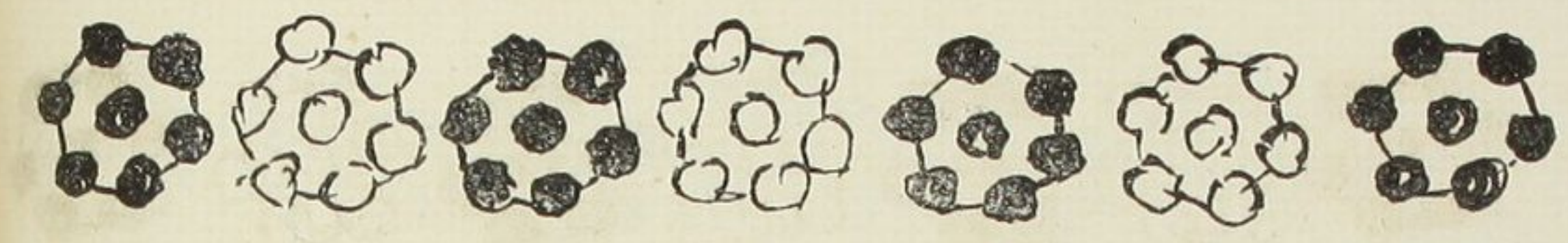




待ちびとはすべて來よかし檀王の門の閉
 づるを見るも見ざるも
 檀王の門より出づるうつくしき僧より暮
 るる河むかひかな

檀王

門の閉づるを見たるものは、待ち人きたると云ふ傳説あり。



大文字

大文字に火點りぬと呼ぶ、舞姫のこゑもなまめかしや。傍にはわが思ふひとあれば。

ふと見れば大文字の火はかなしげに映り
 てありき君が瞳に
 妙法も弘誓の船もみな消えていよいよ暗
 き京の空かな



檀王の門



東山

月出づと云ふ君のこゑす。こゝはいづこぞ、木屋町の宿。夜は更けたれど眠られぬ。

月つきのぼるとき
五ご六ろく人ひと聲こゑをそろへてうたひるぬ東山ひがしやまより



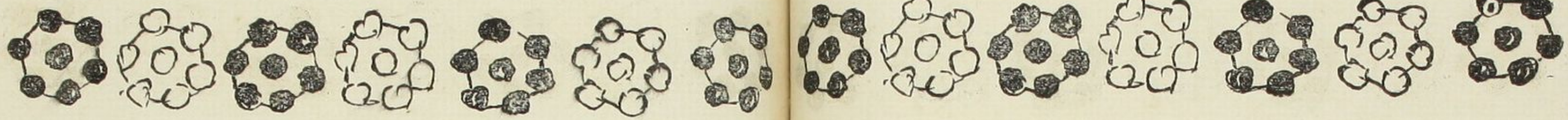
鳥邊山心中

舞臺のうへのお染半九郎は、やがてわれらの姿ならずや。かく思ふときわが世たのしく、かく思ふときわが世悲し。

鳥邊とべ野のは戀こひの二ふた人りが死しにどころやがてわれらが死しにどころかな



鳥邊山心中



宇治川

これもまた思ひ出のひとつ。いつの日の夏なりけむ。中書島に着きしとき、水郷の夕繪のごとくなりしを忘れず。

宇治川のくだり船にてあひし雨その雨戀し君をおもへば



いなづま

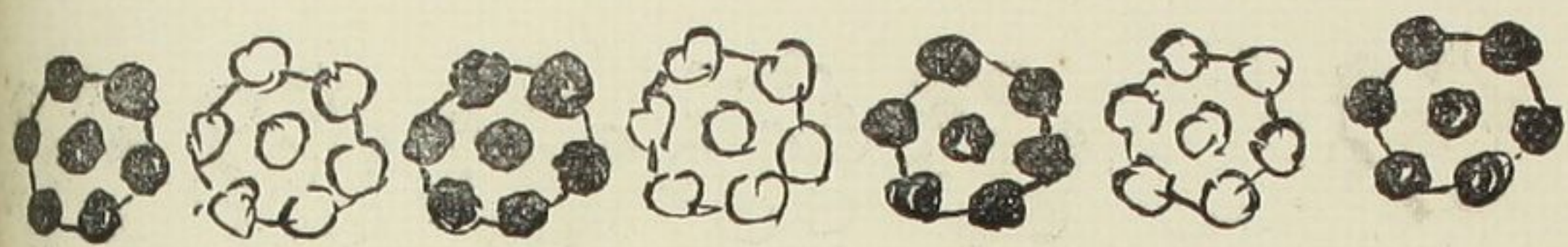
京にふさはぬ友のすがたや。悪僧の如き形相して、しげしの間も杯をはなさず。酔ひて高らかに歌ふを聴けば、世を嘲る歌なるもをかし。

叡山の荒法師とも云ひつべきひとと遊びていなづまを見る





弘



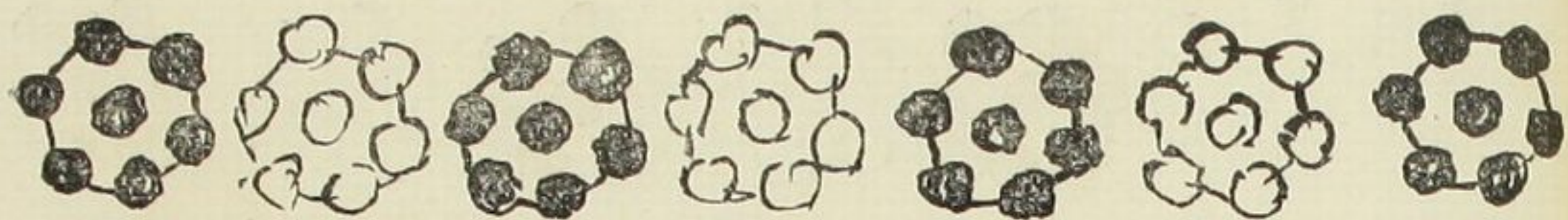
夏の夜

夏の夜はあまりみぢかし。戀短かければいのちも短く、いづればかなき身なるらむ。

夏の夜のあからさまなる雑魚寝さへあさ
ましからず君の戀しき

三三

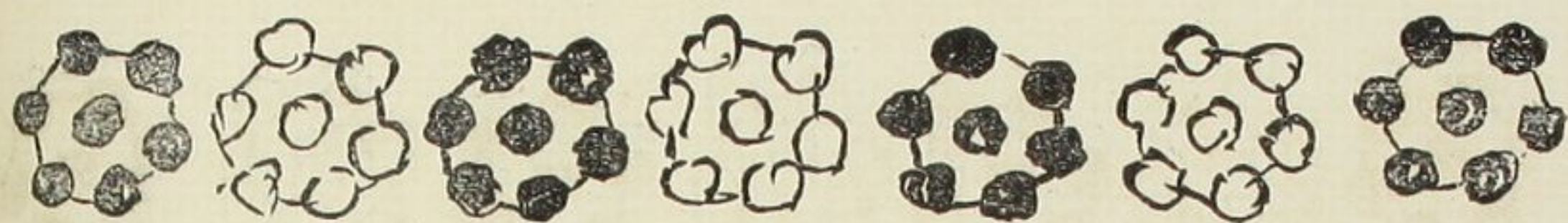




鬼
灯

その晩は五人招らした妓が一人ひとり次の座敷へ花を廻してしまつたので、あとには吉蔦のお蝶さんと、藝妓の小君とそれに舞妓のまつ子、この三人が残つただけだつた。いづれも日が入るとすぐから床へ出てゐるのでもうすつかり遊び疲れて、距ての欄干へ軀を凭せかけたまゝうつとり空の星を仰いでゐた。そよそよと動いてゐた風もいつの間にか吹き絶えて、それでももう四邊には夜露が冷たく降りてゐるので、晝間の暑氣を忘れたやうな涼しさが肌にしみて来る。月のない晩なので床の隅へ點した絹雪灯がほんの



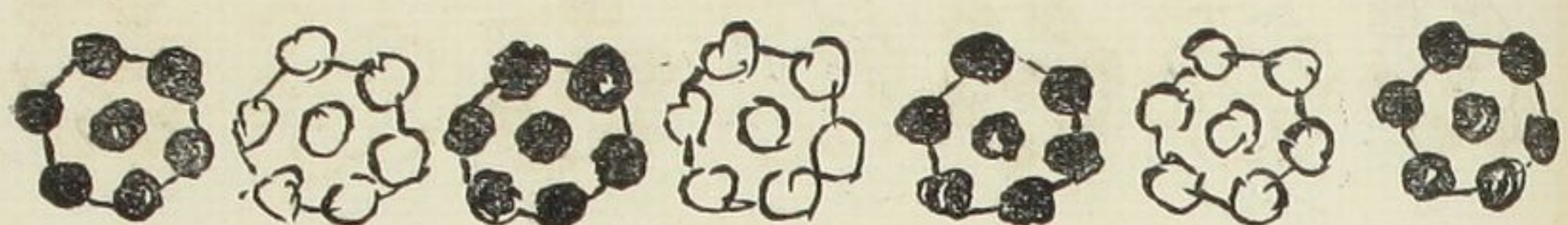


りと心細げに河原の闇を照らしてゐる。

妓達もまるで口敷をきかないので、寂しい思ひは自づと誰れ彼の胸に湧いて来る。誰が吐くともない嘆息はひつそりした夜氣にしみて、その聲からも果敢ない夏の短夜の嘆きが動いて来るやうな氣がする。

小君は何か物思ひに耽るやうにいつになくしんみりした顔をしてゐたが、そつと顔をあげて私の方を見ながら、「ほんまに寂しうおすなあ。どうぞす、もうらよつと麥酒でもお飲りやしたら。松子はん、あんた注いであげたらどうや。」と、これもぼんやり舞扇をもて扱つてゐる松子の方へ云ふ。

松子は黙つて麥酒の壺をとりあげて、小盆のうへのコツ

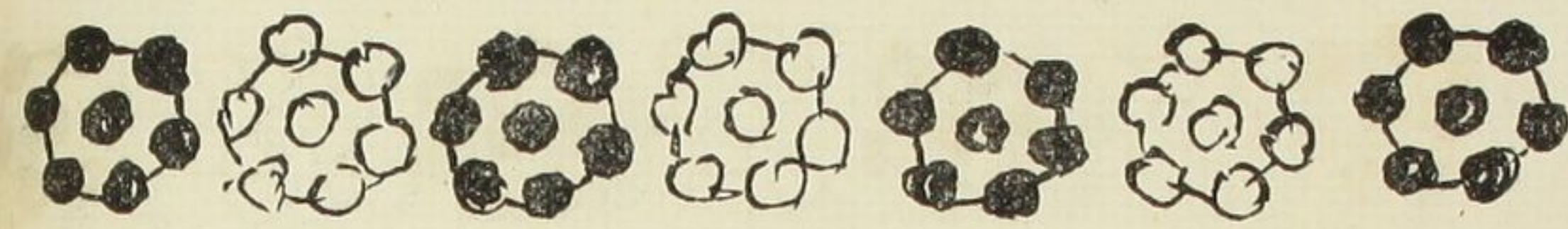


プへ酒をなみなみとつぐ。私も黙つてそれを受けた。

苦い酒のしづくをきるやうにぐつと呷つてそれを小君へさすと、今度はお蝶さんが黙つてそれへ酌をしてやる。その時、下の河原ではふいに啜り泣くやうな三味線の音が起つて、身も心も唄聲に打込んでしまつたやうな二上りの流しが聞える。と、みると、浅い水の流れる小流にはひとり年の老つた女が十歳ばかりの男の子を連れて、脛まで水の中かへ踏み入れながらしよんぼり突立つてゐる。それは此頃になつてこの木屋町の床々を廻つて歩く憐れな乞食藝人なのであつた。

小君はそれを見ると何んと思つたか、お蝶さんの方を向いて、





「お蝶さん姐さん。あんたはん細かい錢持つとぬやすか。あつたら十錢ほどお呉れやす。」と云ふ。

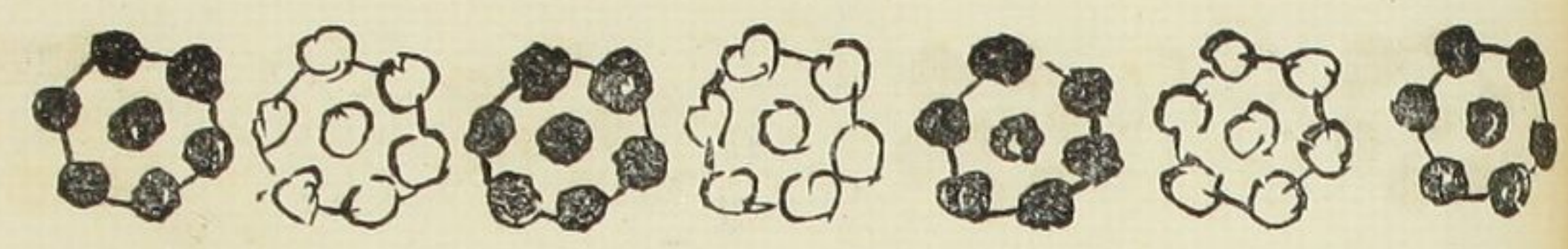
お蝶さんは帯の間から小さな絹さしの財布をだして、そのなかから十錢銀貨をだして黙つて渡す。

小君は、

「へ、おほきに。」と云つて、それを紙に包んで、今度は欄干から半身のりだしながら、

「小母はん。へ、錢あげまつせ。もう聞かいでもよろしいさかい、いとくれやす。」と、云ふ。

床の下では何やら禮を云ふ言葉がごとごと聞えたが、そのまゝ三味線の音はたゆたひながら漸次と川上の床の方へのぼつてゆく。しばらくすると唄聲はふつりと消えて、絃



に咽ぶ音じめだけが遠くかすかに聞えて来る。

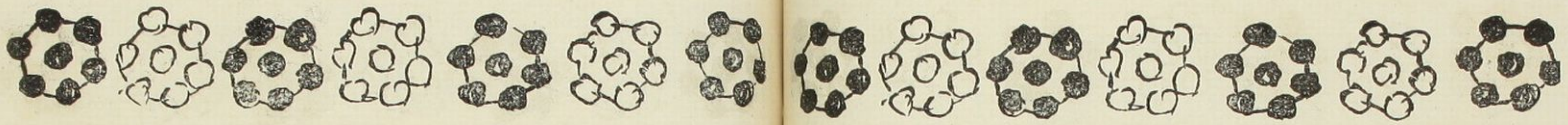
小君はその音色を追ふやうにうつとり眼を据ゑてゐたがやがてしんみりした聲になつて、

「私、あの二上りを聞いてゐるとほんまに悲しいなつて叶はんのだつせ。なんやしらかう何處ぞへ引込まれていくやうで、なんぼ耐へても涙が出て来て叶はんのだすがな。」と云つたかと思ふと、その言葉と一緒にもう薄く涙ぐんでき

て、雪洞を見つめるその眼はちろ／＼と優しく輝く。涙もろいお蝶さんもそれと一緒に眼を瞬いて、「ほんまにさうどすなあ。私も同じことどつせ。」と、云つたが、ふつ

と小君の顔を覗き込みながら、「あんたはん、死なはつたお母はんのことお思ひ出し、まへんか。」





「思ひ出します。あの唄をきいてると、いつかてお母はんのことばかり思ひ出すのどつせ。姐さんかてさうどつしやろ。」

ついこの二三年の間に母親を喪つた二人はなにかにつけて話が合ふのであつた。

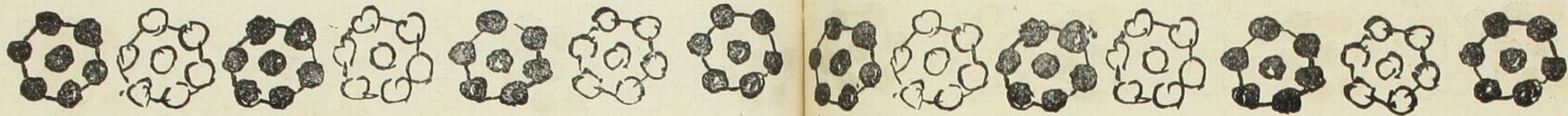
小君はやがて美酒と絃歌の聲に包まれた床の夜にはふさはしくない涙つばい話をしだすのであつた。それは今迄に一度も聞いたことのない亡き母の思ひ出であつた。私もつひ引入られて涙ぐましい心持ちでその話の筋を追つた。

「なあ、へ、あんたはん。私よう云ひまつけど、ほんまに人の命て果敢ないもんどすなあ。私、いつかてそれを思ひだすと、お花にいく氣もなにもないやうになつてしまふの

どつせ。こないにしてお酒のんだり、床へ出て遊んでゐたりしたかて、いつふつと死ぬやら分らしまへんやろ。それを思ふとほんまに心細うてな、……私せんどもお母はんのお墓詣りにいて、しみじみそれを思ふたんどつせ。私のお母はんちう人はそらほんまに丈夫な人でな、私が小供の折からきつい病身やつたもんどすさかい、ようよう心配ばかりしとくれやした。それが今では倒さになつて、心配して貰うた私の方が後に残つて、お母はんのお墓にはもう一杯苦が生へてますやないか、……」小君はそこまで話して來ると急に胸が迫つたか、手帛をとりだして涙を拭きながら顔を伏せてしまつた。そして少時すると、またやつと言葉を



110
111

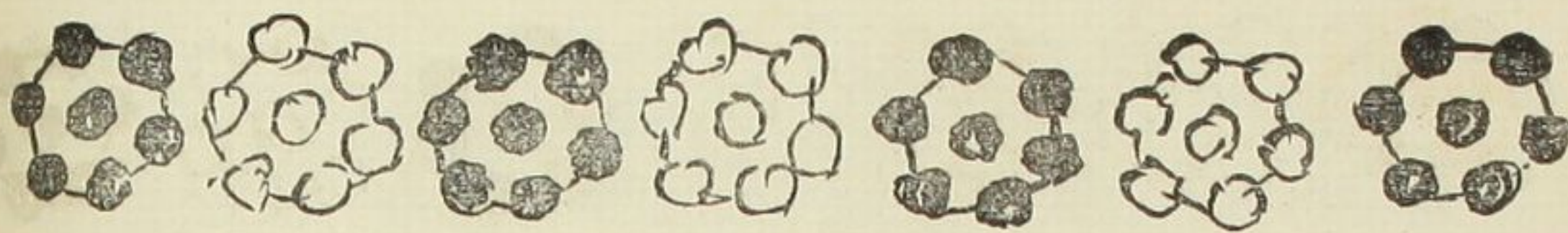


「こんな怪體な話してほんまに勘忍しとくれやすや。今日も私、實は富江はんと二人して黒谷のお寺へいて来たんどつせ。あこには宗念はんちうて、私の好きな好きな年老つたお坊んさんがゐるのどつせ。私、いつかてそのお坊んさんのところへ寄せて貰うて、長いことお説教を聞かして貰ふのどす。今日も三界輪廻ちうお説教を聞かして貰うて、往にしなにふつとあの阪を下りて来ると丁度お日様の沈まはる時分でな、今日はなんやしらきつう夕焼けがしましたやろ、あの紅いあかい雲を見ると私、ふつときつう悲しうなつてな、あの御本堂の下のところでもせんと泣いて来た。」と、云つて又せわしげに涙を押し拭ひながら聲をふるはして、

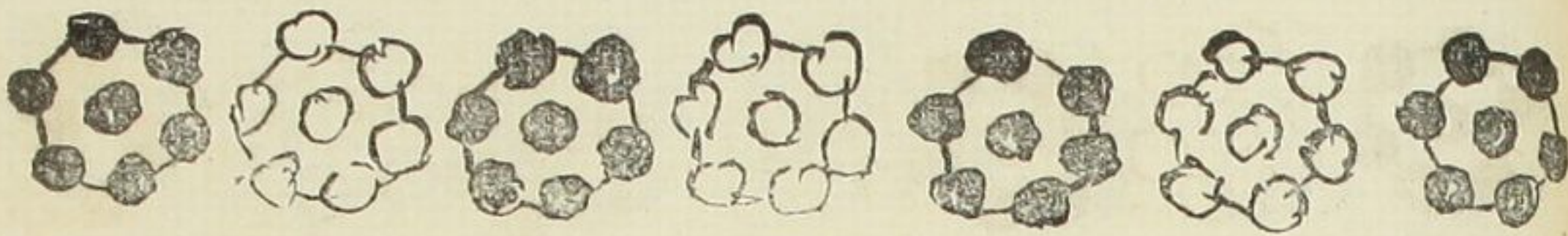
「その時私、ふつと小供の折のことを思ひ出したんどつせ長いこと思ひ出さなんだことゝつけど、その三界輪廻のお説教で昔をよんだんどすなあ。……私が舞妓はんで店出した時分には怪體におすけどそらほんまに鬼灯が好きどしてなあ、毎日毎日お母はんに云ふては山科から来るお婆はんの鬼灯賣りからたんとたんと買うて貰うたんどつせ。ほて一日それを出しては遊んでゐた。何いふても小供のこといすさかい、なんぼあんじよしてくれやはつたかて、着物を汚しまつしやろ、それをお母はんがきつう嫌はつてなどうぞして鬼灯いぢりをやめさせよう思はつたと見えて或日のことこんなことを云ふて、私を嚇さはつた。あんたそないに鬼灯ばかり出してゐて、今に鬼灯の幽霊がついた



140
1

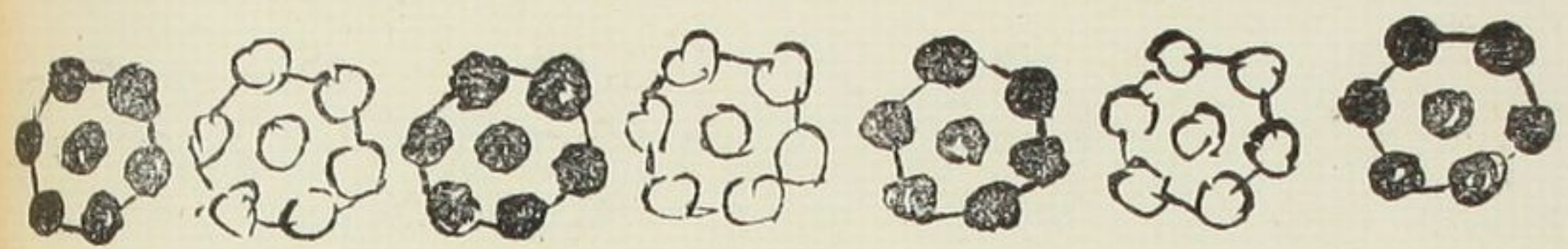


らどうおしるえ、ちは、つた。それから何やしら急に恐う
なつてな、今まで出しては捨てた鬼灯がどないに私を恨ん
でゐるやろと思ふとほんまに悲しいて悲しいてな、到頭或
晩その鬼灯の幽霊を見たんどつせ。こないにしてゐて云ふ
たら怪體におすけど、私、その時夢で何處やしら丁度智恩
院さんのやうな大けな大けなお寺へいてた。やつぱり今日
のやうなきつう夕焼のする日でな、お寺は人もゐ、へんや
うにしんとしてゐて、私ひとりであるとき心細うて叶はんの
どすがな。と、そこへ人の足音がして、ふつと見ると、私
のすぐ後に怪體なお坊さんが来てたつてやはつた。それ
が顔も法衣も皆眞紅いけで、眼も鼻も口もなんもあらへん
の。私、びつくりして、これが鬼灯の幽霊やと思ふともう



恐わうてな、そのまゝわつと泣きだしてしまつた。眼を覺
ましてみるとほんまに夢どしたけど、その時の怖ろしさは
今かて忘れしまへんえ。それからばつたり鬼灯ちうもんや
めてしまつた。……私、お母はんのことを思ふと、ほんま
にそんなことも皆夢になつてしまつたんどつせなあ。」
私はその多愛のない物語の底から眞實の涙が滲むのを覺
えた。鬼灯の幽霊、その晩の情趣にしつくりと相應したそ
の話しがどんなに私の胸に哀愁を齎したらう。河原ですだ
く蟲の聲も更けて、どこかで聞える鐘の音が何とも云へず
寂しかつた。
私がかうした妓と明かす夏の短夜がいつかは又夢になる
日を數へなければならぬやうな果敢ない氣持ちにならず



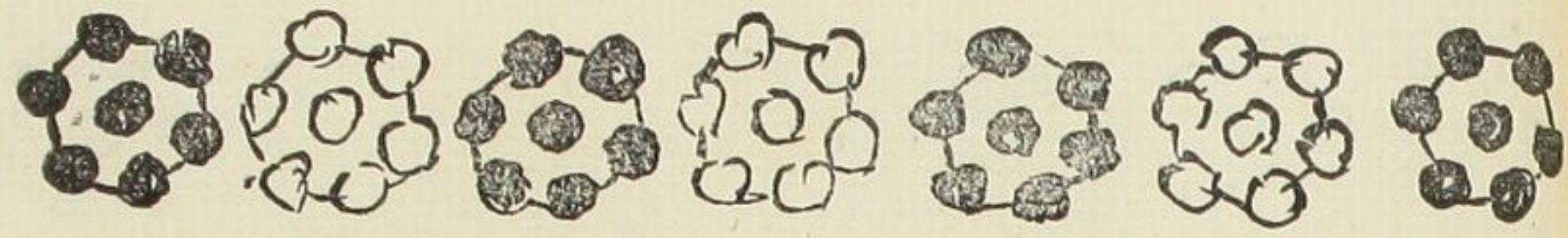


にはおられなかつた。

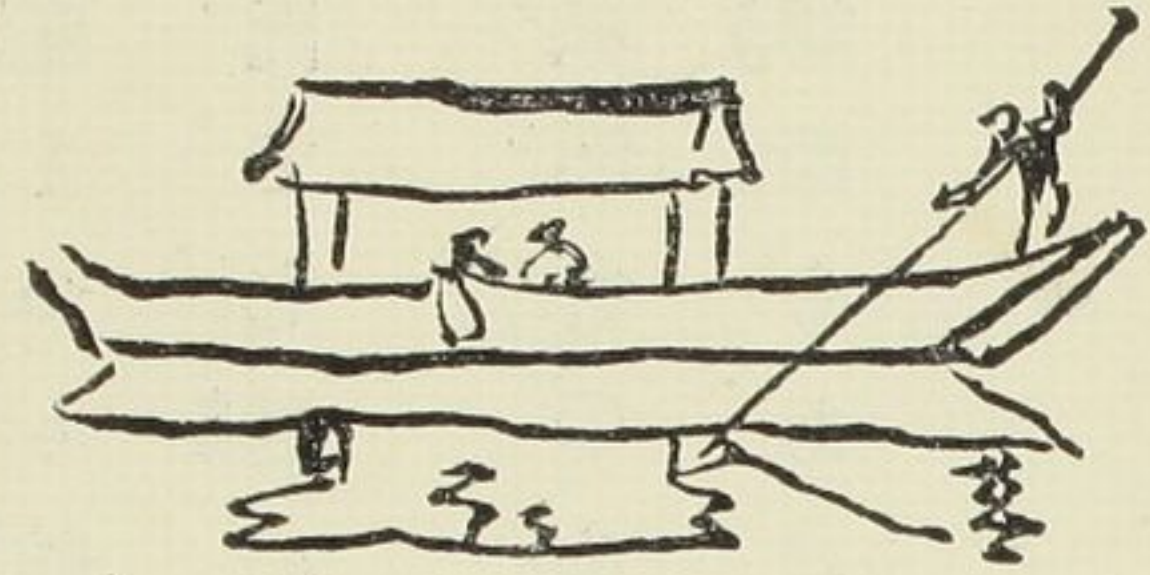
1012



1012

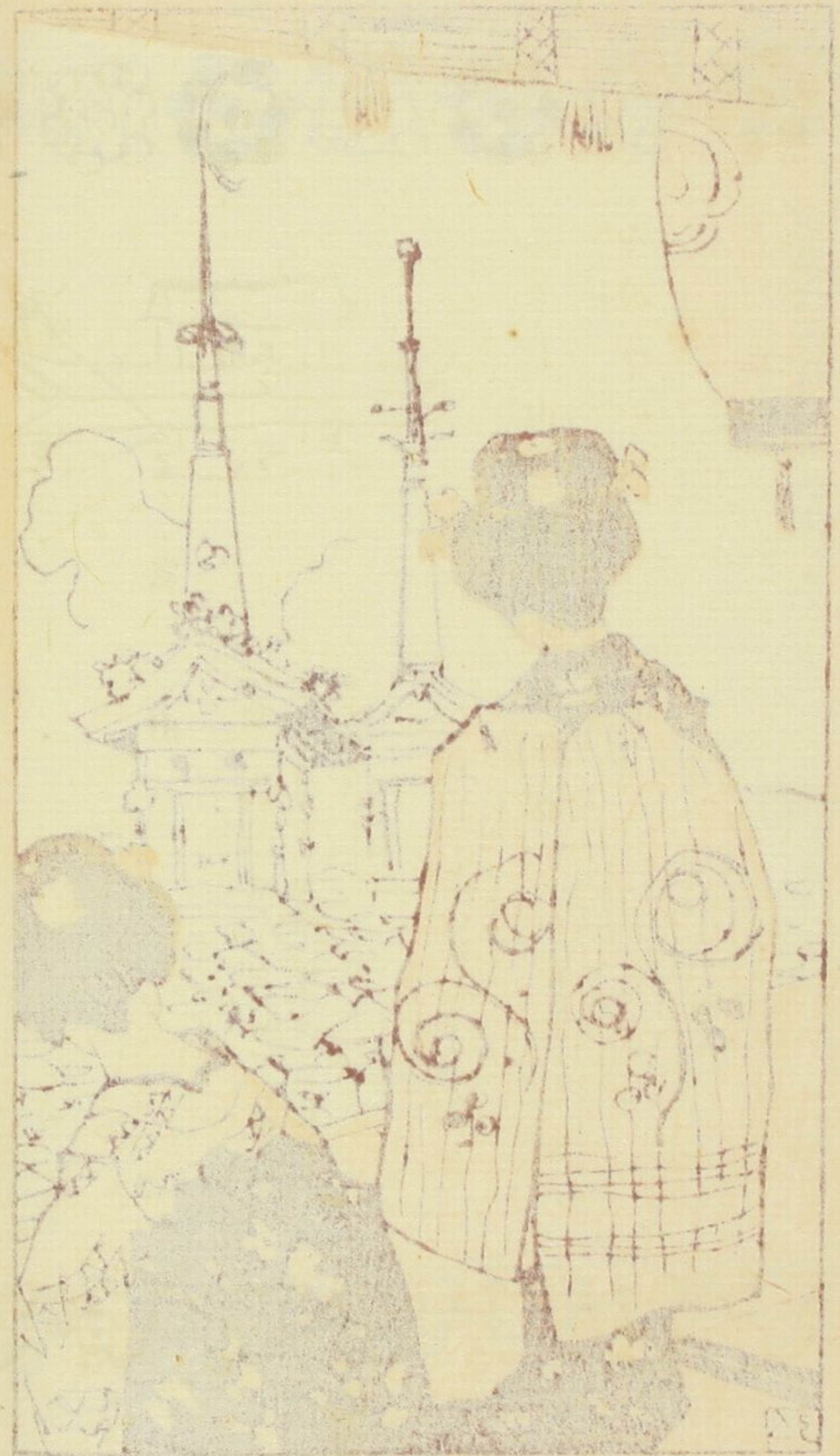


あらし山夢窓國師も舞姫もわたりし橋の
 夕涼みかな



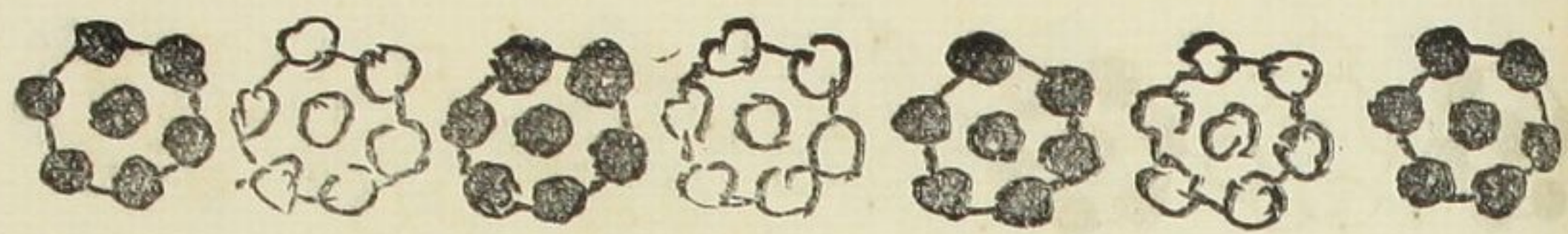
嵐山

天龍寺の門にて會ひし僧は瘦せて羅漢のごとくなりき。舞姫に聴けばよく祇園に来て酒のむと云ふ。



夕涼み

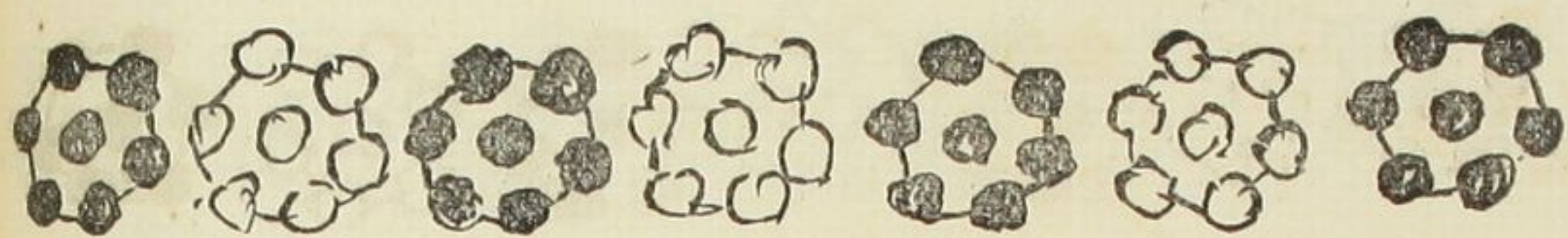
117



わが思ふ君にむかへばつれづれの五丁な
らべも勝ちがたきかな

五丁ならべ

挑まれていなむべきかは。君が取りたる黒の石に、
わが白き石ははやくも負けぬ。これもまた忘れえぬ
思ひ出のひとつ。



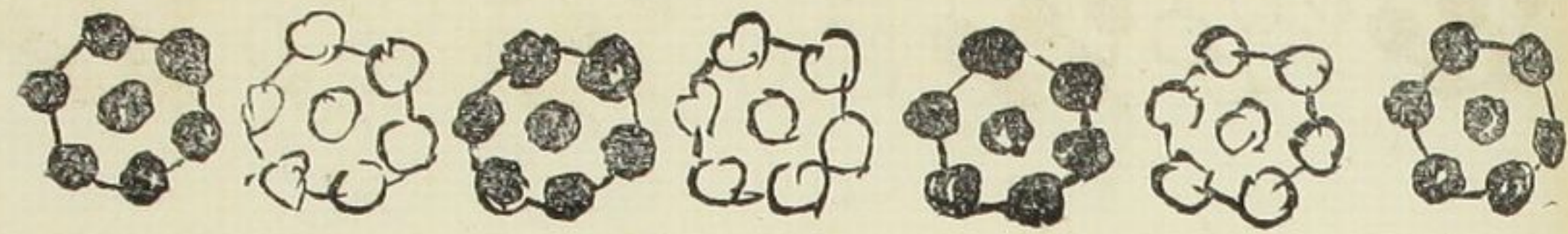
祇園會

祭見に君ゆくと云ふ。われも往かばや。

夏まつり神輿洗ひのにぎはひのなかに見
出でし君にやはあらぬ
祇園會のあとの寂しさしよんぼりとゆく
舞姫もあはれなるかな



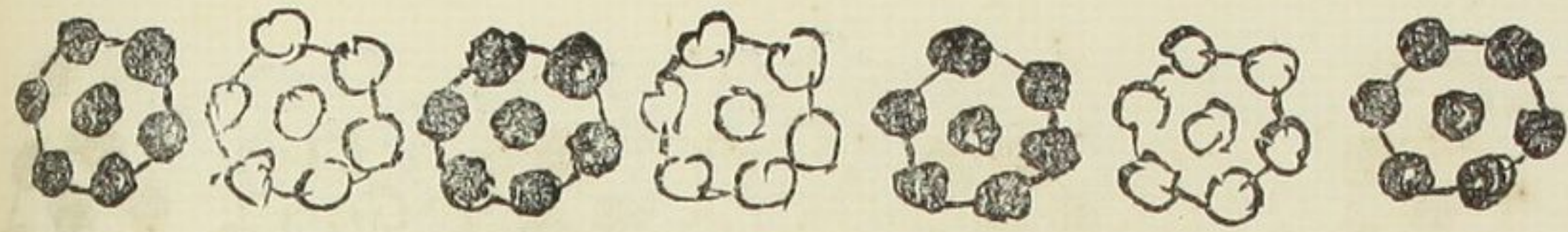
110
111



床^{ゆか}にして君^{きみ}と濡^ぬるれば夏^{なつ}の夜^よの俄^{にはか}雨^{あめ}さへ
うれしと思^{おも}ひぬ

俄雨ほどおもしろきはなし。床の狼藉鎮まるころに
は、いつしか雨霽れて星さへ出でぬ。月細し、比叡の
あなたに。

俄雨

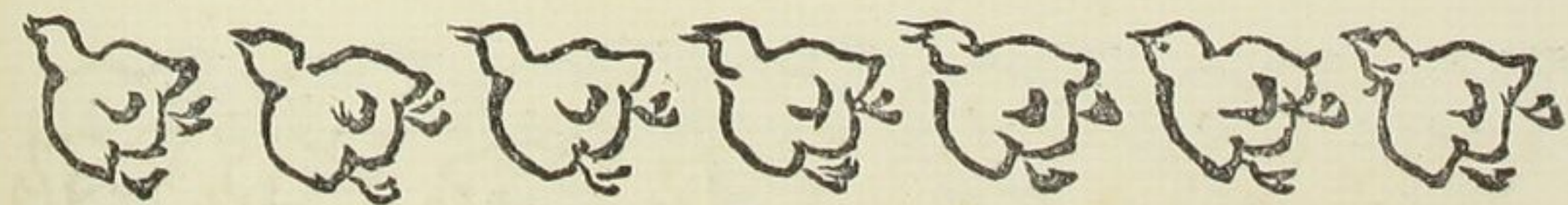


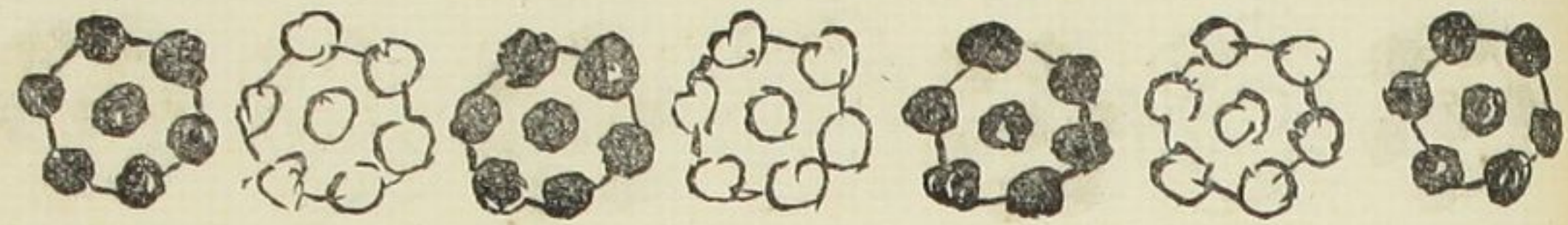
魂まつり

あはれなる舞姫のために、君も涙をそそぎたまへ。

去^こ年^ぞ亡^うせし舞^ま姫^{ひめ}のあととむらふと舞^ま姫^{ひめ}の
す^たる魂^{たま}まつりかな

十^じ五^ごにて身^みまかりし子^このたましひのごと
く^くに咲^さきぬ月^{つき}草^{くさ}の花^{はな}

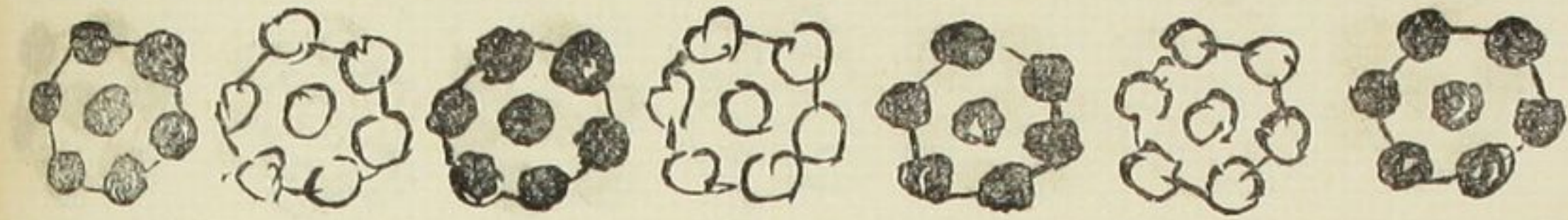




舞^ま姫^{ひめ}に笑^{わら}はれながら酒^{さけ}をのむ丹^{たん}波^はの客^{きやく}も
床^{ゆか}にすすみぬ

床納涼

をかしきは丹波大盡、さしづめ西鶴に描かるるところを、今の世に生れしありがたさは、後の世に書き残すひともなし。



酔興

酔ひしれしたはれをの罪贖ふによしなし。詮なや、それを歌占とも見たまへ。

とがめたまふな
ざれ歌^{うた}に舞^ま扇^{あふぎ}をばけがしたるわが酔^{すゐ}興^{きよう}を

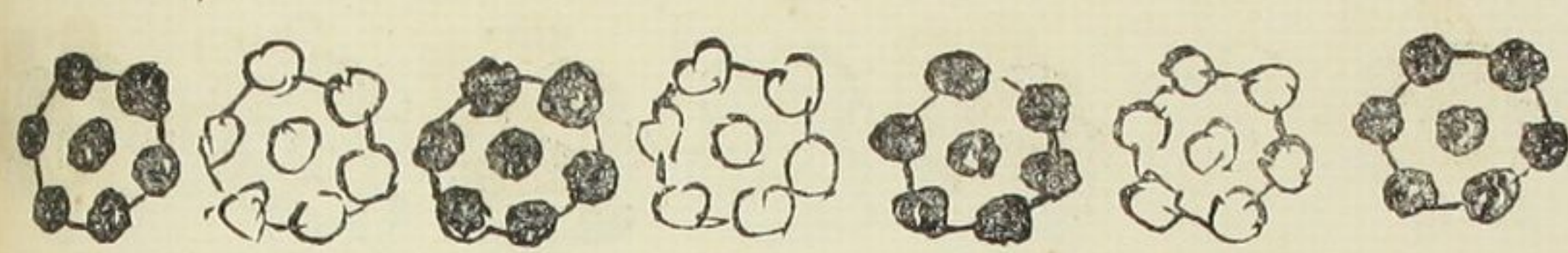




加茂川に夕立すなり寝て聴けば雨も鼓を
 打つかとぞ思ふ

夕立

東山に雲かかりぬと見る間に、夕立はいつか河を越えて来りぬ。飛沫や入ると云ひながら障子をしむる君が手よ。



誰が戀か床より床へ語らるる今年の夏の
 噂なるらむ

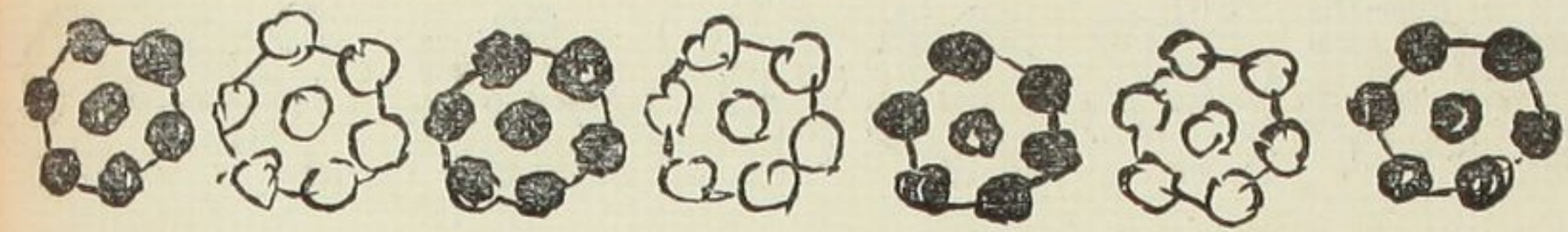
噂

噂ゆゑ戀しと思ひ、噂ゆゑ身を焦がす。誰も戀する身ぢやほどに。

121

122





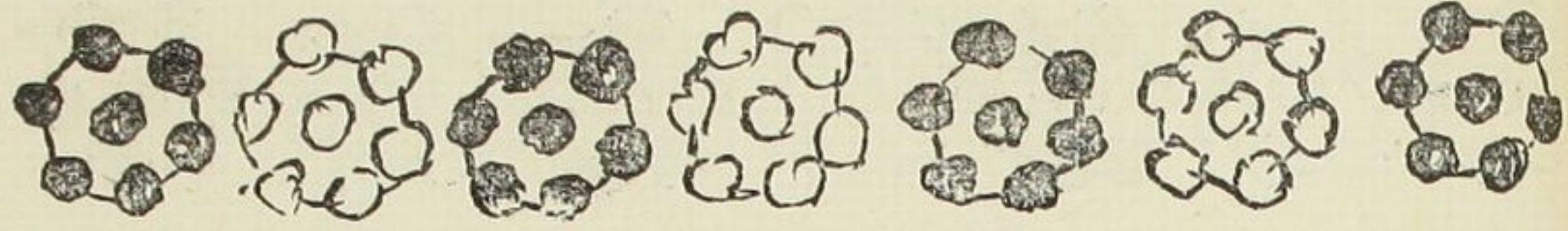
饒舌

名を差さば怒りやせむ。わざとその名を問ひたまふな。饒舌なればこそかはゆきものを。

寺町のしやべりのなるが娘とてこの舞姫のよく語ることに



100

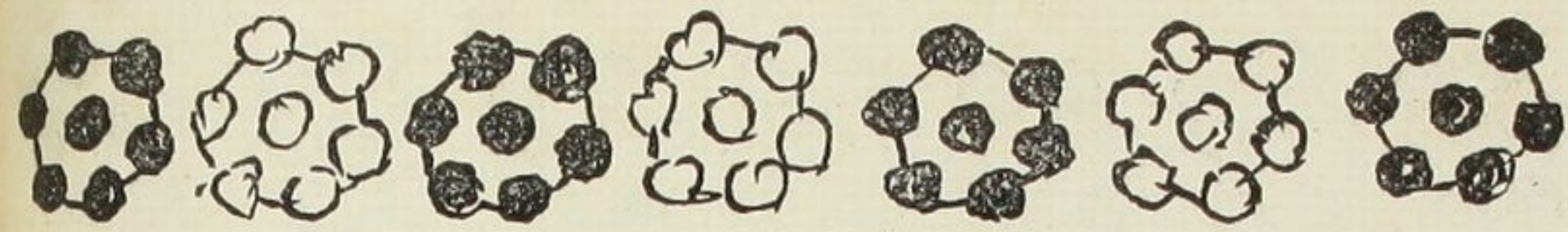


秋風

木屋町の涼床でしみぐ夏なつの短夜みじかよの情趣じやうしゆに酔よつてゐた身みには、極めて微妙びひょうな、繊細せんさいな感觸かんしよくを以て迫せまつて來る秋あきの最さい初はつのおとづれが何なによりもうら寂さびしく感じかんじられる。河原かはらには眞夏まなつに劣せつらぬ明あかるい烈日れつじつの光ひかりが燃もえさかつてゐながら、よく眼めをとめてみるともうそのなかには薄黄色うすきいろい衰おとろへがそれとなく見みえてゐる。北山きたやまの方ほうから吹ふいて來る風かぜは大氣たいきをいやがうへに澄明ちやうめいにして、つい此間こゝまでは欄干らんかんのうへのとこころに見みえてゐた東山ひがしやまの連峰れんほうが空氣くうきの屈折くつせつの加減かげんで、まるで軒端のきばを壓あつするやうに近々ちかぢかと迫せまつて來る。河原かはらの雜草ざつさう、向岸むかうぎし



1000



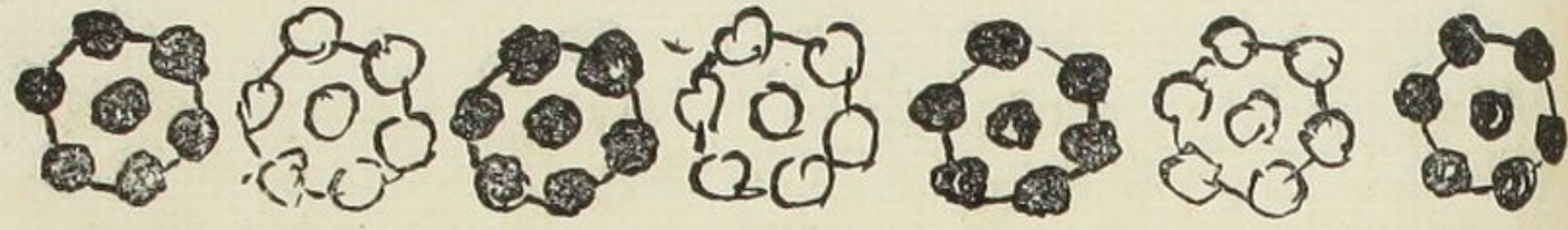
の柳並樹、遠い山脈を包む樹々のしげみ、さういつた眼に映るすべての緑の色からはいつかしら諦め顔に光澤が失せて、吹く風に誘はれてなびく葉末までがしよんぼりとうす寂しい。空には泡沫のやうな白い雲が頻りに去來して、瘦せきつた鴨川の水の紫にちろくと秋の心を映して行く。脛のあたりまで川水に踏み込みながら雑魚を漁る人の影も細く、長く、懶さに吹くその口笛の音も冷たく水の面にしみてゆくのである。

床の間の花瓶の花をかへに來た仲居が、今年は珍らしい薄尾花や、そのほかの美しい秋草の束をもつてゐるので、どうしたのかと訊くと、仲居はほゝるみながら、「愛宕の花賣りが持つて參りましたさかい。」と、答へて、

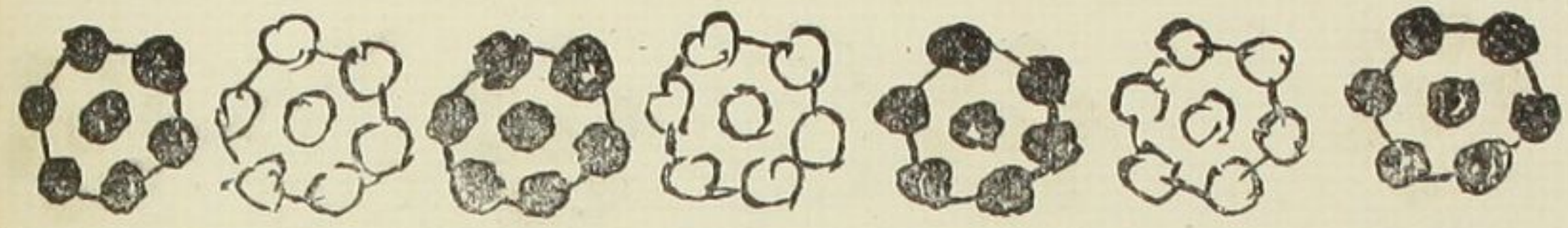
煙のやうな尾花の穂先を白い手でちよいと觸つてみせる。撓かな其手は銀色にちろと光つた。

洛中にさへこれ程の秋が見えて來たのであるから、山に近い大原や愛宕や北嵯峨にはもう落葉にむせぶ秋風の聲が間もなく聞えることであらう。あすこいらでは何よりも先に畑の畔の道祖神の石が白く洒れて、そこから秋風がたちそめるのである。

漸次と夕暮れが近づくに従つて、四邊の風物は益々秋らしい特徴を示して來る。吹く風は乾きよつてゐながらしつとりとした冷氣を含んで來て、長い黄昏がいつの間にか向岸の家並の影といはず、橋杭といはず、道ゆく人の顔にまでほんのり茜色にしみついてくる。山の影もそれとよみに



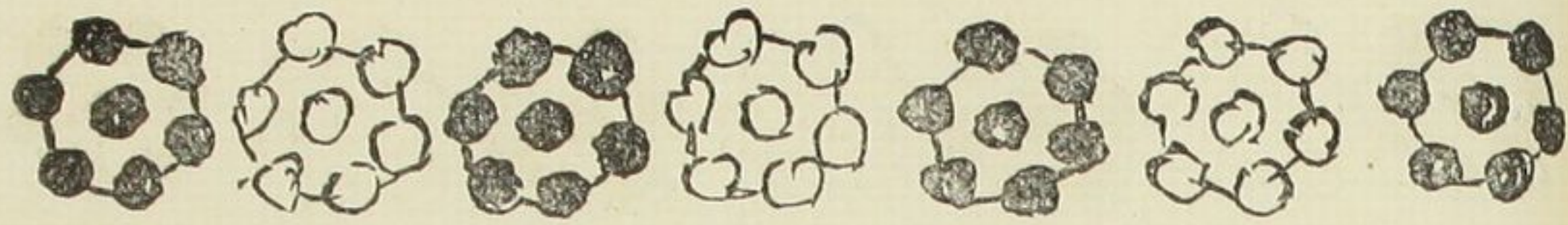
1041
1042



黒く沈んで、町の炊烟は一抹の靄に凝つて、刻々に東山の裾の方までのびてゆく。やがて寺々の鐘聲は暮れてゆく今日の終焉を悲しむやうに、その底から一つ二つと涙ぐむやうな燈影を撞き出してゆくのである。

夜が全く地上を掩ひつくしてしまふと、今度はとびくに點る疎らな涼床の灯影が殊更らに寂しい心地を湧かせる昨日をと、ひまでは數多い雪洞の影に聞えてゐた賑やかな妓の笑ひ聲もひっそりして、亡骸のやうな涼床が彼方でも此方でも徒らに河原の夜を暗くしてゐる。

殊に月のいゝ晩には一層その寂しさが深い。舞妓をよんでも紹の單衣は又友禪に變つて、白粉の乾いた頬が妙にその顔を大人びて見せる。開きもせぬ扇を胸のあたりに弄び

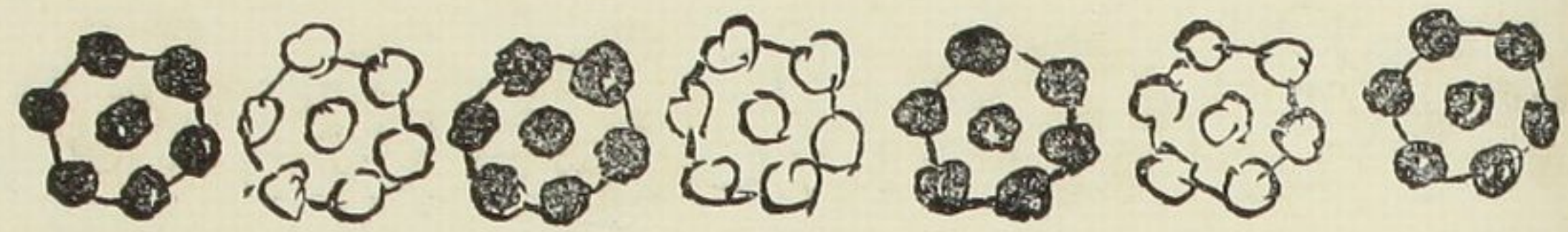


ながら、

「ほんまに涼しうなりましたえなあ。」などと呟いて河原をみつめるその眼には月の色が白く、口紅をもれる皓齒が石のやうに冷たい。

その日から木屋町には日一日に秋が更けまさつてゆくのである。

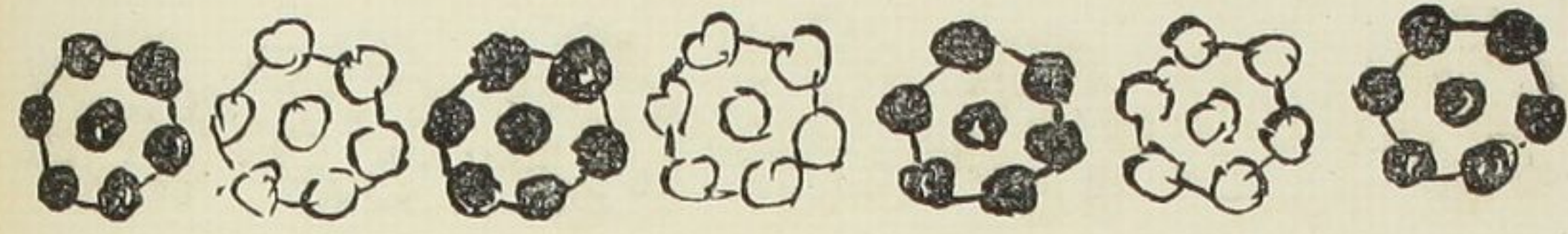




舞姫のため
に筑紫の山持
が七つの山を
賣ると云ふ秋

挿話

紅燈の巷にありて聴くものがたりの數々、あはれなるもの、なかしきもの、先づ何よりか語りはじめむ。



木屋町の夜の話をたねも盡き月落ち方となり
にけるかな
雨ほそく叡山苔を濡らしるぬ君とながむ
木屋町の庭

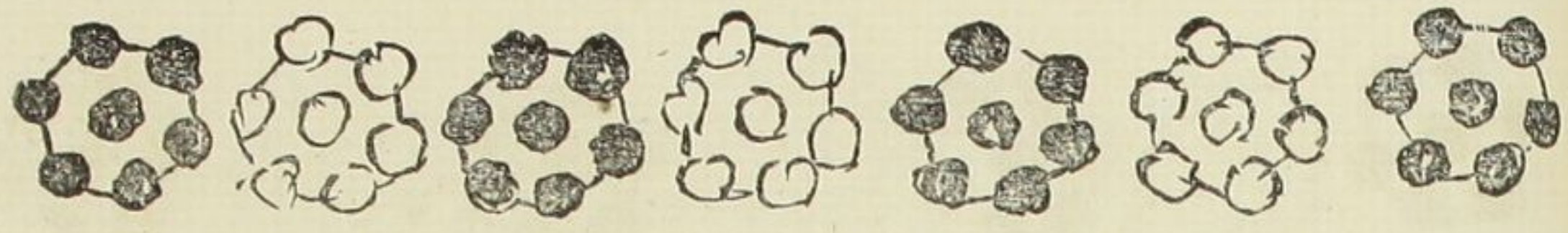


木屋町

君よ、木屋町の夜を忘れたまふな。



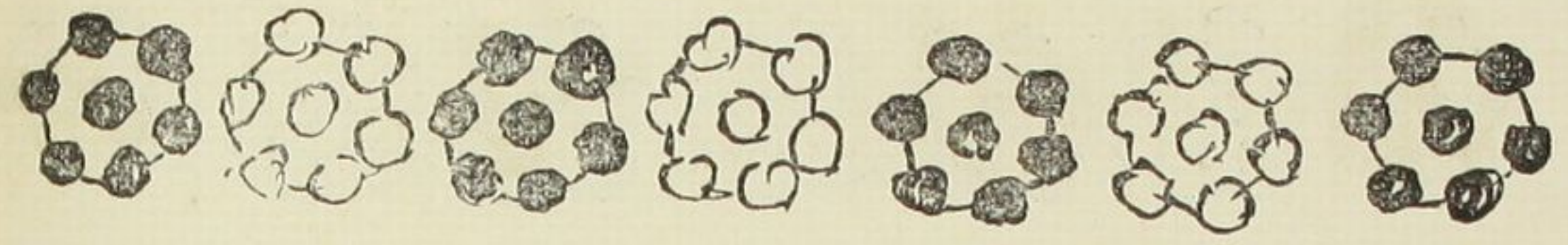
144、145



こほろぎの皺しわ唄うたれざるを聴ききてふと高野たかのの
 の叔父おぢを思おもふ君きみかな
 こほろぎや君きみと歩あゆめば木履こはきの鈴すずも鳴なくや
 と思おもはれしかな

こほろぎ

君泣なきぬ、こほろぎのこと。こほろぎ鳴なきぬ、君の
 こと。



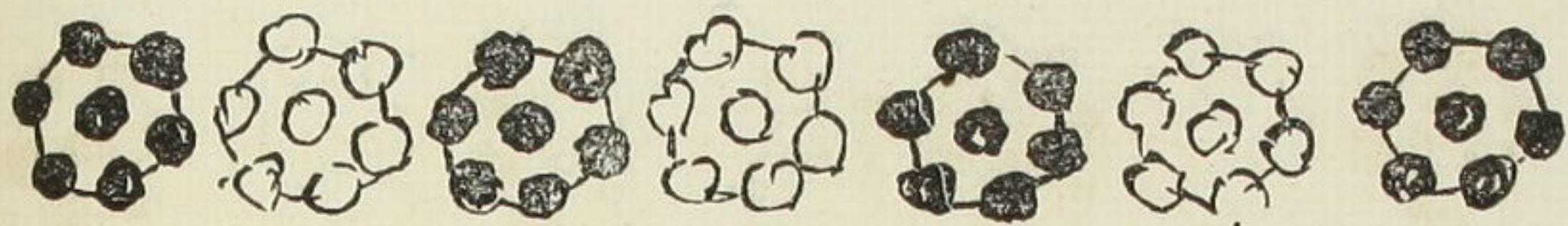
四條河原

河原蓬かはらよもぎの香かほにこそにはへ、われらが戀こひのたかき噂うわさは。

たそがれの四條河原よじょうがはらの露つゆのなか君きみによく
 似にし泣なく音ね聴きこゆる
 露つゆに濡ぬれ君きみが素足すあしもなまめきぬ河原蓬かはらよもぎに
 夜戸出よとでするとき



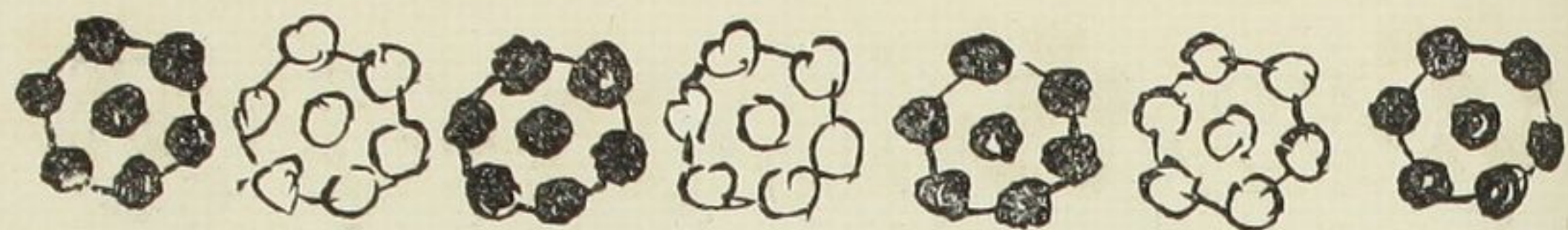
こほろぎ



蟲の音

かかる不思議もあることゆゑ、ゆめ河原にな出でたまひそ。

蟲の音にふと誘はれし舞姫は河原にゆきてゆくゑ知らずも



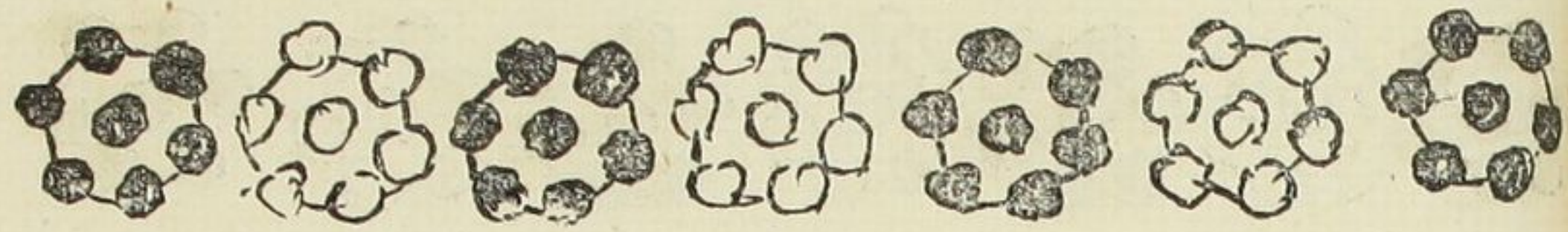
樊噲

樊噲と云へどむくつけき男にはあらず。いづればたはれなが世を忍ぶ假の名と知らずや。

あだ名して樊噲と呼ぶ極道もしみじみとしてあそぶ秋の夜



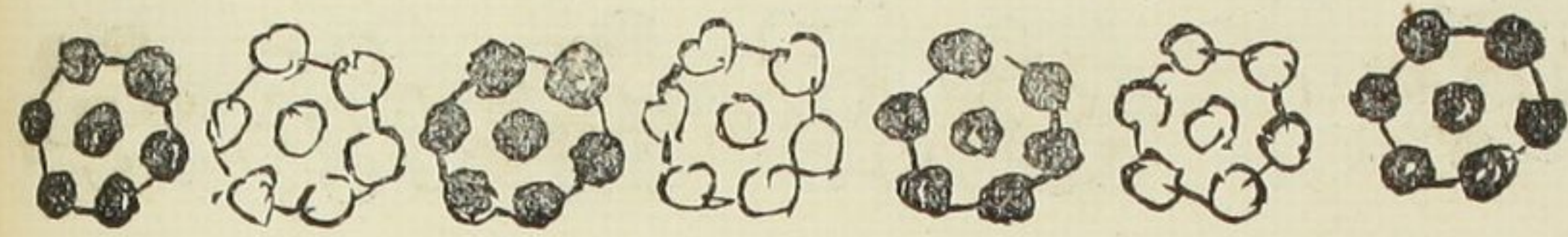
一五七



木屋町の涼床でしみぐ夏の短夜の情趣に酔つてゐた身には、極めて微妙な、繊細な感觸を以て迫つて来る秋の最初のおとづれが何よりもうら寂しく感じられる。河原には眞夏に劣らぬ明るい烈日の光が燃えさかつてゐながら、よく眼をとめてみるともうそのなかには薄黄色い衰へがそれとなく見えてゐる。北山の方から吹いて来る風は大氣をいやがうへに澄明にして、つい此間までは欄干のうへのところに見えてゐた東山の連峰が空氣の屈折の加減で、まるで軒端を壓するやうに近々と迫つて来る。河原の雜草、向岸



秋風



立秋

床の數日ごとに減りて、風さへ寒くなりまゐりぬ。ひと夏のみの戀ははかなし。

秋風が疎らになりし床を吹く頃ともならば君にわかれむ

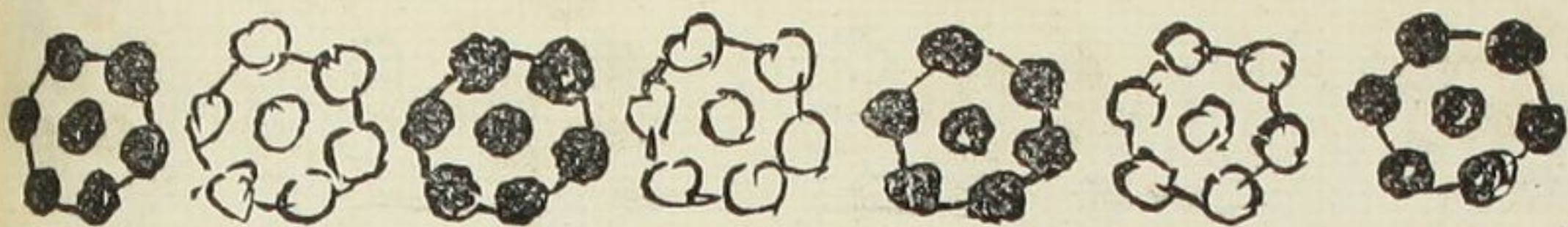




煙のやうな尾花の穂先を白い手でちよいと觸つてみせる。
 撓かな其手は銀色にちろと光つた。

洛中にさへこれ程の秋が見えて来たのであるから、山に
 近い大原や愛宕や北嵯峨にはもう落葉にむせぶ秋風の聲が
 間もなく聞えることであらう。あすこいらでは何よりも先
 に畑の畔の道祖神の石が白く洒れて、そこから秋風がたち
 そめるのである。

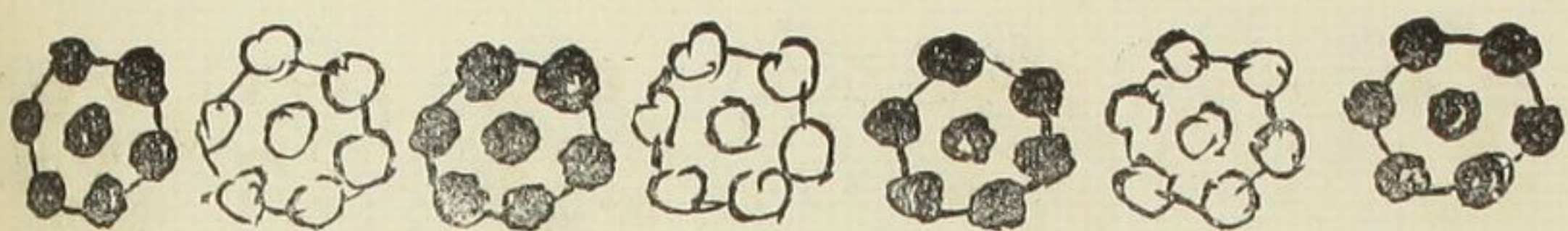
漸次と夕暮れが近づくに從つて、四邊の風物は益々秋ら
 しい特徴を示して来る。吹く風は乾きよつてゐながらしつ
 とりとした冷氣を含んで来て、長い黄昏がいつの間にか向
 岸の家並の影といはず、橋杭といはず、道ゆく人の顔にま
 でほんのり茜色にしみついてくる。山の影もそれとよみに



の柳並樹、遠い山脈を包む樹々のしげみ、さういつた眼に
 映るすべての緑の色からはいつかしら諦め顔に光澤が失せ
 て、吹く風に誘はれてなびく葉末までがしよんぼりとうす
 寂しい。空には泡沫のやうな白い雲が頻りに去來して、瘦
 せきつた鴨川の水の紫にちろくと秋の心を映して行く。
 脛のあたりまで川水に踏み込みながら雑魚を漁る人の影も
 細く、長く、懶さに吹くその口笛の音も冷たく水の面にし
 みてゆくのである。

床の間の花瓶の花をかへに來た仲居が、今年は珍らしい
 薄尾花や、そのほかの美しい秋草の束をもつてゐるので、
 どうしたのかと訊くと、仲居はほゝるみながら、
 「愛宕の花賣りが持つて參りましたさかい。」と、答へて、

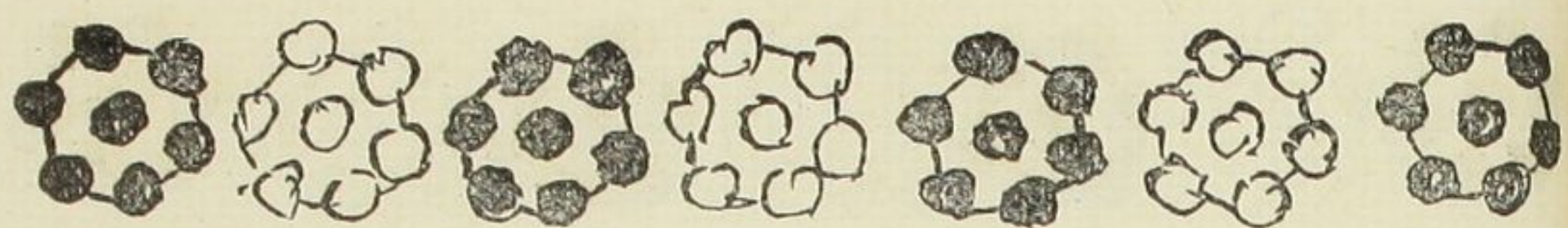




黒く沈んで、町の炊烟は一抹の靄に凝つて、刻々に東山の裾の方までのびてゆく。やがて寺々の鐘聲は暮れてゆく今日の終焉を悲しむやうに、その底から一つ二つと涙ぐむやうな燈影を撞き出してゆくのである。

夜が全く地上を掩ひつくしてしまふと、今度はとびくに點る疎らな涼床の灯影が殊更らに寂しい心地を湧かせる昨日をと、ひまでは数多い雪洞の影に聞えてゐた賑やかな妓の笑ひ聲もひっそりして、亡骸のやうな涼床が彼方でも此方でも徒らに河原の夜を暗くしてゐる。

殊に月のいゝ晩には一層その寂しさが深い。舞妓をよんでも紹の單衣は又友禪に變つて、白粉の乾いた頬が妙にその顔を大人びて見せる。開きもせぬ扇を胸のあたりに弄び

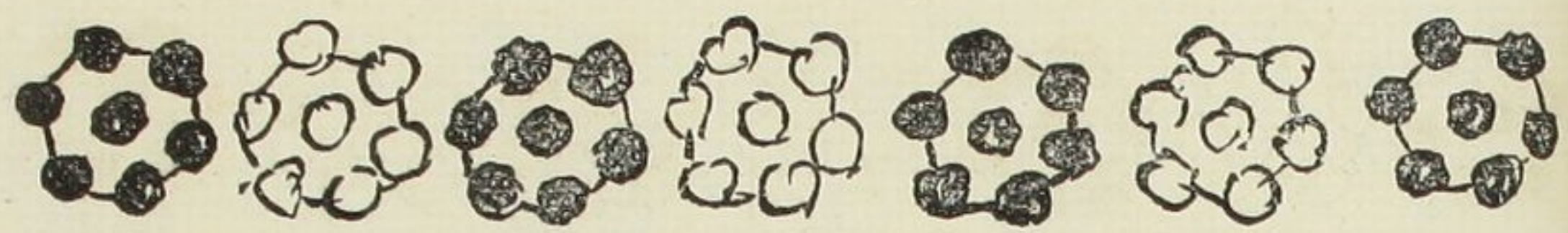


ながら、

「ほんまに涼しうなりましたえなあ。」など、呟いて河原をみつめるその眼には月の色が白く、口紅をもれる皓齒が石のやうに冷たい。

その日から木屋町には日一日に秋が更けまさつてゆくのである。

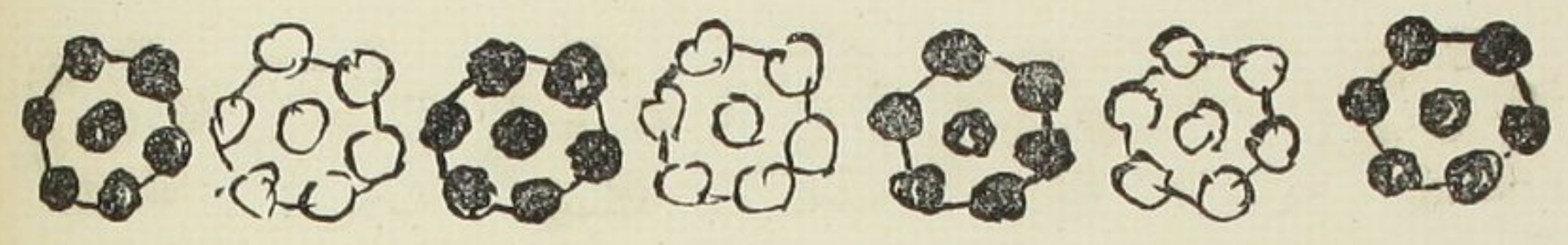




舞姫のため
に筑紫の山持
が七つの山を
賣ると云ふ秋

挿話

紅燈の巷にありて聴くものがたりの數々、あはれなるもの、をかしきもの、先づ何よりか語りはじめむ。



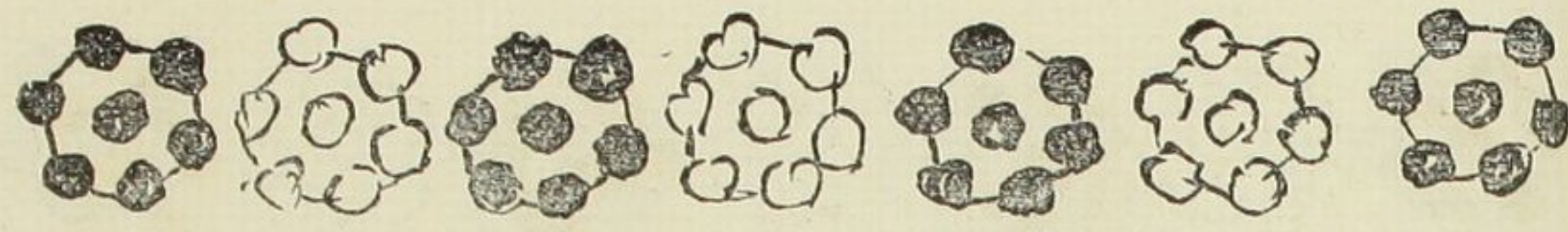
木屋町の夜の話をたねも盡き月落ち方となりけるかな
雨ほそく叡山苔を濡らしぬ君とながむ
木屋町の庭



木屋町

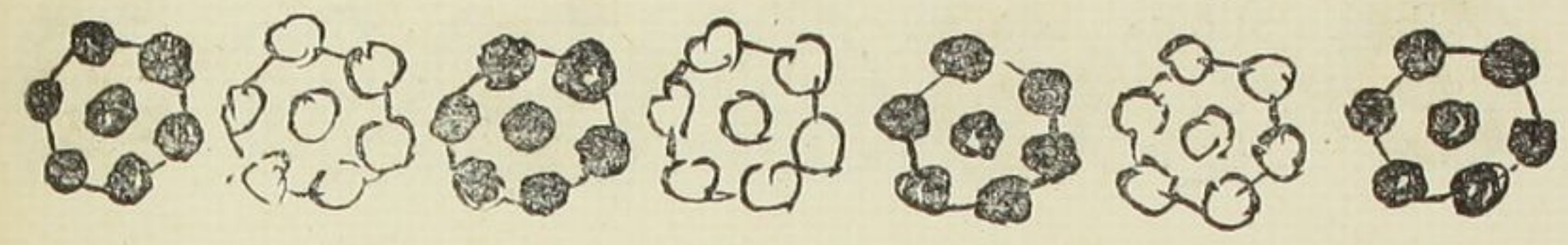
君よ、木屋町の夜を忘れたまふな。





こほろぎの 皴しわ 唄うたれ ぶるを 聴ききて ふと 高野たかのの
 の 叔父おぢを 思おもふ 君きみかな
 こほろぎや 君きみと 歩あゆめば 木履こはの 鈴すずも 鳴なくや
 と 思おもはれ しか かな

こほろぎ
 君泣きぬ、こほろぎのこと。こほろぎ鳴きぬ、君の
 こと。



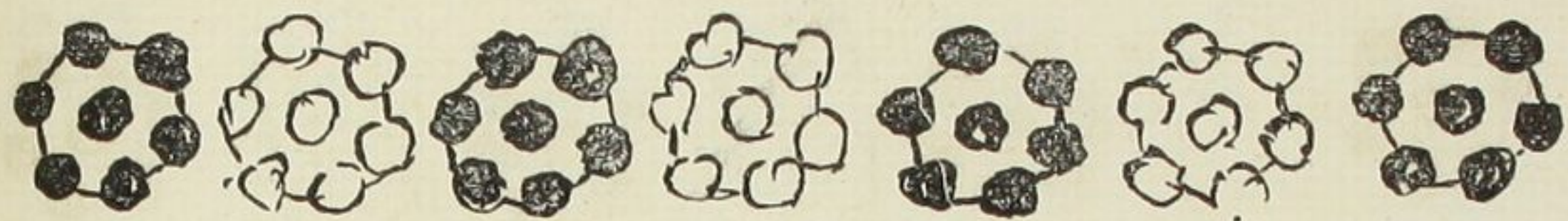
四條河原

河原蓬の香にこそにはへ、われらが戀のたがき噂は。

たそがれの 四條河原よじょうがはらの 靄もやの なか 君きみによ
 く 似にし 泣なく 音ね聴きこゆる
 露つゆに 濡ぬれ 君きみが 素足すそも なまめきぬ 河原蓬がはらよらぎに
 夜戸出よとでする とき



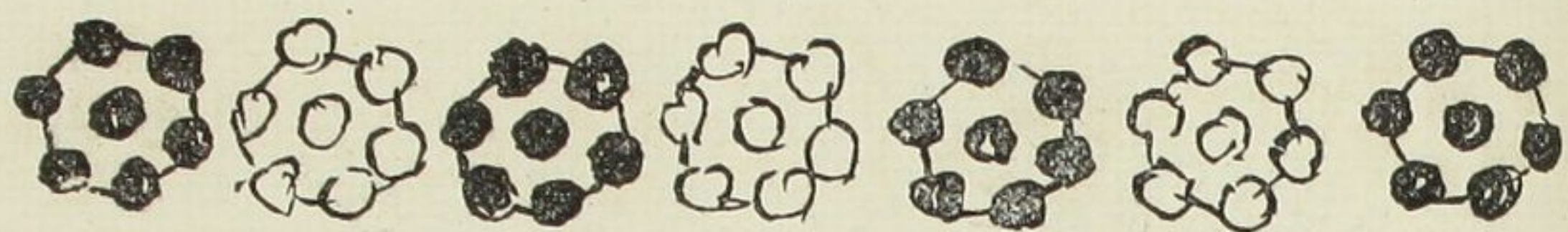
こほろぎ



蟲の音

かかる不思議もあることゆゑ、ゆめ河原にな出でたまひそ。

蟲の音にふと誘はれし舞姫は河原にゆきてゆくゑ知らずも



樊噲

樊噲と云へどむくつけき男にはあらず。いづれはたはれをが世を忍ぶ假の名と知らずや。

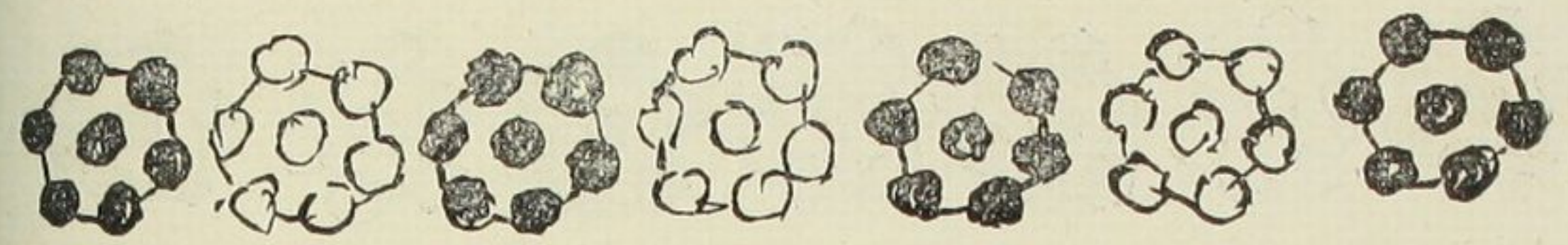
あだ名して樊噲と呼ぶ極道もしみじみとしてあそぶ秋の夜



一五七



秋の恋

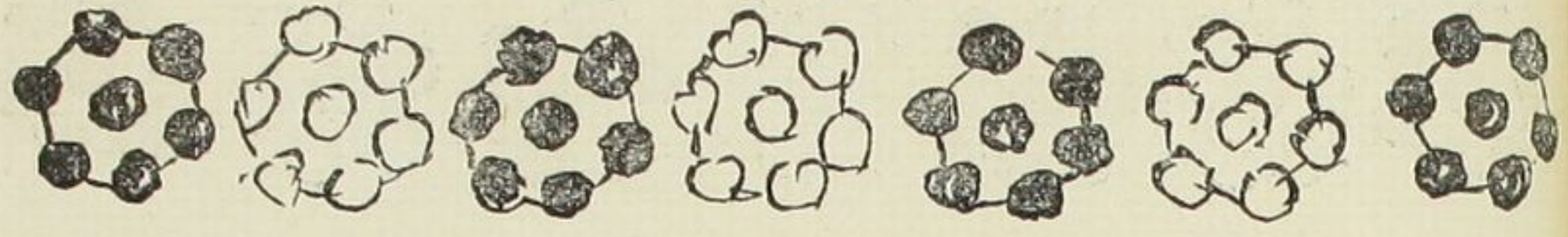


立 秋

床の數日ごとに減りて、風さへ寒くなりまさりぬ。
ひと夏のみの戀ははかなし。

秋風が疎らになりし床を吹く頃ともなら
ば君にわかれむ





島原小景

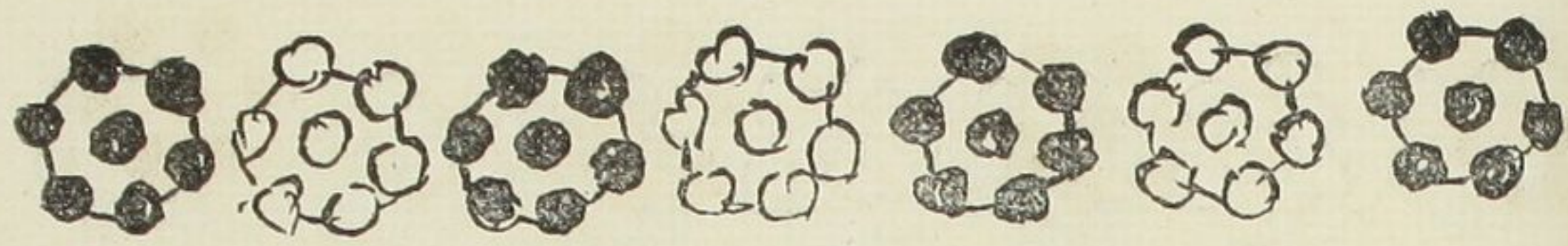
この里の事は皆偽かと思へば、折ふしは眞實も降り
けり。——西鶴。

秋の夜は廓もさびしかなしげに禿のころ
す鼠尾草の花

高橋と太夫の名をばしるしたる大長持の
瑠璃の棹かな



島原小景



うつくしき僧とをさなき舞姫の戀がたり
など悲しかりにし

戀物語

戀物語もおほく聴きぬ。京にて聴けばことさらにあはれき身にしむこころぞする。



嗟 峨

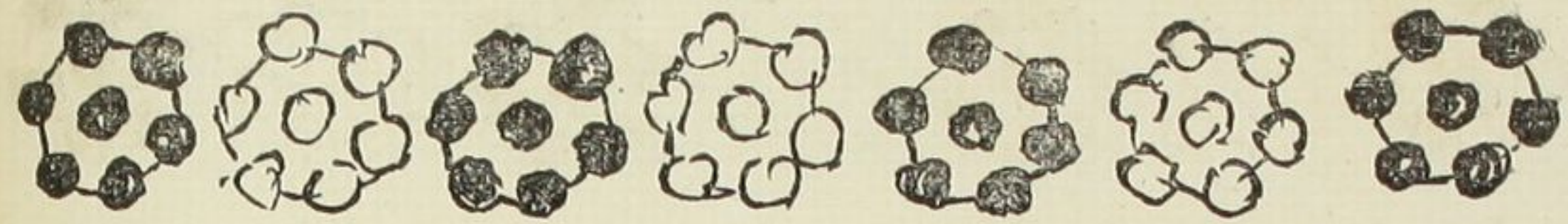
嗟峨にゆきしは何時なりけむ。胸に残るひともなけれは。過ぎし日のことはなべて忘れつ。

しめやかに時雨の過ぐる音聴こゆ嗟峨は
もさびし君とゆけども

120

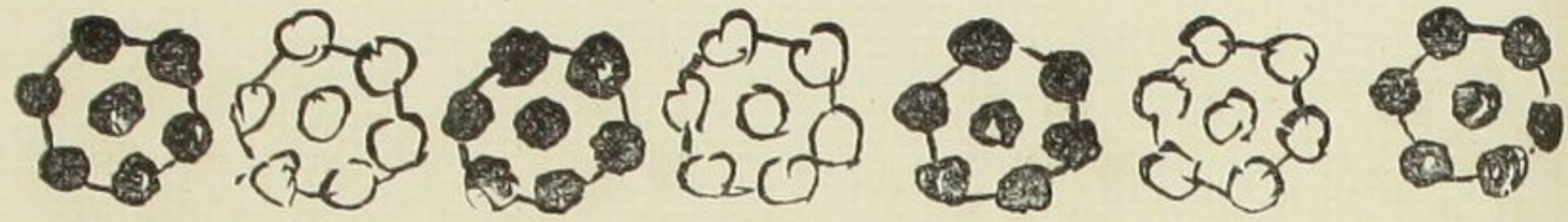
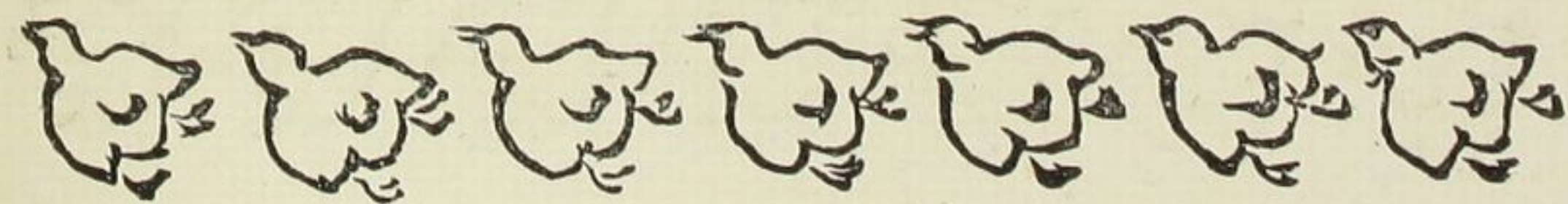


恋物語



蜘蛛

その晩はどうした機からか、四人も集まつた舞妓達はいづれも夜の閑けまさるに従つて漸次と物語りの興味に酔はされて来た。問はず語りにさまさまの面白可笑しい話が次から次へと絶え間もなく打續いた。まだ感情の激しい起伏をみせぬあどけない戀語りをする者もあれば、自分達の果敢ない、そして何處か哀愁に充ちた生立ちを語るものもあつた。しまひにはさすがに話の種も盡きて、誰からともな

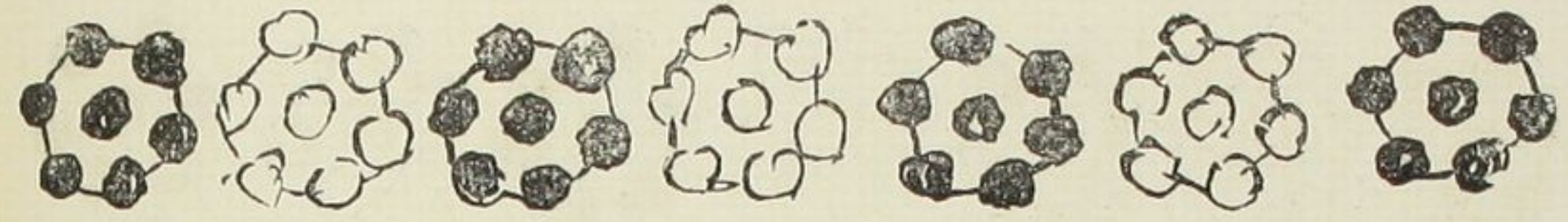


くふつと言葉をきつて互に黒い瞳を見交はしながら不思議な沈黙に囚はれることもあつたが、そのうちにいつかしらはの暗い紙燭の光のさゆらぎや、ひつそりとした秋の夜更けの寂しい情趣に誘はれて、彼等の間の話題は自然と百物語のやうな奇怪な怪談に落ちて行つた。

一番年かさの小君は先づ序開きに稍滑稽な俳味をおびた狸の話をした。その次には、伏眼がちな美しい瞳をもつたさん子がひそひそと訴へるやうな低聲で艶殺にされた美姫の執念を語つた。いづれも夢幻的な色彩に富んだ幻怪な物語ではあつたが、彼等の玉蟲色に光る小さな唇を洩れる時、多くは玉のやうな滑らかな言葉の肌を掩はれて、核心の凄味といふものは少しも聞く人の耳に傳へられなかつ



蜘蛛の目

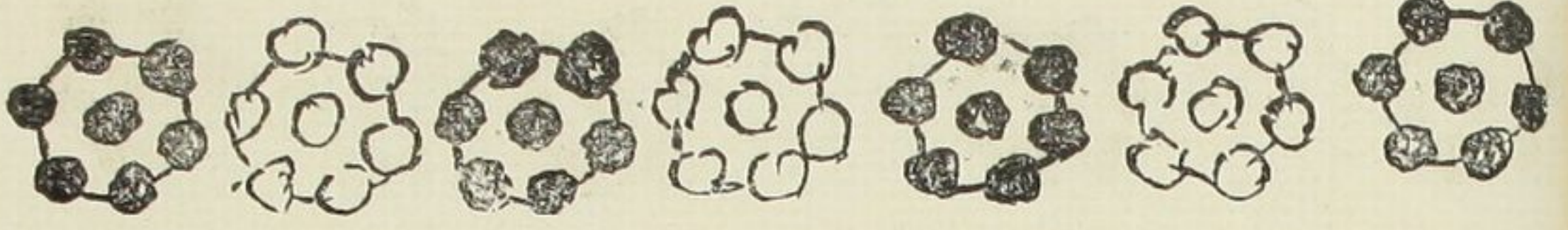


た。彼等自身にとつてはその小さな情緒や、空想を戦かすやうな物凄事實であつても、遙かに東から来た親しみの浅い旅人にはそれが全く一個の音楽であつて、それから單音階の笛聲が與へるやうな微妙な音調の美を聴取し得るに過ぎない場合が多かつた。

さん子の物語りが濟むと、今度は頬の豊よかな松勇が急に思ひついたやうに大きな瞳を輝かして、

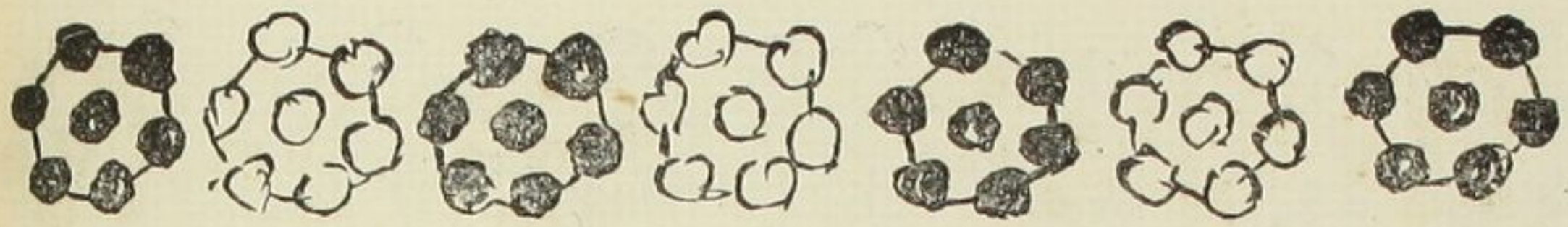
「ほんなら今度は私に云はしとくれやはいな。」と、叫んで隣に坐つた小菊の美しい友禪の袖につつと手を置いた。そして話の筋を纏めようとするのか、その儘天井の方へ眼を漂はせながらじつと深い思ひに暮れるやうな姿をした。

白川にかけ出した縁端には宵から初秋の良夜を思はせる



やうな冴え渡つた月光が射し入つてゐたが、それもいつの間にか影を收めて、薄白い障子の面は一面に何處となく濕氣を含んで来た。ふと氣づいて耳を敏けると、又今宵も時雨が落として来たとみえて、檜皮葺きの低い軒先にはひそやかな雨滴の音がしとしと滅入るやうに聞えてゐる。そして狭い川をなかに夾んだ軒並の家々もいつになく絃歌のさんざめきをひそめて、暗く更け静まつた夜の底からは咽ぶやうな、嘆きわづらふやうな水音ばかりが絶え間もなく湧き上つて来る。山に近い街の氣紛れな天候はそれとも鋭い冷氣を運んで来て火鉢の側へ寄り添ひたいやうな寒さが間内に漸次と忍び入つて来たが、それでも一座の興趣は静寂ととも凝つて、舞妓達は片唾をのんで今にも語り





出さうとする松勇の顔に腫を据ゑてゐた。
暫らくすると松勇は漸う我に返つて、

「何やしらん筋が怪體になつてしまふけれど、私のはな、
蜘蛛の精の話どつせ。」と、云ひながら静かな、考へ深い眼
眸をして一座を見渡した。

「蜘蛛の精ちふのは何の事どす？」と、一番年の下な小菊
は圓らな眼を睜つて、頓狂な聲で聞く。

「まあ、黙つて聞いといでやはい。」と、さん子は眉を顰め
てたしなめるやうにその言葉を抑へて、松勇の方をみなが
ら、「早う云うてお呉れやすな。そないに考へんでもえゝや
ないか。」

「ぢや云ひますわ。この話はな、こないだお客さんにせん

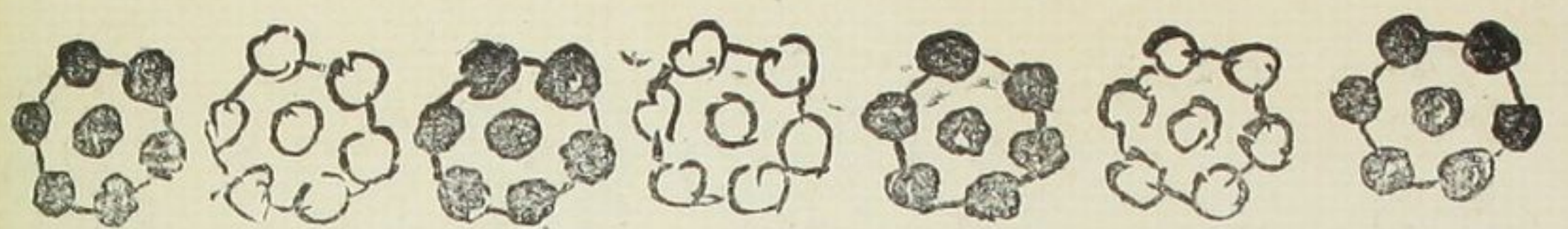


ど云ふて貰うたんやけど、鈍なさかいによう覺えてやへん
の。ほんでに私にはよう云へんかも知れんけど、ほんまは
な、そら恐い恐い話やのつせ。」と、松勇は一膝のり出して
蜘蛛の精の昔話を諄々と語りはじめた。

「昔な、丹波の國の在所に或るお庄屋はんがあつたんどす
て。そこはな、もう昔からの古い古い家だな、お金やたら寶
ものやたらそんなものがたんとあるのどすて。そこに一人
の娘はんがあつた。年は丁度十六でな、そらほんまに美し
い美しい娘はんやの。そんなえゝ家で安條にして育てゝ貰
はゝつたんやさかいな、ものもよう出来るし賢うてな、悪
いとこは爪の先ほどあらへんの。ほんでにな、方々の金
満家やら、お侍はんやらからな是非嫁にせう嫁にせうちう

1
.....
お侍はん

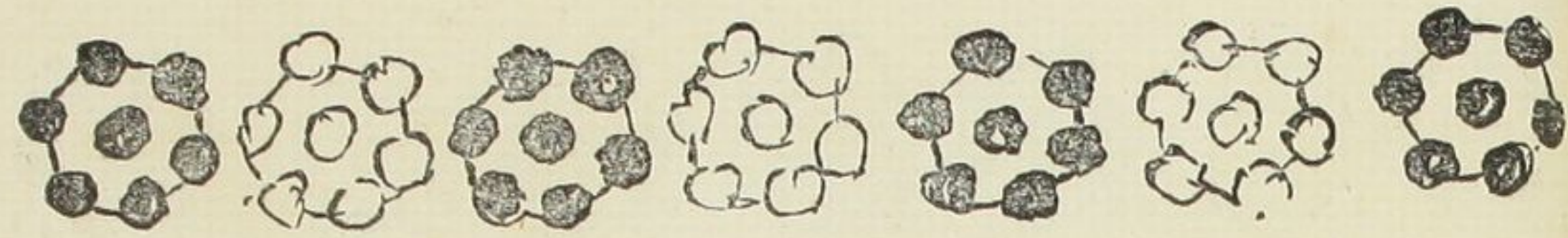




てきつう喧しう云ふて來やはんの。そやけどな娘はんの方
 には誰れが好きや嫌ひやちうことはないのやけど、お父さ
 んや、お母あんがえゝもん好きでな、どれも氣に入らんち
 うて中々お婿はんを取つて呉れやはらへんの。とな、その
 次の村にな矢張り同じやうなお庄屋はんがおしてな、そこ
 の息子はんがまた業平やつたかいな——そや、そや、業平
 はんのやうな美しい美しい男はんやの。學問もよう出来る
 し溫和しうてな、そらほんまにえゝ息子はんやの。ほんで
 にな、その男はんやつたらえゝやろちうてな到頭お父さん
 もお母あんも承知しやはつてな、吉日たら云ふ日を選んで
 愈々お婿はんにとらはんの。」



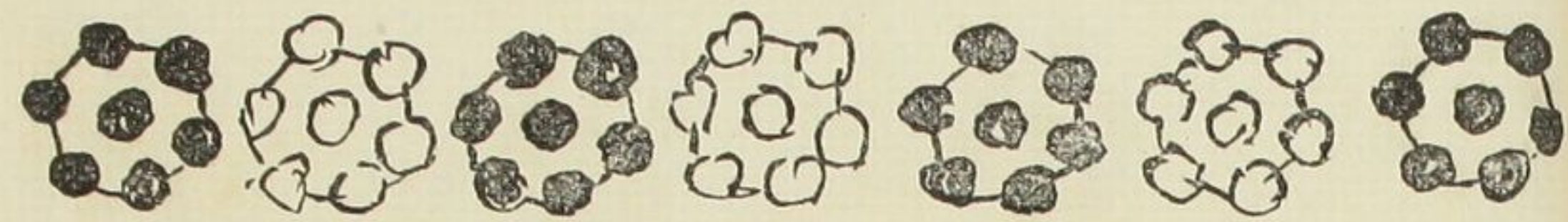
お婿はん



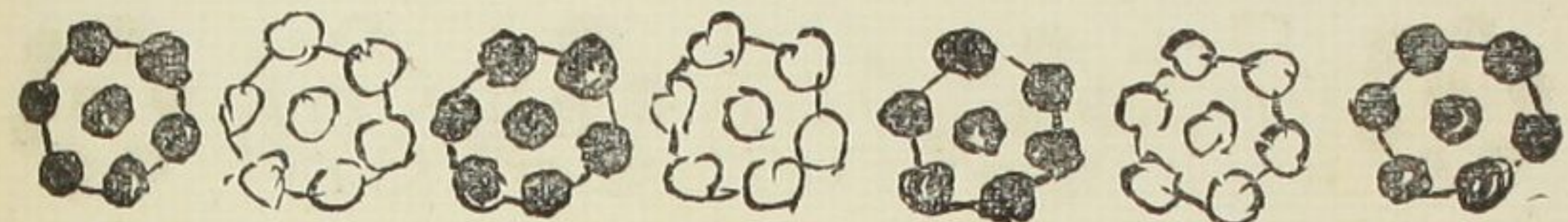
んもさぞ嬉しうおしたらうえなあ。」小君は身につまされたやうに肩を揺りあげながら云つて、さん子の顔を見る。さん子は黙つて合點くばかりであつた。

「ほんでな、その日はもう朝からえらい騒ぎでな、仕度もちんとしまうて待つてやはるとな、夕方になつていよいよそのお婿はんが仰山なお供を連れてお駕に乗つて來やはつた。ほして奥の大座敷で親類の人やら、お客はんやらみんな一緒によばれてお振舞ひが始まんのだ。ほしてな、夜遅う遅うにお開きになつてな、怪體なことを云ふやうにおすけど、娘はんはお婿はんと一緒にお床へ入らはんの。」と松勇は眞顔で云ひさして、急に喉を撫でながら咳入つて、「はあ喉が痛うて叶はんわ、姐はん、えらい濟まんことッつけど





らはる息子はんが此方へ來うと思つて途中までおいでやしたんやけど、俄の大病で今お亡りになりましたから、一寸急いでお断りに來ました。「ちやはんの。まあ怪體な今頃何云ふてなはんのやろ、狐にでも化かされはつたんやないかと思ふてな、家の人達は笑ひながら、「お婿はんはもう夕方にちやんとおいでやして、御祝言も目出度う濟んで今奥の間に寝とるやすがな。」ちうとな、その使に來た人は、吃驚してな、「そんな譯はあらへん。」ちうて、どうしても聞かはらへんの。餘りきつう云はるもんやさかいな、家の人もしまいには怪體になつてな、ほんならちうて娘はん達の寢てやはる間へいて、戸の外から娘はんの名を呼んでみやはんの。とな、どうした譯や知らん、なかうらはちよいとも

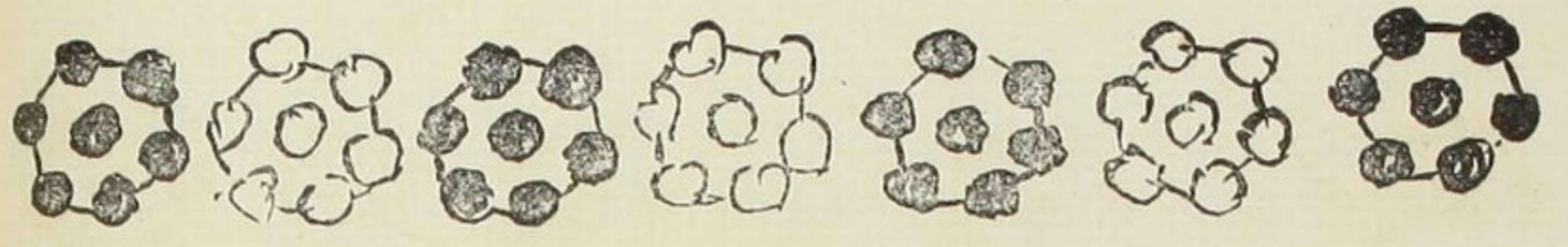


茶を一杯よんどくれやはいな。」頼まれた小君は話の筋に追はれてゆくやうな熱つこい眼眸をしながら手近にあつた久須を取上げて小さな湯呑へ濃い番茶を注いで出す。「おほきに。」と、松勇は眼を落としてそれをぐつと一息に飲みほしながら「はあ、おいし。これからが恐いのどつせ。」と、湯呑を傍へ置くと又一膝乗り出して語り續けた。「ほんでな、そのうちに漸次と夜も更けて來て眞夜中になんの。とな、誰や知らんそのお庄屋はんの家をきつう叩かはる人があんの。ほんでに家の人もびつくりして起きてみやはると、それはお婿はんの里のお庄屋はんから來た使やの。息をせいせい切らしてな、「實は今夜お婿はんにな

一七〇



1
お婿はん



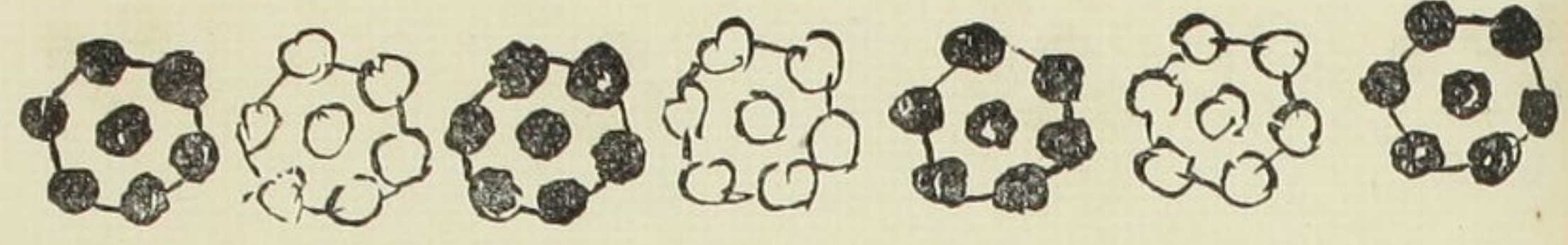
返事がせん。ほんでにな、お母あんがそうつと戸をあけてみやはると、はッちうて吃驚して突如後へ轉げやはつた……。

「ふん、まあどうしたんえ？」一座の舞妓は急にぞつとしたやうに袂を胸に抱しめて五體を固く竦めた。語つてゐる松勇もみるみるさつと顔色を變へて、

「私もう恐うて云へんわ。」

「お云ひやはいな。そこまで云ふてやめたら却つて恐いわ。」と、さん子は深い穴の底を差し覗くやうな顔をしながらおどおどした聲で云つた。

「ほんなら云ひますわ。」と、松勇はどくりと軽く喉を鳴らしながら暫らく言葉や切つて、「戸を開けてみるとな、もう



なかはえらい蜘蛛の巣でな、そんなかに大きな蜘蛛がこな

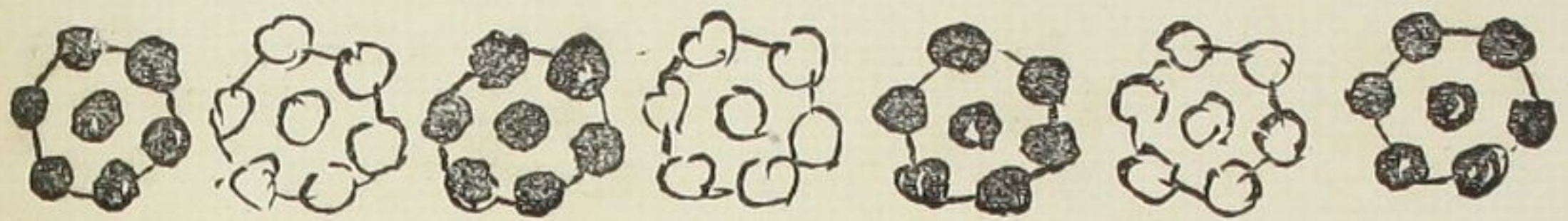
いにつくばうてな、娘はんの生血を吸うてるのだすて、青い青い眼を光らしてな……。

「へえ！蜘蛛？。厭らしやの！」三人の舞妓は冷水でも浴びせかけられたやうにふるふる慄へながら、誰からともなくじりじりと火鉢の側へにじり寄つて來た。なかでも小菊は唇の色まで變へながら「ほんでその娘はんはどうしやはつたんえ？」

「その娘はんはな、そんなり死なはつたんやて。」

「まあ、まあ、どないにせう。ほんまに蜘蛛の精が憑いたんやなあ。」と、小君は息づまつたやうな聲で呟いて眉を顰める。



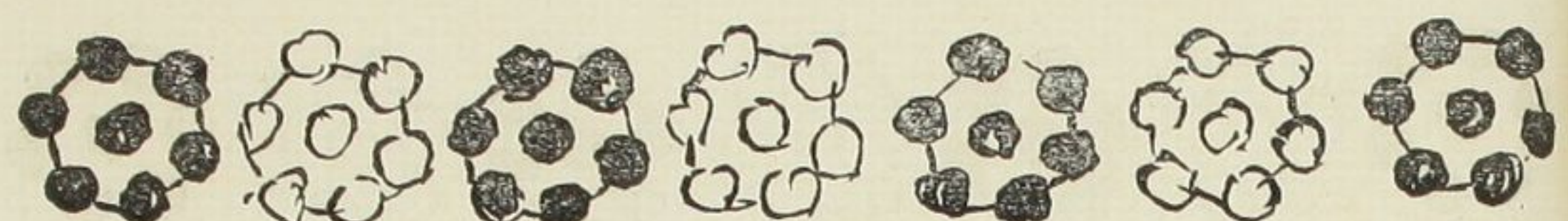


「ふん。さうやて。その近くの山に住んでゐた主がその恐
い蜘蛛やつたんどすて。娘はんが餘り美しいもんやさかい
にふつと見染めはつてな、業をしやはつたんどすて。ほん
まに恐いやないか。」

四人の舞妓はいつの間にか花のやうに重なつて、艶やか
な金糸の繡のある長帯を曳きながら己が美しい姿を蜘蛛に
咀はれるのを恐れるやうな姿をしてゐる。私はつい抑捺つ
てやる氣になつて、

「恐い話ぢやないか。あんたはん達のやうに美しいとほん
とにその話のやうに蜘蛛が憑くよ。」

「まあ、よう云へる。そんなん厭やわ。」とさん子は袂で顔
を隠しながら甘えるやうに云ふ。小君は強て笑ひながらそ



の後を引取つて、

「さうどすえなあ、あんたのやうに美しいとほんまに蜘蛛
が憑くえ。」

「阿呆らしい。きつう云はえるなあ。」と、さん子が恨み顔
に云ふ途端に一番端に坐つてゐた小菊が俄に

「きやッ！」と叫んで突如さん子の膝へばかりと顔を伏せ
た。私も思はずはつとして聲を立てると、小菊は泣き聲に

なつて吃りながら、

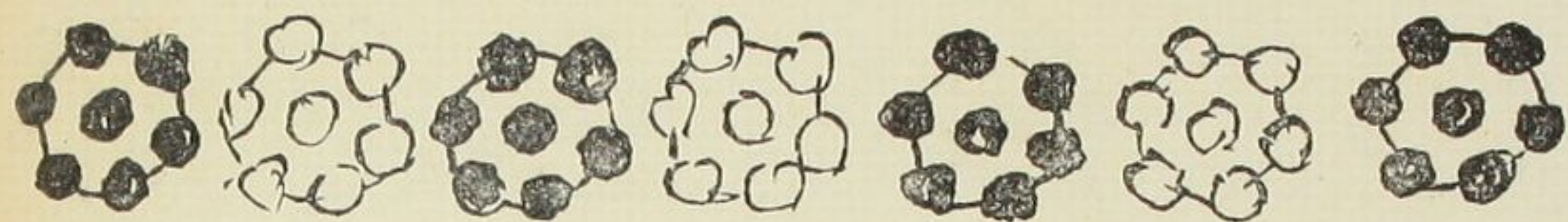
「蜘蛛。蜘蛛……。」

と、みるとすぐ傍の紙燭の陰に、天井の簀子から陽炎の
やうな一縷の糸を曳いて一疋の小さな蜘蛛が下つてゐる。

そしてほの暗い蠟燭の焰のゆらぐなかで、一つの糸を巧に



1
蜘蛛の糸



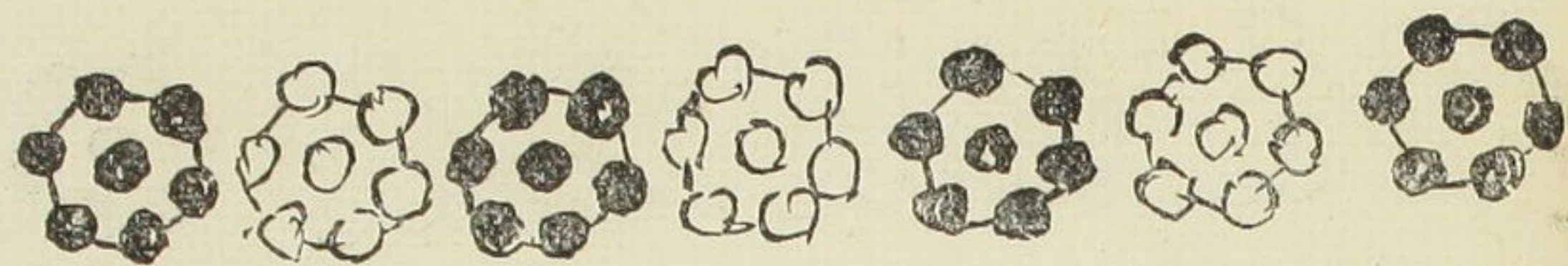
操りながら丁度今の物語りの神秘が凝つて姿をなしたやうに動きもせず軽ろやかに浮いてゐる。私はふと謎語を臆めてゐるやうな心地に打たれて思はず、

「ほ、蜘蛛だ。蜘蛛だ。」と、我にもあらず呟いた。

漸うその姿を見付けた三人の舞妓は俄に又顔色を變へて聲もたてず、たゞ物に憑かれたやうにまじまじと小さい蟲の姿を眺めた。その刹那、暗褐色の古びた壁と、夢のやうな紙燭の光とを背景にした彼等の姿態は全く凄艶な美しさの極限を示してゐた。圓らな眼にも、ひき緊まつた頬にも、唇にも、また強く拘攣した指の尖端にも脅威された神経の繊維があらはに露出して、而も名匠の手になつた彫像のやうな冷厳な沈静がひそやかに流れてゐた。——あゝ、京



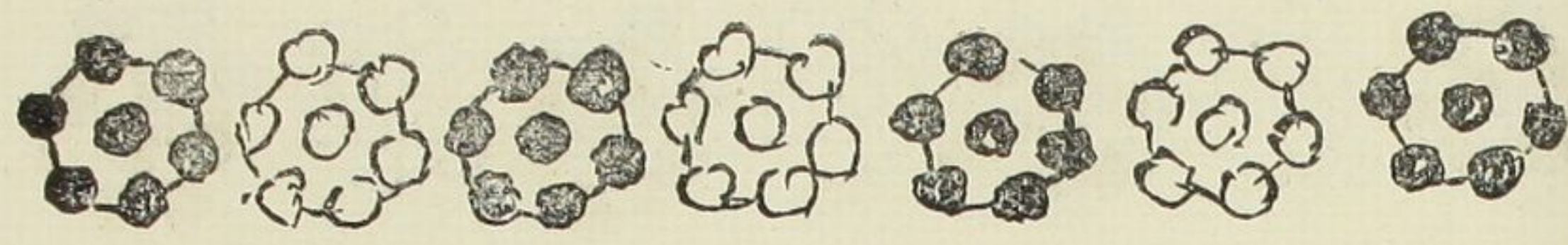
1
おんな



の舞妓まひこをして永とこしへに小ちいさき蜘蛛くもを恐おそれしめよ。而しかして醜みにくき
その妄執まうしゅうをして彼等かれらの美うつくしさを咀のろはしむること勿なれ！



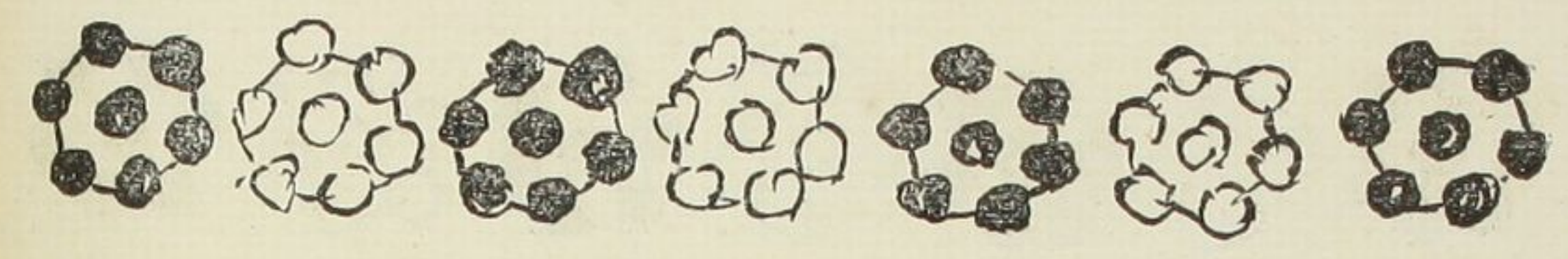
1
...



怪談も君と聴くときなまめきぬ怖やと云
 ひて手取りたまへば
 幽霊のすがた見ゆれと舞姫をおどしなふ
 るも春の夜のこ

怪談

緑子の怪談を好むこと。はやくも語りはじむるや。



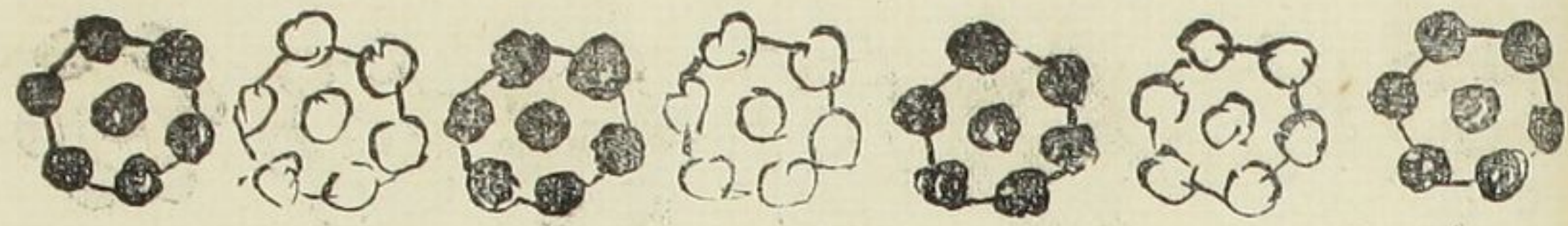
未練

いささかは京に未練の残れるも戀しき人
 のあればなるらむ

未練ほど嬉しきものはなく、
 また未練ほど悲しきものな
 し。未練なりやこそ戀もすれ。



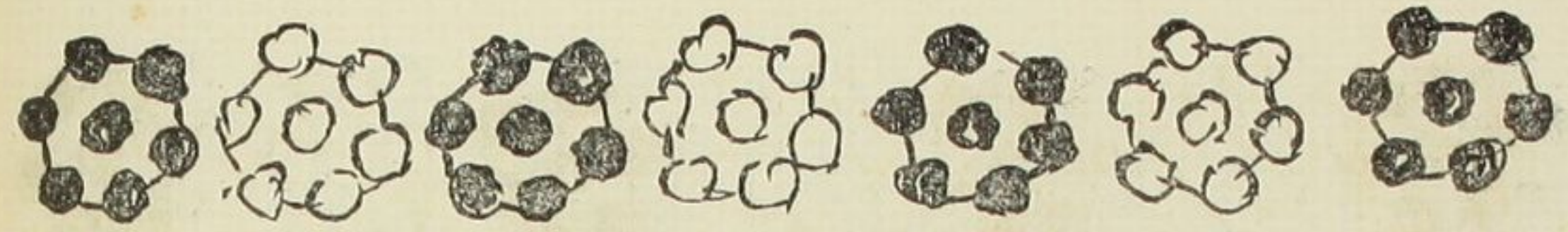
1
 一七九



世^よ之^の助^{すけ}が 大^お原^{はら}の 里^{さと}の 雜^ざ魚^こ寢^ねより われの 雜^ざ
 魚^こ寢^ねは なまめかしけれ
 七^{にん}人^{びと}の 舞^{まひ}姫^{ひめ}と する 雜^ざ魚^こ寢^ねより まさる 奢^{おご}り
 は あらじとぞ 思^{おも}ふ

雜魚寢

あけがたの寢亂れ姿なまめかしく、呼べどいらへも
 せぬひとよ。



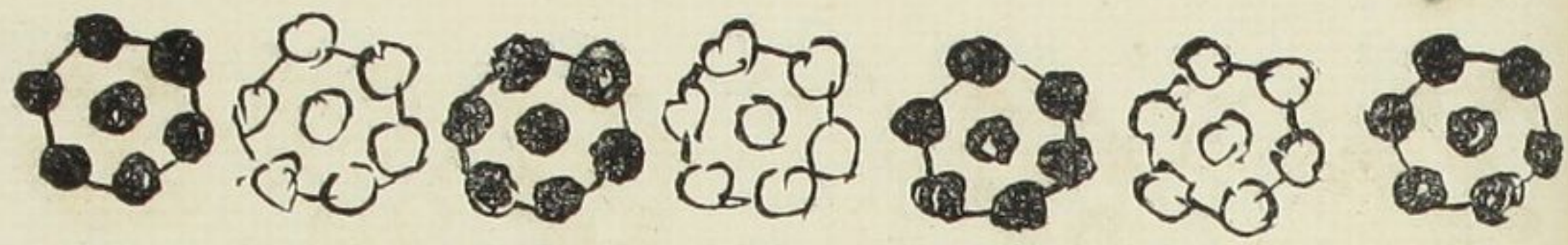
客

檀那客ほど憎きはなし。船持の俄分限、牽頭末社の
 總纏頭に、小判なきこそうらみなるらめ。

好^{かう}色^{しよく}の 客^{きやく}が この みの 鯨^{くじら}汁^{じゆ}京^{きやう}に いさなはふ
 さはぬものを



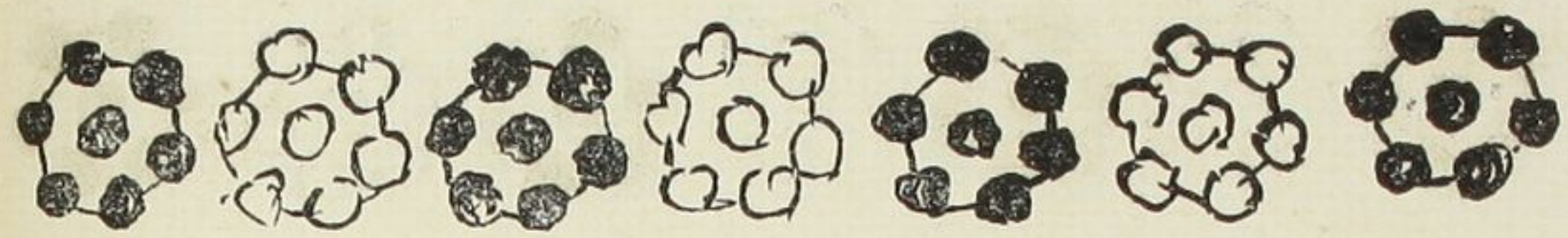
7
 雑魚寝よりまさる奢り
 客



河見れば君によく似し女ゐてひねもす布
 を晒らし暮らすも
 君が家の芋畑なるらむ見馴れたる繪日傘
 いそぐ橋の上かな

途上所見

京なればそぞうあるきも面白く、急げば暮るる夕かな。



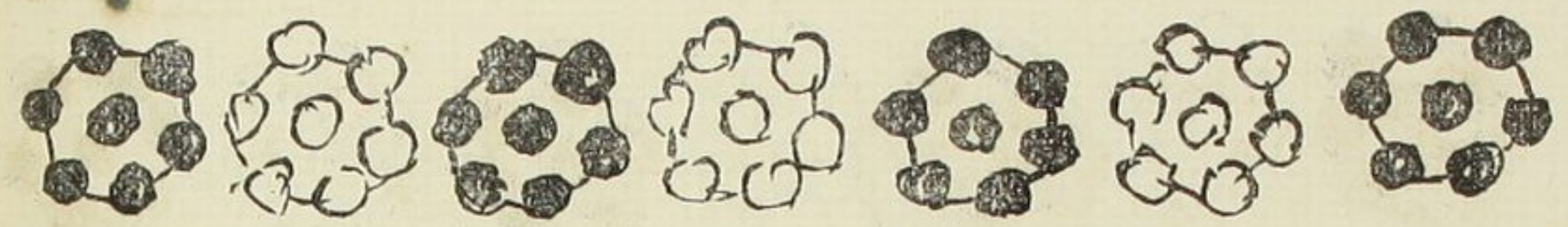
旅愁

旅びとの身ほど悲しきはなし。舞姫たちもわが戀を知らねば語るよしもなく。

ただひとりはかなきことを思ひつつ祇園
 街ゆく旅ごころかな



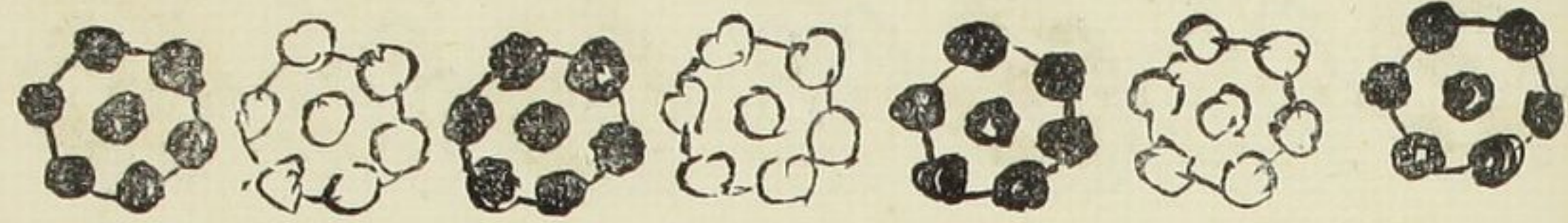
7
 一八三



瓢亭

雑魚麻より覺めて朝はやく、舞姫つれて瓢亭の門を
入れば、水の音さへも涼しきこちす。これもまた
忘れえぬ思ひ出のひとつ。

錢形の石をあふれて舞姫の足をあらひぬ
瓢亭の水



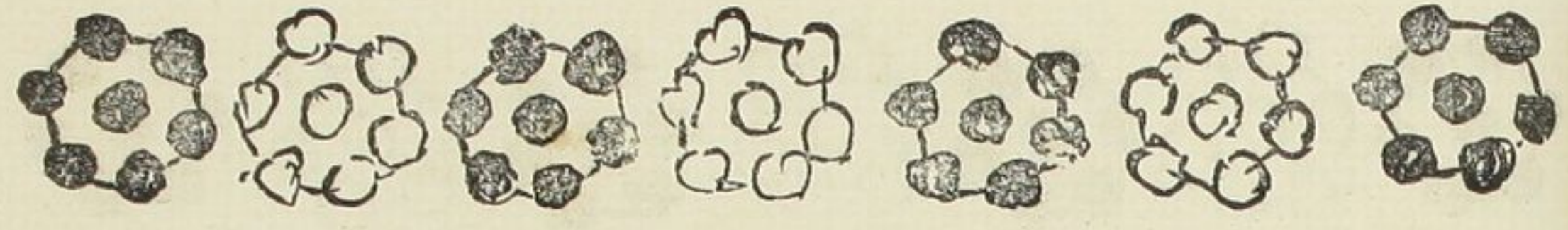
舞ごろも

金糸銀糸の繡もまばゆし。袂をひるがへして傍に眠
る、うたたねの子の夢な覺ました。

京中の目をおどろかす精巧に君が織らせ
し舞ごろもかな



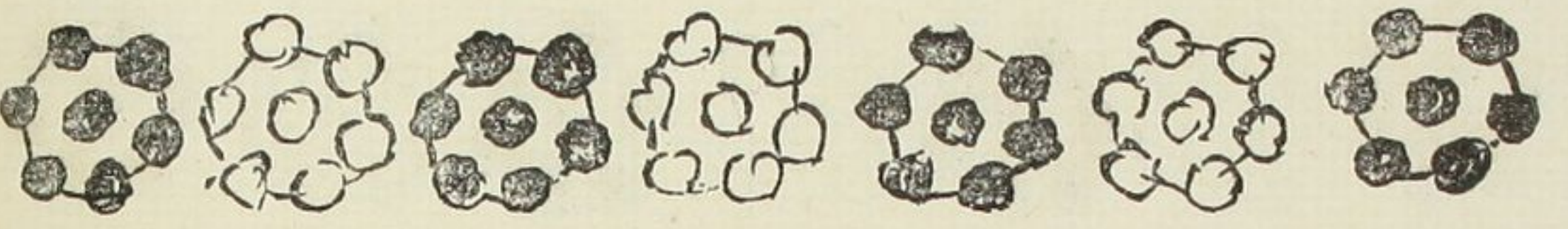
1
か
ら
ぬ



鐘樓守

年老ひし鐘樓守はこの年まで戀を知らずして暮らしぬ。あはれこの戀怖ろしや、謎のやうなる戀なれば。

舞姫にこがれて瘦せし黒谷の鐘樓守が
つ
ける鐘かな



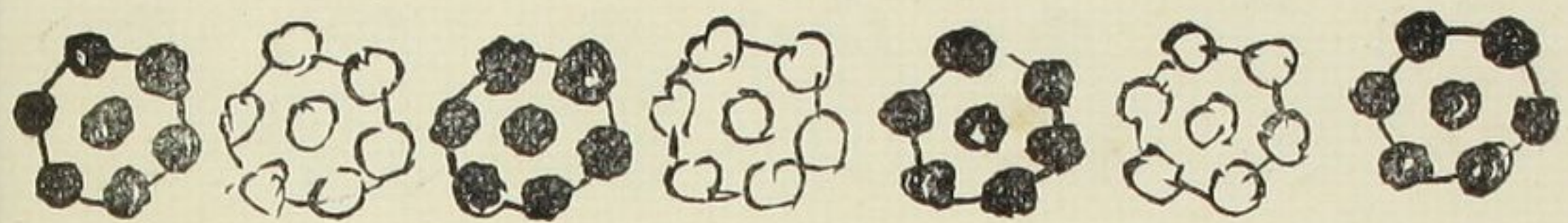
左阿彌

そのときは酒に忘れぬたれど、酔が覺むれば口惜しや。君を恨みのこころなど、いつそ忘れて酔ひてあらばや。

左阿彌より京を見下ろし酒汲みぬ祇園を
おのが庭と思ひて



7
一八七
一八六

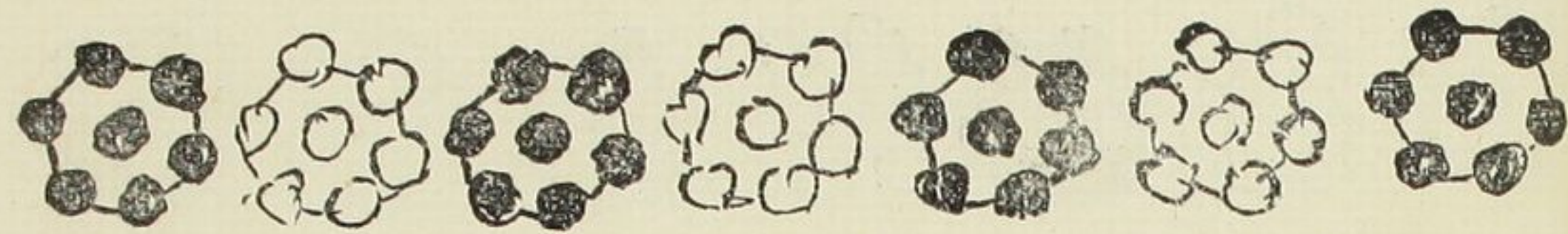


雛 勇

松岡さんが愈々歐羅巴へ旅立たうといふ二三日前の晩であつた。幼馴染の村上さんと京へ来て初めて昵懇になつた私とは永の別れを惜しむためには上の木屋町の春月といふ席貸で心ばかりの小宴を張つた。その晩は遠い旅路に出てゆく人と、それを送る人とのしんみりした心持ちを残りなく汲みあふために態と若い藝妓達の賑やかな座もちを避けて、松岡さんが永年の間最負にしてゐた春之助と云ふ老妓と、それに同じ年頃の茶屋の女將をその席へ招んだだけであつた。そして西石垣の千茂登からひねつた食へものを仕



1
千茂登からひねつた食へものを仕



出させてそれを肴に苦茗を啜るやうな改まつた氣持ちで盃
を汲みかはした。

酒の弱い松岡さんは色白の美しい頬をほんのり染めなが
らいつになく口健めに語つた。伯林、倫敦、巴里、と見も
知らぬ遠い國々の都の話から、話題は幾度か懐かしい京の
街の思ひ出に歸つて、しまひには涙の滲むやうな哀深い言
葉が一座の人々の唇に溢れて來た。そして更けまさる夜と
いもに興趣は益々凝つて東山のなだらかな頂に研ぎだした
やうな冷たい片破れ月が浮び出る頃にはいつの間にか誰も
彼も皆浮世を忘れたやうな頼りない氣持になつてゐた。

「なあ、松岡さん。雛勇が伊勢へ賣られて行つた晩もこん
な晩やつたなあ。」話の途絶れた時村上さんはふとものに打





たれたやうにつかぬことを云ひ出した。

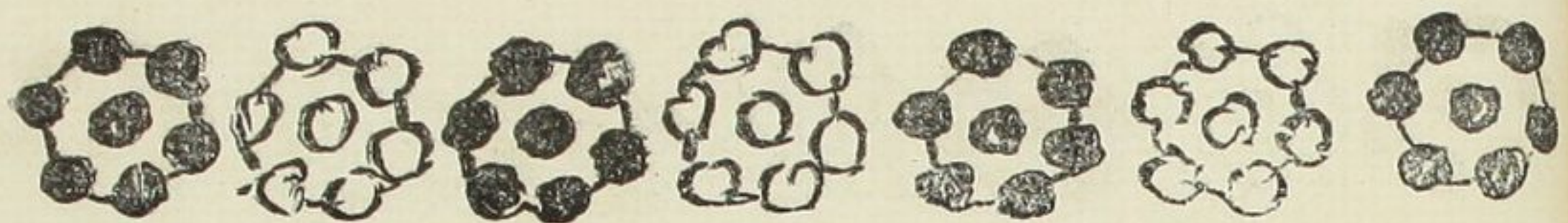
「おゝ、そや、そや。矢張月のある寒い寒い晩やつたなあもう長いことになるなあ。」と、松岡さんは遠い昔の幻を凝視するやうな惨ましい眼眸をしながら云つた。

それを聞いた春之助と女將はこれも急に昔を思ひ出すやうな心持ちを顔色に現はしながらじつと松岡さんの顔を見てゐたが、やがて女將は先づ口をきつて、

「ほんまにもうひと昔になりますえなあ。あの頃は松岡はんもまだお若うおしたわ。」

「さうとも、まだ二十二やつたからなあ。」

「ほんならもう八年も前のことになりますかいなあ。澤市の云ひ草やおへんけど月日の經つのは早いものどすなあ。」

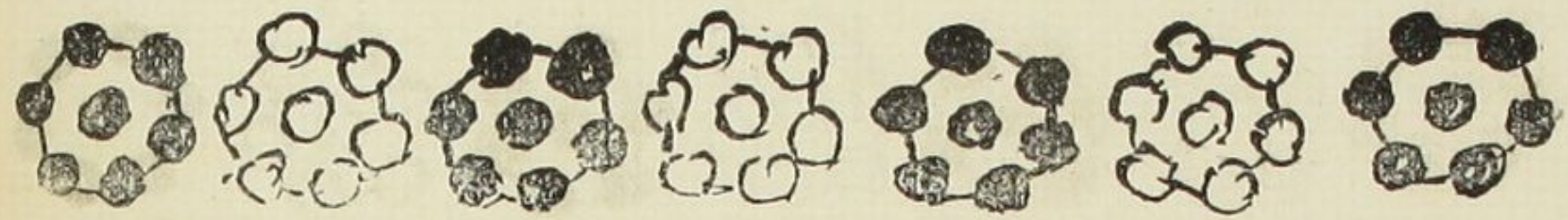


「ほんまにいな。」と、春之助はのべの細い煙管をはたきながら感に耐へぬやうに云つて、「そやけど、あんたはんと、

雛勇はんの噂もえらい久しいものどしたえなあ、ほんこの頃まで祇園では話の種に出ましたえ。私はせんど長いことで萬壽小路のお師匠はんに逢ひましたらな、どないにしろあやす云ふてなあ、あんたはんのこときつう問うてやはりましたえ。ほしてな、あの人が祇園で初めて雛勇はんをひいて出やはつた時の話が出ましてなあ、何やしらきつうしゆんでやはりましたえ。」

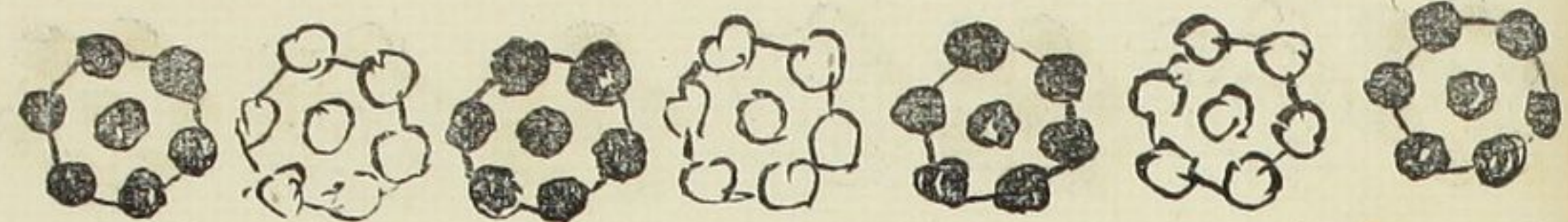
松岡さんは眉ひとつ動かさずじつと飲みさした盃を見てゐた。黒い瞳の底には折々悲しみに彩られた深い心持ちが静かな焰のやうになつて映つたり消えたりした。





女將はそのさまを見てゐるうちに身につまされてか、や
 けて村上さんの方を顧みながらひそやかな聲で、
 「ほんまに今夜のやうな晩どしたなあ。もうあすは伊勢へ
 往ぬちうて雛勇はんがきつう泣かはりましたやないか。ほ
 て夕方から私の家の離座敷でお炬燵をして皆で別れのお盃
 をしたやおへんか。」

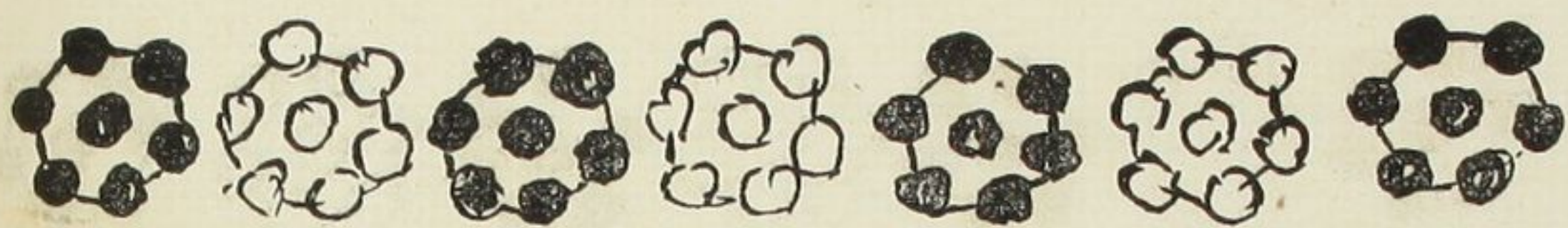
「さうやつたなあ。あの頃は春千代もまだ舞妓やつたなあ。」
 「ほして春千代はんがもう一生逢へんいはゝつて聲を立て
 てお泣きたもんやて皆にはかに悲しうなつてなあ松吉はん
 姐はんにきつう叱られましたえ。私よう覚えてる。」と、春
 之助はその時の有様を思ひ起こすやうに眼を細めながら云
 つた。



「さうどしたなあ。ほんまに何處ぞ遠い遠い外國へでも行
 かはるやうに云ふて、泣きましたえなあ。」と、薄く笑ひな
 がら女將は云つて、松岡さんの方を顧みながら、
 「あんたはん覚えてるやすか。」
 「覚えてらんでどうする。あの晩のことはいつまでたつて
 も忘れやへんせ。」と、松岡さんは平常とまるで違つた感傷
 的な調子で答へた。そして耐らなくなつたやうに盃を執り
 あげながら、「今頃はどないにしてゐるやろなあ。もうこの
 二年ほど少許も消息もないが……。」
 「それがな。私達もどないになつとゐやすかちよいとも知
 らなんだんどつせ。ほしたらな、ほん十日ほど前どした、
 私ふつとな、君蝶はんからあの人のこと聞きましたえ。」と

1
 君蝶はんからあの人のこと聞きましたえ。





春之助はその言葉と一緒にひと膝のりだして、「せんど君蝶はんがなお客はんに連れられてお伊勢はんへ詣らはつたんどすて。その折な桑名のお茶屋で雛男はんはんに逢はつたさうにおつせ。何たら云ふた、菊葉はんやつたかいな、そんな名で出てやはつてな、町でもえゝ藝妓はんのうちやさうにおつせ。」

「誰やつたかもそんな話をしとつたが、そらほんまの雛男か何や分らんぜ。僕はどないにしてもあの女はもう死んでしまふたやうに思はれて叶はんのや。」と松岡さんは眞顔で春之助の顔を見つめながら云つた。

「阿呆らしい。そんな験の悪いこと云はんとおゝきやすなそらほんまの雛男はんちう話どつせ。自分で私は祇園にゐる

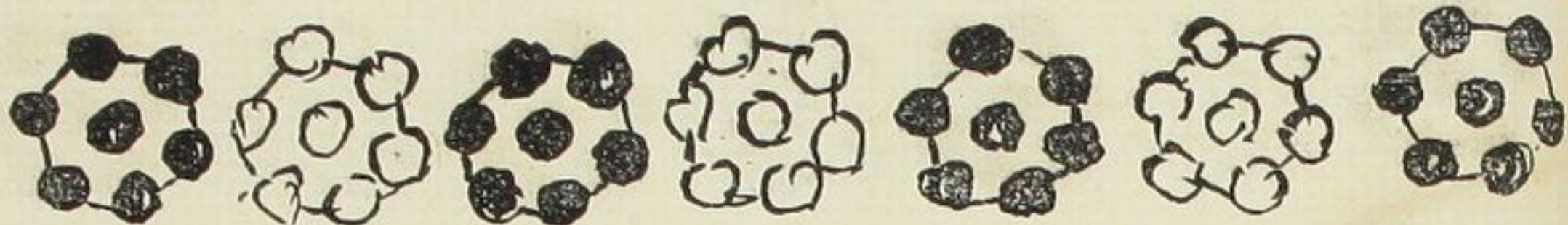


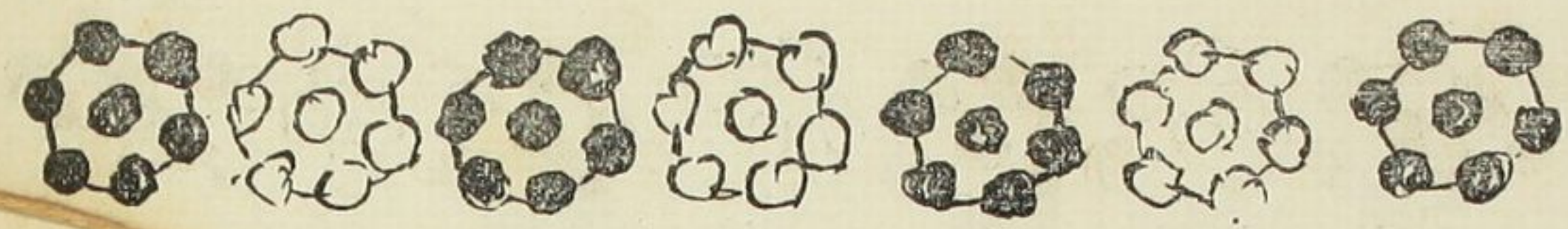
た雛男どすて君蝶はんに云はつたんどすさかい、此れより確かな證據はおへんわなあ。」

女將は幾度か合點いた。

一座はそれから雛勇を中心に置いて松岡さんと彼女との間に起つたさまざまの哀深い戀語りに耽つた。十四の時から思ひそめて、十八の冬、伊勢路へ身を賣られてゆくまで互に思ひ思はれた奇蹟のやうな二人の運命はいつまで語つても語り盡せないやうな話題を次から次へ與へて行つた。

私は丁度濃淡のけぢめも分らないやうになつた昔の繪巻ものを繰りひろげてゆくやうな懐かしい心持ちでその話に聞き入つた。それからそれと場景が移つてゆく度に私の眼の前には數限りない幻が湧き上つて、またみづみづしい顔





色をした若い松岡さんと、見も知らぬ美しい舞妓の雛勇とが四條河原の涼みや、祇園の夜櫻や、蠟燭の火影や、優しい行燈を誇りとした時代の祇園を背景として種々に織り紡いだ運命の糸が私の眼には此の上もなく美しく映つて来た。私は皆の話に耳をかしながらいつか夢のやうな幻影を虚空のなかに見出してゐた。

……もう夜の十一時を過ぎて後のことである。若い松岡さんは最後の都踊りの幕が落ちる少し前に慌たしく立上つて、人蒸息にむされた観客席から人氣の薄い下足場へ出て来た。そして年老つた下足番の老爺が水鼻汁を啜りながら差し出す駒下駄をつつと爪先へ突懸けて、そのまゝホテルの車が梶棒をならべてゐる小路をぬけて曲角のつゝ



きにある樂屋口の方へ廻つた。そして燃えつきた篝火の光に照らされながらしよんぼりと土塀の際に佇んで都踊から歸つて来る舞妓の雛勇を待つた。

圓山の枝垂櫻がもうちらほらと散りそめやうと云ふ頃なのに、京の街にはまだ冬が名残りをとめて宵々ごとにはしつとりとした寒氣を含んだ風が何處からともなく人の肌を迫つてくる。その晩もさうした風が静かな嘆息のやうに吹満ちて、篝火のかすかな焰を甜めると一緒に戀に燃えた松岡さんの胸にもしみじみと滲み徹つて来た。しかし彼はまだ醒めきらぬ夢のやうに織り出されては潰えてゆく踊りの場面の艶やかさに酔はされて、そのなかでも殊に美しく粧つた雛勇の舞姿が眼の底にえりつけられて離れない。そ



1
196
197



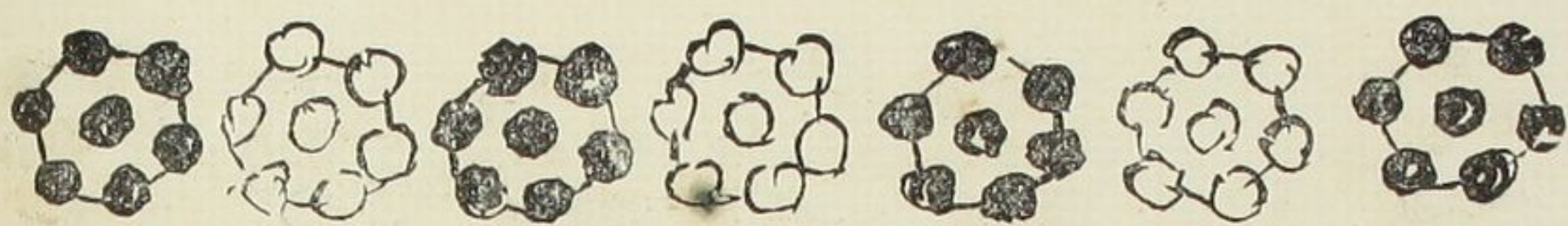
して幕があく少し前に、花道の溜りの揚幕の陰から臙脂の燃えた頬を斜につき出ししてにつこり笑ひながら、
 「雛勇どつせ。分つてますか。あのなあ、歸りに門で待つてとくれやすや。」と小聲で囁いたその言葉が耳の底で幾度となく繰り返へされて、彼には今宵の逢瀬が何とも知れぬ甘い魅力に充ちた心持ちを以つて待ち設けられるのであつた。場内では祇園囃しの太鼓と鉦の音が遠く幽かに鳴りだした。それとともに三味線の音色と唄聲が急に賑やかに纏れて来て、そのぞよめきに送られて花環のやうに美しく揺れながら引込んでゆく舞妓達の姿を思ひ續けてゐると、やがて下足場の方で歸りを急ぐ観客の騒々しい動擾が聞え出した。早いものはもうぞろぞろと群をなしてほの暗い篝火



のなかを歸つてゆく。
 「おかあはん。あてえのこぼこぼがみえんわ。何處へいたんやろ。」と、甘えるやうに叫ぶ聲に驚かされて、ふと樂屋口を覗きこむと、小行燈の點つた細路次の彼方には踊りから歸つてゆく舞妓や、藝妓の姿が幾人ともなくみえだした。
 「春勇はん。あんたはん何處え？」
 「あてえなあ、萬竹はんへいて、それから大勝はんへ廻らんならんの。」
 「さうか、えうことなあ。大勝はんやつたら川島はんで寄せてお貰ひるのやろ。後で私も知らして貰うて欲しいわ。」
 「きつい氣やなあ。あとでさう云ふて知らして貰うて上げますわ。」



1
 大勝はん



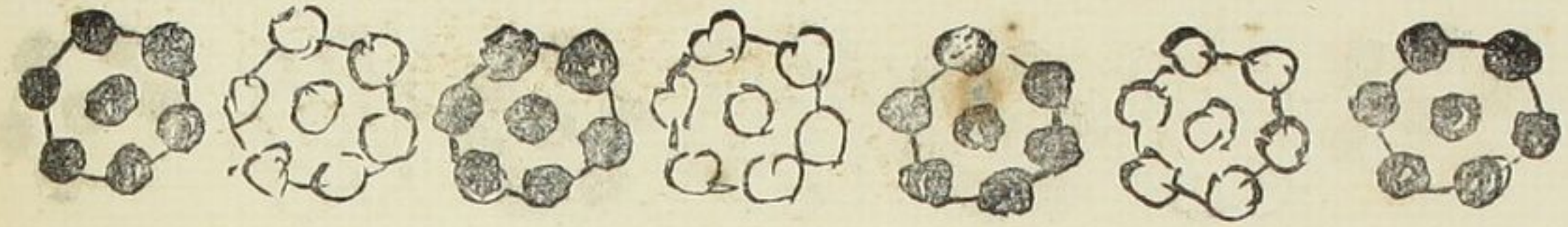
など、口々に小鳥のやうに囀る聲が聞えて来る。
 松岡さんは俄かに破れるやうな激しい胸の動悸を覚えて
 思はず壁際へびたりと體を押しつける。と、その時、門口
 からは幾人かの舞妓が苧姆や、婢衆に連れられてこぼこぼ
 の優しい鈴を踏み鳴らしながらついと歩み出て来る。前髪
 いつぱいに挿しかざした花簪の青や紅を美しくゆらめかし
 て、人形のやうに濃く彩つた臙脂や白粉をほの暗い篝火の
 前に浮き出させて、しんなりと羽織つた縮緬の羽織も此の
 うへなく艶かしい。
 「ほ、松岡はん。先日はおほきに。何しとあやすの。」と、
 一番最後に出て来た一人の舞妓はつゝと松岡さんの方へ
 走り寄つて来て聲をかける。



「お、小菊はんか。」と、松岡さんは不意を喰つたので、言
 葉も出ないほどどきまきしながら、「もう踊りは済んだのや
 な。」
 「いま済みました。こんな處へ立つて何しとあやすの。」と
 その舞妓は思惑ありげな笑ひを口のほとりに漂はせながら
 云つた。
 「なにで、待つてんならん人があるもんやさかい……………」
 「ふん、雛勇はんどつしやる。まあ、どうえ。きつい氣ど
 すえなあ。」
 「そんな大きな聲で云ふたら人に聞えるがな。」と松岡さん
 は周章で、掩ひかぶせるやうにその言葉を抑へる。
 「人に聞えたかて宜ろしいやないか。」と、小菊は可愛い唇

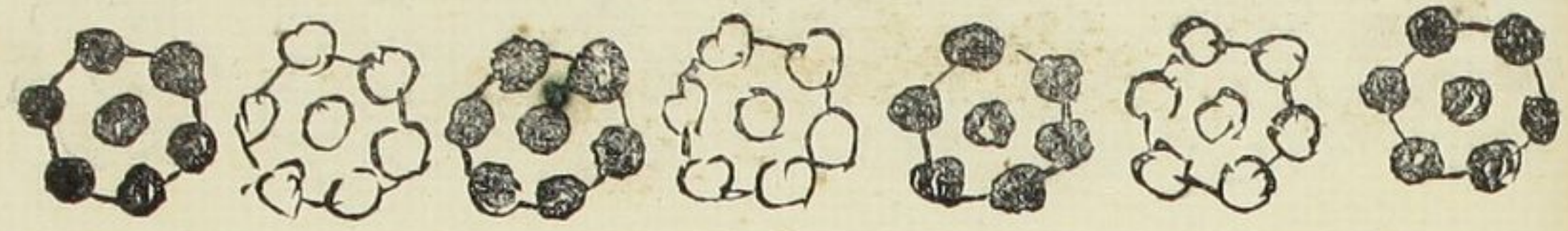


1100
 松岡さん / 小菊さん



をつぼめて笑ひながら、「もつと大きな聲で云ふてあげまへ
うか。ほゝゝゝ。そやけど雛勇はんはもうちつきに出て來
やはりまつしやろえ。せいらい待つといでやす。」

そこへまた樂屋口から七八人の藝妓と、舞妓が賑やかに
笑ひ崩れながら歩み出て來た。見知り越しの誰彼は松岡さ
んがあるのを見附けると一人二人づゝ周圍へ寄つて來て、
小菊とさいめき合ひながらたつた一人の松岡さんを擲りだ
した。彼は幾度かそれをはづさうと試みたけれども到頭駄
目だつた。舞妓達の優しい言葉はあるかなきかの蜘蛛の巣
のやうに體のまわりへ絡みついて、松岡さんは憐れな囚人
のやうに肩をすぼめながら益々土俵の方へ身をすくめた。
と、なかでも一番柄の大きいひとりの舞妓は突如松岡さん



の袖をとつて、

「松岡はん。えゝこと云ふて上げまへうか。雛勇はんはな
あ、ほんまにいけずどつせ。今な大勝はんから逢ひに來や
はつてな木屋町へ行かはりましたえ。旦那はんで寄せて貰
ふのや云ふてな、きつう嬉しさうにしとゐやしたえ。」と、
云ひさして、すぐ傍に立つたいま一人の舞妓に眼顔で合圖
をする。と、その舞妓は急に眞顔になつて

「ふん、さうどしたえなあ。ほんまに悪い人どすえなあ。
私等やつたらどないにしたかてあんなてんがうは晴れがま
うして云へんわ。」

「さうどすなあ。そやさかいにもうあんな怪體な舞妓はん
待たんとおゝきやす。ほして私等と一緒に往にまへういな。」



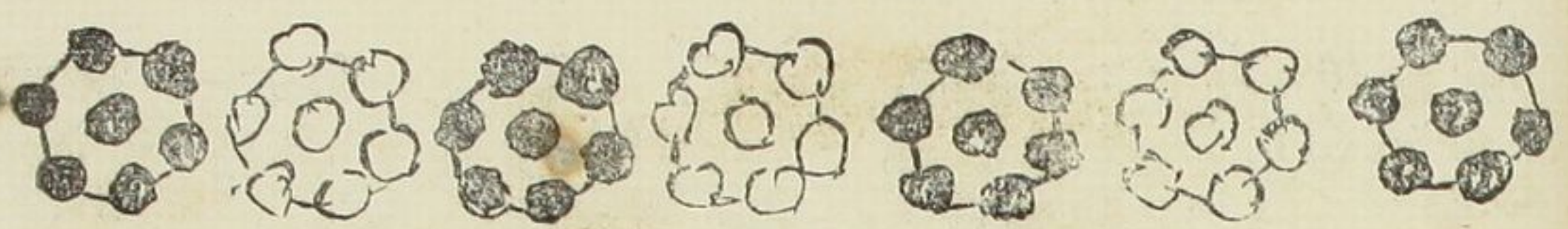
1101
松岡さん



松岡さんは恥かしさと、氣拙さに頭が混亂して返事をすることさへ出来なかつた。唯黙つて俯向きながらふらふらと歩み出した。そして舞妓の群に包まれたまゝ、花見小路から低い葎の續いた賑やかな四條通りへ出た。

ほの暗い行燈や、紅提灯や、約ましやかな店明りに飾られた狭い街筋には夜更とも思はれぬ雑沓が流れてゐた。夜櫻から歸つて来る人々は酔ひの出した顔を薄闇のなかに浮き出させながら行きずりの女達に戯言を浴びせかけたりなぞしてゐた。そして万亭の角から四條大橋までの間は都踊歸りの人の群も交つていやが上に賑はしさを添へてゐた。

松岡さんはともすると迷れさうになる舞妓の後からとぼとぼと歩いて行つた。後髪をひかれるやうに今思ひ捨て、

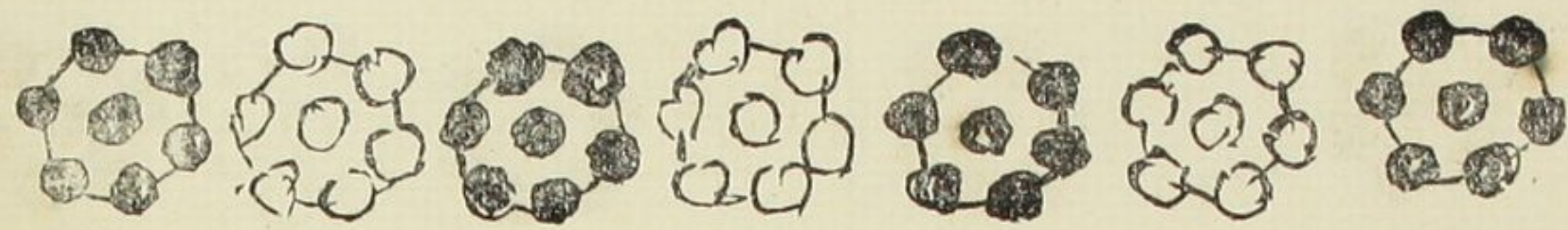


来た樂屋口が頻りに氣になつてはゐたが、と、云つて今更後へ引返へす譯にもいかず、強い力に誘はれてゆくやうにひどく氣を落してついて行つた。そして心の底では取留めもなく雛勇の美しい姿を追ひ求めて、木屋町へ行つたといふことが何だか夢のやうでまるつきり信じられなかつた。

「なあへ、松岡はん。ちよつとお勝はん姐はんの處へ寄せて貰うたらいきまへんか。」と、云ふ聲に驚かされて、ふと顔をあげると、彼はいつのまにか祇園の細い小路を横へきれて絃歌のさんざめきの充ち溢れた街へ來てゐた。小松といふ彼のいきつけの茶屋の行燈がすぐ鼻の先に見えて來た。「行てもえゝけど、今夜は忙がしさうやから又の時にせう」と、松岡さんは氣が進まぬやうに呟いて、それとなく遁げ



1011
かみり



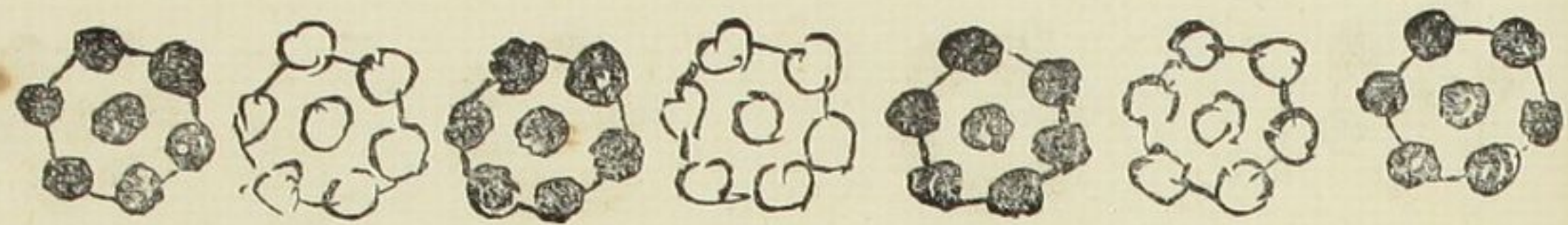
ようとしたが、舞妓達はなかなか承知しない。
 「そらさうどつしやろ。雛勇はんが来やはりまへんさかい
 なあ、早う往にたうおつしやろ。」

「早う往んで夢でもおみやしたらえゝわ。」

「ふわあ、きつい氣。」

三人の舞妓は家のなかへ聞えよがしに聲をあげて囃した
 てた。松岡さんは今更否みかねて到頭その儘茶屋の潜り戸
 をあけた。

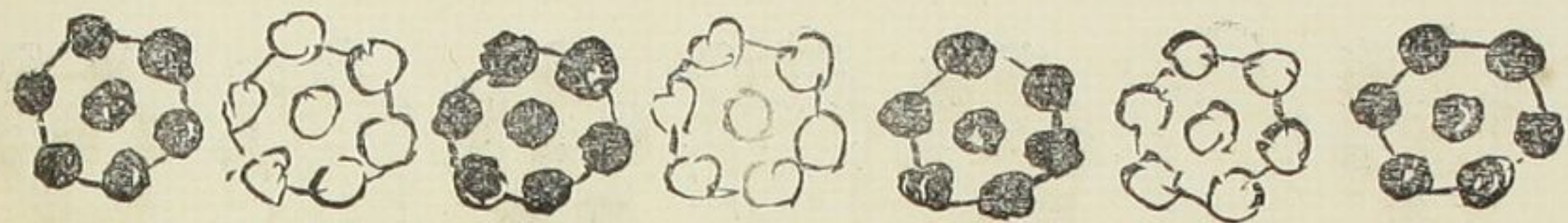
それから半時ばかりの後、松岡さんは小松の奥座敷で嘆
 きわづらふやゝな寂しい白川のせゝらぎに聞きとれながら
 頻りに深い思ひに沈んでゐた。座敷に残つた二人の舞妓は
 蠟燭のほの暗い火影に華やかな姿を浮きたゝせながらそば



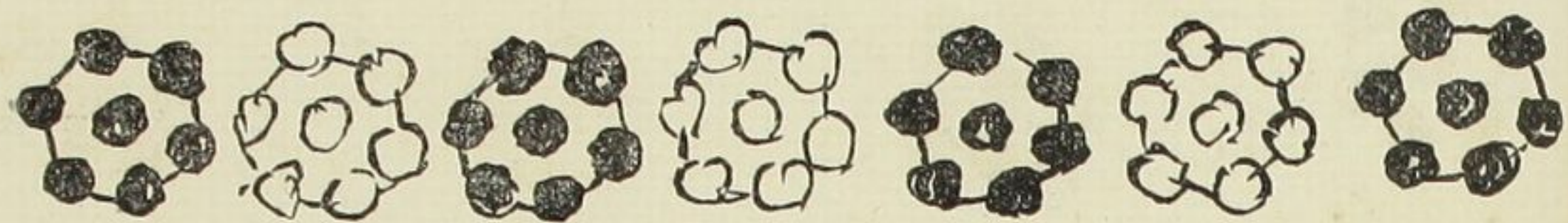
に人のゐるのも打忘れて多愛のない噂話に耽つてゐた。そ
 の時門口の方でふと疍高な女の聲が聞えた。人と云ひ争ふ
 やうな、激した調子で頻りに何かくどくどと訴へてゐる。
 耳をとめてきくとその聲は正しく雛勇だつた。

「ほ、雛勇はんや、松岡はん、来やはりましたえ。嬉れし
 うおつしやろ。」と、舞妓達はびたりと話をやめて笑ひなが
 ら松岡さんの方を見た。そして暫らくの間聲をひそめて聞
 いてゐるとやがて廊下を渡る足音が近づいて来て、仲居の
 後から雛勇がひどく浮かぬ顔容をしてよんぼり入つて来た。
 「松岡はんのいけず。よう覺えとるやすや。」と、彼女は座
 敷へ入ると突如松岡さんの傍へ摺り寄つて恐い眼眸をしな
 がら彼の肩を強く打つた。





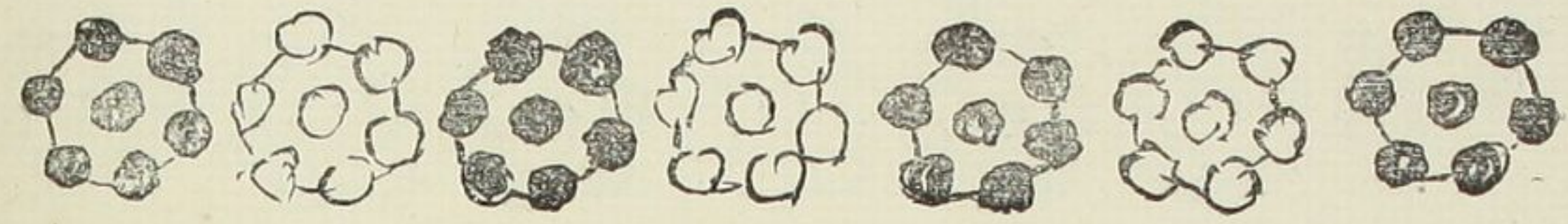
「あれ、雛勇はん何を言ひやすのえ。阿呆らしい。」と、仲居が慌てゝとめるのも聞かず雛勇は又手を振りあげて、
 「ほんまに貴方はんのやうないけずなお方私知らんわ。あんなに待つてとくれやすや云ふてんのに小菊はん達と一緒に往んでしまはつて、……」と、急に涙聲になりながら振りあげた手で長い友禪の袂を握つて「私貴方はん好きと違ひまつせ。もう貴方はんのやうなお方厭どす。」
 「何いふてんのえ。なんぼ待つたかて貴女が出て来やへんのやないか。」松岡さんは餘りの劍脈に驚ろかされて、妙に笑ひながら辯解らしく云つた。
 「嘘どつせ。嘘どつせ。私ちやんと知つてます。貴方はん小菊はんが好きやさかい私たつたひとり置いて往んでしま



はつたんにやわ。」と、雛勇はその儘傍を向いて激しく啜泣しだした。
 仲居もほかの舞妓達も呆れてそのさまをみてゐた。松岡さんも手の出しようがなくて、悲しげな顔容をしながら彼女の眞白な襟脚をみつめてゐた。と、雛勇は泣くだけ泣いてしまうと、今度は急に冷たい顔色になつて仲居の方を顧みて、
 「姐さん、えらい濟まんことどすけど、私もう往なして貰ひますわ。」と、きつぱり云ひ切つた。
 「又出さはつたえなあ。そんな阿呆らしいこと云ふたかてあかしまへん。あんたはん舞妓はんやないか。」
 「さうかて、さうかて、……。」と、彼女は駄々をこねるや



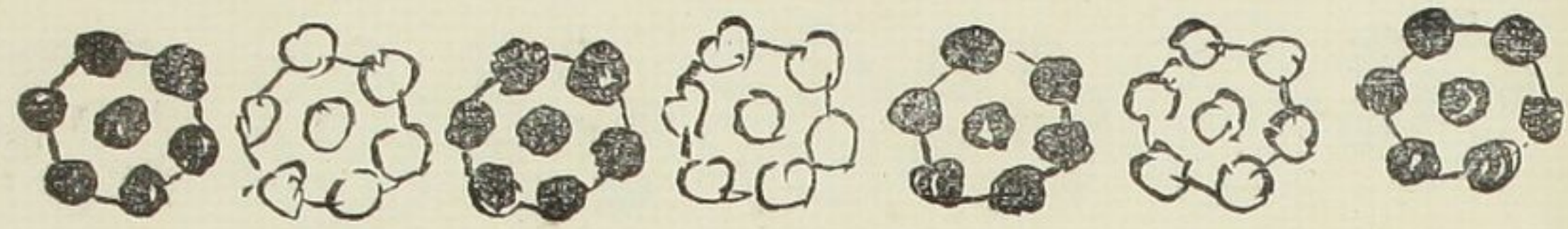
二〇九



うに肩を揺りあげながら呟やいたが、やがて又傍を向いて
 しくしく咽び泣きしだした。そして今度は何と思つたか溢
 れ出て来る涙で指先を濡めして、眉根にひいた胭脂や、唇
 の濃い紅を矢鱈にひきのばして厚く化粧した白粉の地へま
 るで切られ與三のやうにさまさまの醜い線を描いた。そし
 て疳が昂ぶつて来るやうに時々激しく肩をふるはしては聲
 を呑んで泣き續けてゐたが暫らくするとその儘ついと立ち
 上つて、燃えたつやうな美しい友禪の裾をしどけなく踏み
 しだきながらばたばたと座敷を出て行つた。
 一座は呆氣にとられて唯ぼんやりその跡を見送つた。そ
 してひそやかな足音がふつりと消えてしまふと、仲居は先
 づ口をきつて、



七
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十



「怪體な人どつせなあ。どないせうちうのやろ。」と、獨語のやうに云つたが、やがて松岡さんの顔を見て、

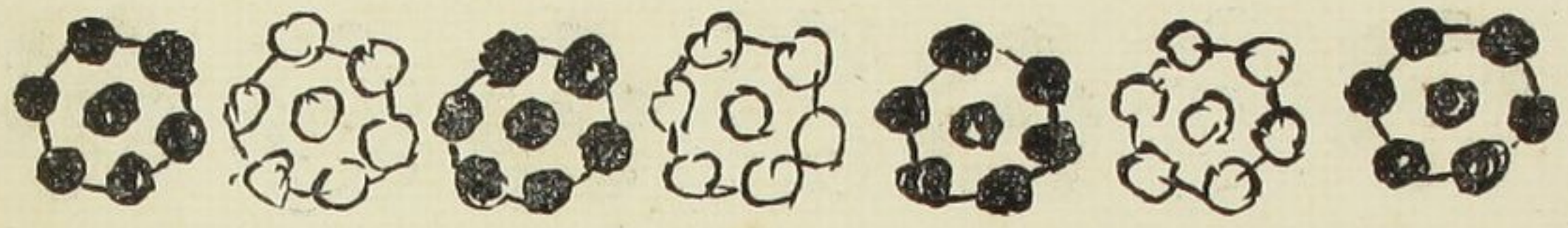
「あの人のやんちやにもほんまに困りますえなあ。怒らんとおゝきやすや。いつでもこれどすさかい。」

「怒らへんけど、なんぞ……氣にさわつたことでもあるのやろか。」

「さうどつしやろな。ちよいとかて思ふやうにならんと、誰方はんの前でもあれどすさかいなあ、舞妓はんにしては少しいきすぎてますわなあ」と、仲居は嘆息をつきながら云つて、「あんな氣やつたら今にきつと苦勞しやはりまつせ藝妓はんにならつた後かてあの氣象がなほらなんだらきついに苦勞しやはるに極まつてます、世の中ちうものは



三
かきかき



さう思ふた通りに行くもんやおへんよつてになあ、ほんまに損な性分どすわなあ。」

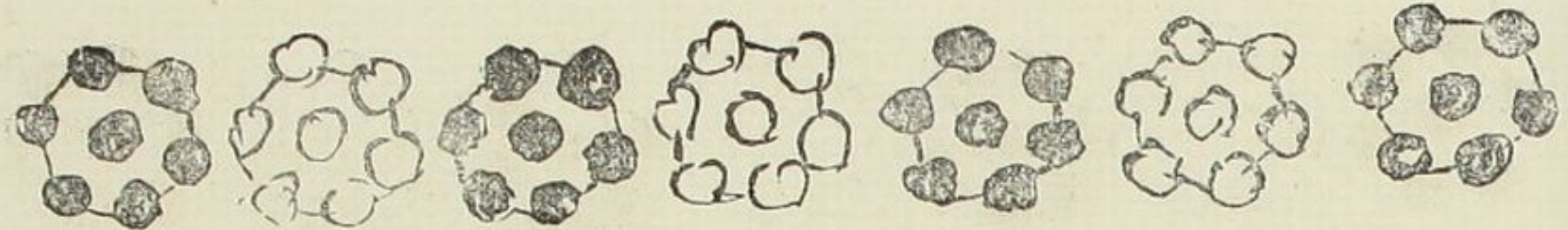
「そやけど、」と、松岡さんはその言葉も碌々耳へ入らないやうにそわそわして、

「また何ぞ無茶をしやへんかしら。一寸後を追うていて悪いところは謝る云ふて呼び返へしてんか。」

「そんなに心配おしやはんかて宜しいがな。もう放つときやす。今に歸つて来やはりますうがな。」

「いや、頼みやさかい連れて来てんか。」と、松岡さんは眞實を頬にあらはして云ふ。

仲居も到頭その言葉を否みかねて、座敷を出て行つた。そして暫らくすると帳場の方から袖で顔を掩ひながらせぐ



り泣いてゐる雛勇をなだめつ慊かしつしながら連れ歸つて来た。

「さ。もうそんなやんちや云はんと、ちんと涙をふいて面白う遊ぶの。舞妓はんは舞妓のやうにしてゐんと人が笑ひまつせ。さ、こゝへ来てお坐りやす。」と仲居は彼女の肩を

抑へて松岡さんの傍へ坐らせる。そして袖をひいて、そつと顔を差し覗かうとすると、彼女は其の儘紅友禪の八ツ口

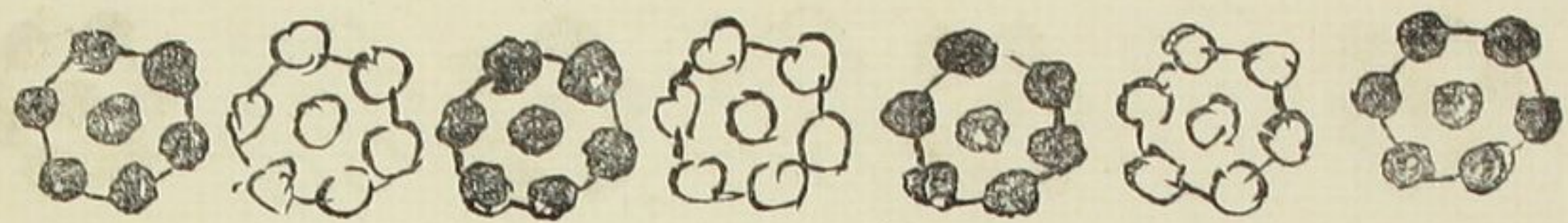
をだらりと小さな膝の上へこぼして、眞白な手で突如顔を掩つた。散々描きちらした紅や胭脂はいつのまにか涙で溶

けて、面長な眼の細い顔が何んとも云へないほど滑稽けてみえた。

「まあ、まあ。怪體な顔やなあ。」と、仲居は思はず噴笑だ



三三
カサカサ

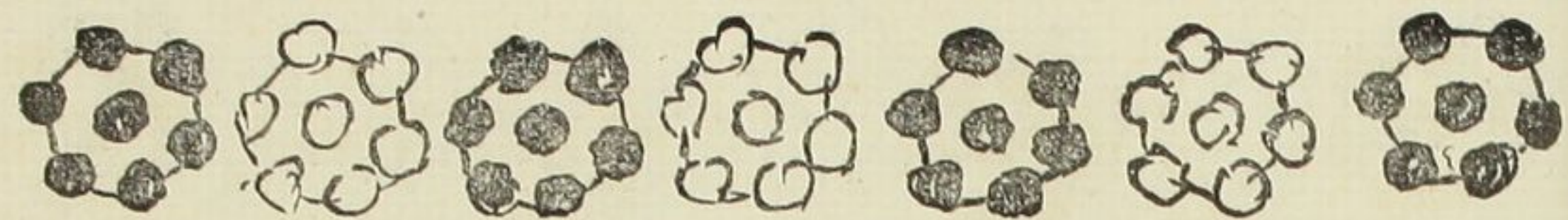


して云ふと雛勇はなほ固く顔を掩つて今迄とはまるで違つた牙えざえした聲で、

「そんなにお見やしたら、晴れがましようて叶はんわ。」と、云つた。そして白魚のやうな繊細い指の間から見える玉蟲色の小さな唇にはいつかもう優しい微笑みが綻びてゐた。……

かうした取留めもない幻を追つてゐるうちにふと私の耳にはまたひそひそと呟やく女將の語聲が聞えて來た。雛勇の昔語りから深い感情が一座の人々の胸に滲んで、ほの暗い蘭燈の火影のさゆらぐ間内の氣勢は何處となく行きつめたやうな悲しみに喘いでゐた。

女將は訴へるやうな低い調子で猶ほも語りつ付けて、



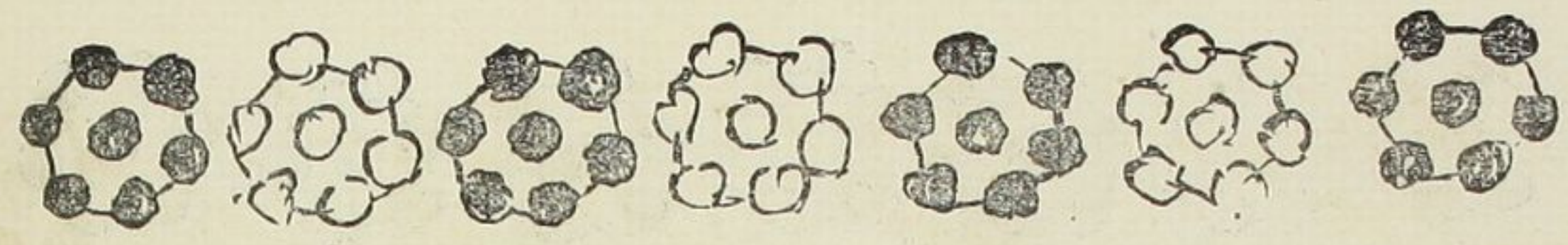
「桑名といへば近いところどすさかい、お立ちやす前に一遍逢ひにお出でやしたらどうどす。また逢ひ度いとお思ひやしたかて、遠い遠い外國からやつたらなあ。……」

「さうどす、さうどす。ほんまに逢ひにいておあげやすな。」と春之助も眞面目な調子で云つて、「雛勇はんら永いとどすさかい、どないに嬉しうお思ひやすか知れまへんえ。」

「そやなあ。」松岡さんは腕ぐみをしたまゝ考へ深い眼眸をしてゐたが、やがて痰のからむやうな低い聲で、

「そやけど、永いこと逢はんのやから、お互に境遇も違てるし、また心持ちも違てるしなあ、今度めに逢うたら却つて怪體なものになるかも知れんぜ。」





「そらなんとも知れまへんけど、……雖勇はんやつたら決して貴方はんのこと忘れとるやす様なことはおへんえ。あゝ云ふ質の人は體はあんじようにしてゐたかて、きつう執着的強いものどすさかいな。」

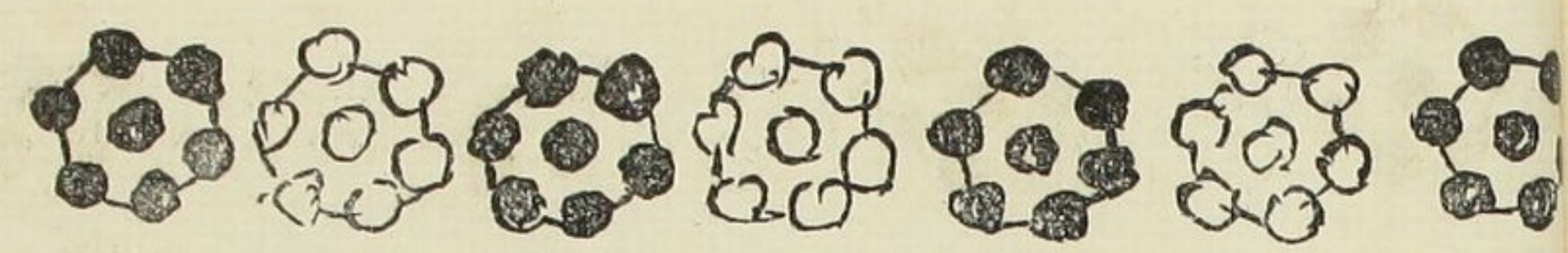
松岡さんはそれを聞くと微かに肩をふるはしたやうだつたが、やがて熱のこもつた調子で、

「しかしまあ逢はん方がえゝやろ。逢ふてつまらん思をするよりも、今迄のことを私の胸に大切に藏まつて置く方があとで後悔せんで宜しいわ。いつ思ひだしてもえゝ夢やつたからなあ。」

一座はその儘口を噤んでしまつた。

私は何となく引き入れられるやうな氣持ちになつて、彼

三二

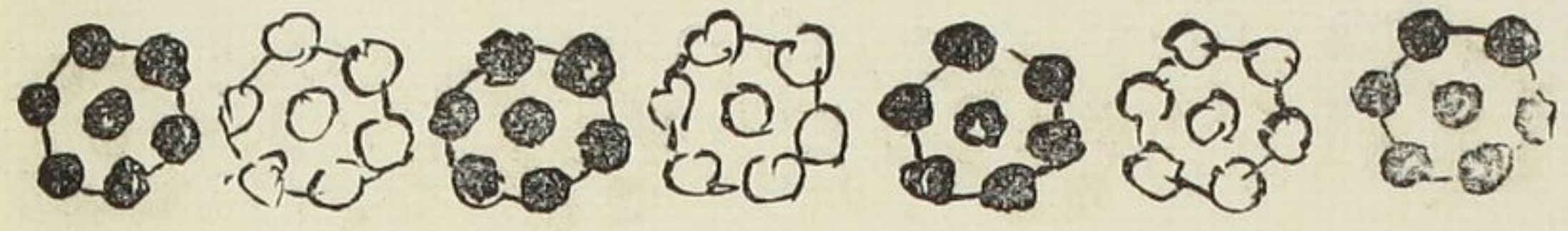


等から顔をそむけて障子の腰硝子からすぐ下に展がつた加茂の磧を眺めた。

月はいつしか西へ廻つて朧ろげな冷たい光だけが靄のやうに四邊にたちこめてゐた。薄黒く浮き出した東山の山影や對岸の低い家並みや、處々に瞬く小さな燈の光も霜夜の静けさの底に凍てついて、何處をみても春の思ひ出を懐かしませるやうな温かさが潜んでゐやうとは思はれなかつた。そして磧には灰色の小砂利が裸に現はれて、す枯れつくした河原蓬の原には二三日前に降り積つた薄雪が斑のやうなところどころに消え残つてゐた。そして川水がその間にきらりと銀鱗を碎きながら流れて、静まりかへつた大氣の底に優しいせゝらぎの音だけが綿々と咽せんでゐる。

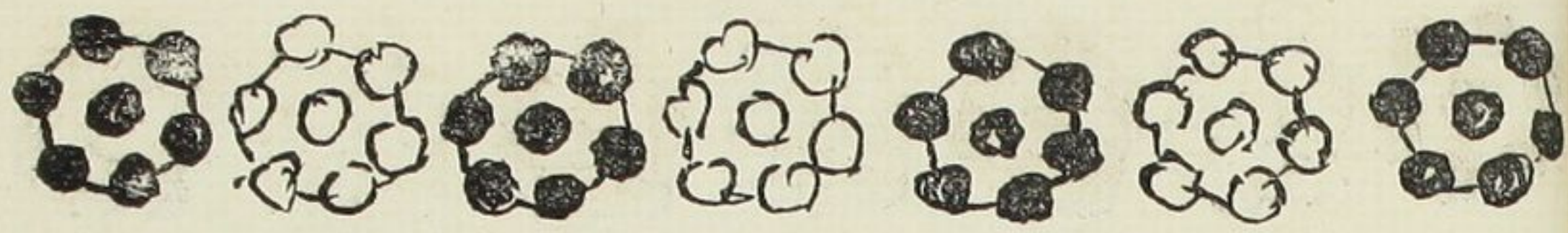


五
三二
一
カ
シ
ラ
ギ



女將は暫らくすると又聲をひそめて、
 「そやけど、ほんまに今頃はどないにしとるやすやるな。
 こんな月のえ、晩には京のことやら、松岡さんのことやら
 思ひだして、どないに辛い思ひをしとるやすか知れんわな
 あ。」

「ほんまにいな。あんな性分の人やさかい私にはようそ
 の心のうちが察しられますわ。……今の身では京へ戻るち
 うたかて叶はんやろしな、桑名から又その先々と流れてい
 て、末はきつとよないにきまつてまつせ。私も若い時分
 から随分色々な人にも逢うて知つてまつけど、あんな性分
 の人は大方難儀な身の上に落ちやはるものどつせ。」と、春
 之助は年寄りらしい愚痴つばい聲で云つた。



「ほんまに可愛さうな人どすえなあ。」女將はそれを聞くと
 涙ぐむだやうな頼りない聲でしみじみ云つて、その儘低く
 首を垂れてしまつた。……

縁先には松の小枝をそつと揺るがせながらひそやかな風
 が音もなく吹いて通つた。と、その途端に廣い磧の何處かで
 二聲、三聲續けさまに寒さうな千鳥の聲が聞えた。

「ほ、千鳥が啼いてますえ。」と、春之助はそれを機に燈か
 ら顔をそむけて袖口で人知れず涙を拭いた。

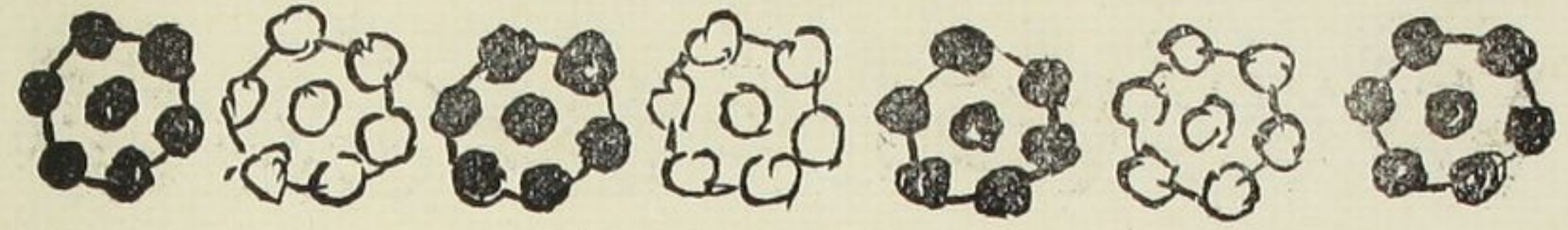
私はその時、「河風寒く千鳥なく……。」としめやかな聲で
 唄はれる端唄の心持ちを思ひ起こして美しい舞妓だつた雛
 勇の面影と遠い旅路に出てゆく松岡さんの心とをしみじみ
 胸の底で繰返へしてみたが、そのうちにいつともなく寂し

五
 三
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十





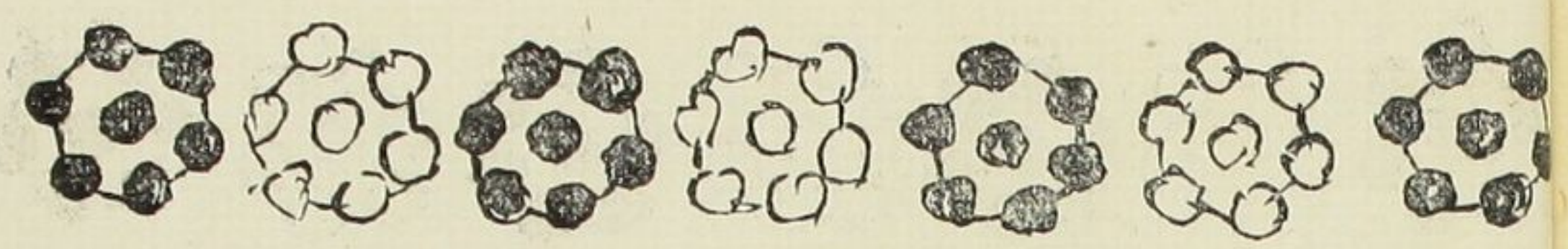
五
 鳥居の
 下を
 歩く



影が心にたち添つて来て、口には云ひ盡、せぬ哀愁が次々と限りなく湧きあがつて来た。

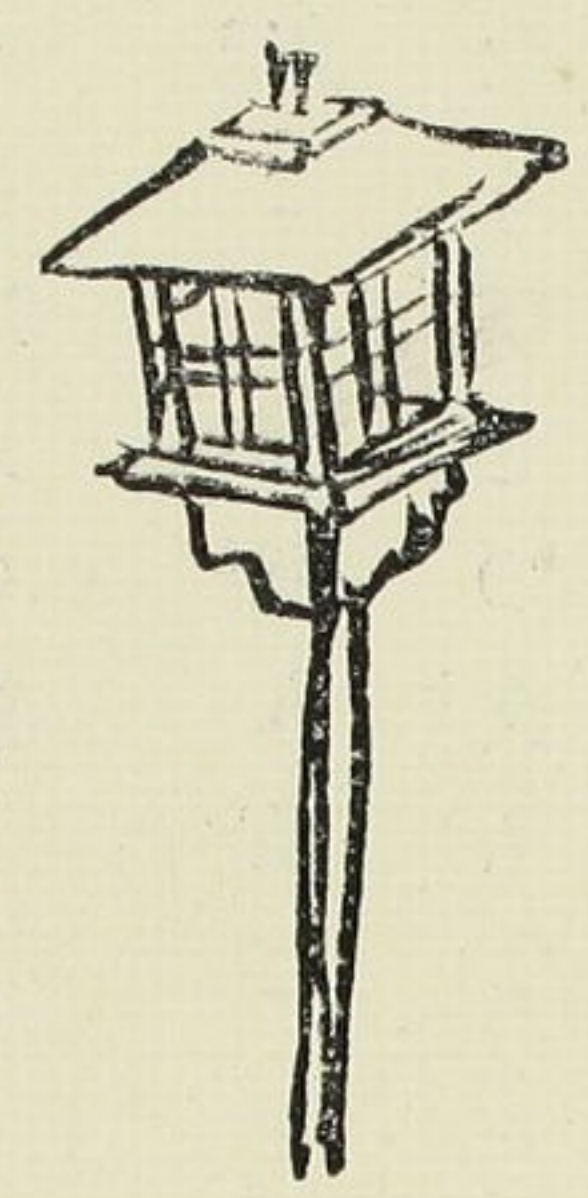
1110





山月夜忘れかねつも
 ただふたりそと抜け出でて來しからに圓

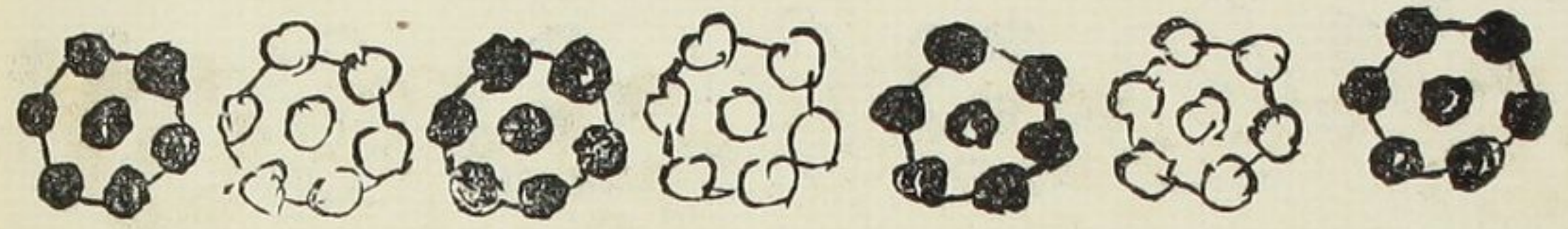
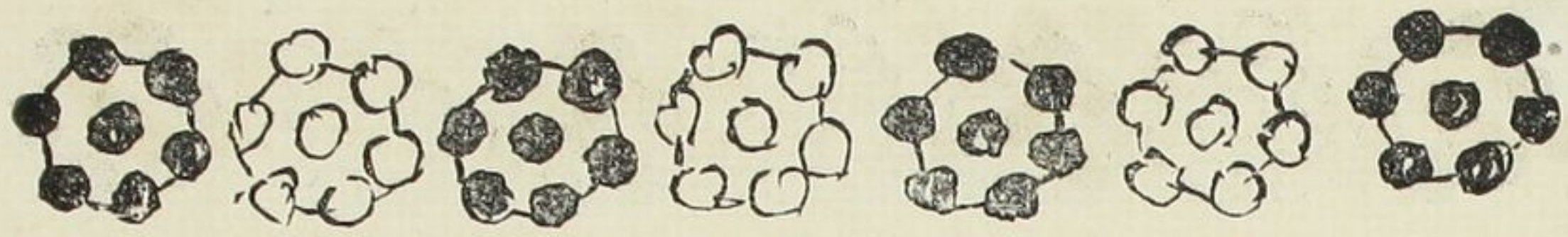
往かずやと誘ひしは誰なりけむ。二人ひそかに酒の座をすべり出でて、霜白く置く路をいそげば、落人のこときこちこそすれ。



圓山



五
 山月夜忘れかねつも



消 息

うれしき文、悲しき文、はやくも篋にあふるる程に
なりぬ。

このころは君のことのみ夢見ると云ふ文
來れば京の戀しき

舞ころも取り出だしては泣くと云ふ病み
たるひとの文もとどきぬ

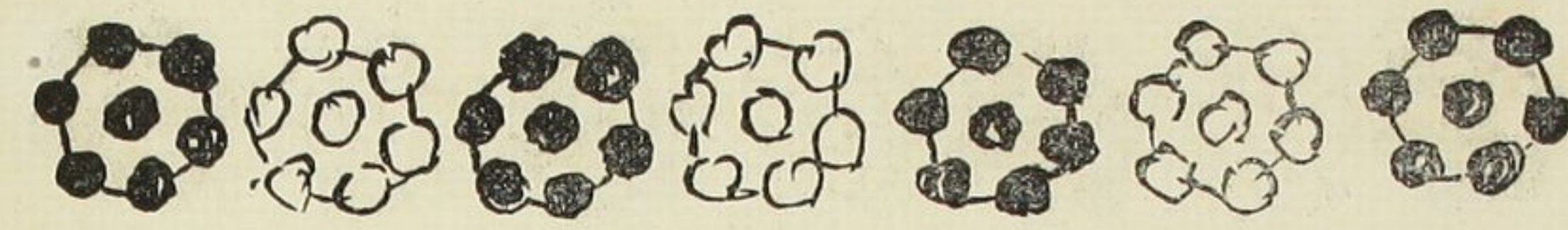
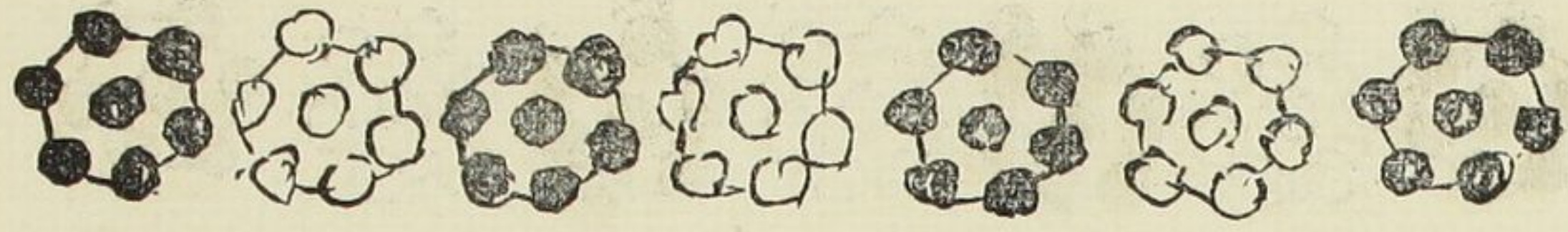
白 朮 詣

大つもごりの夜となれば、祇園をゆく人ひとりとし
て火繩を持たぬものもなし。何をねがひの白朮詣ぞ。

もの思ひする間にあなや火は消えて悲し
くなりぬ 白朮詣も



白朮詣
かき
ら



冬の夜

風さむし、戀もなき身に。

冬の夜は化粧するだに寒からむ胸おしろ
ひにぬぎし肌かな

寒聲や四條五條の橋の上の夜の霜いかに
君のゆくとき

加茂川

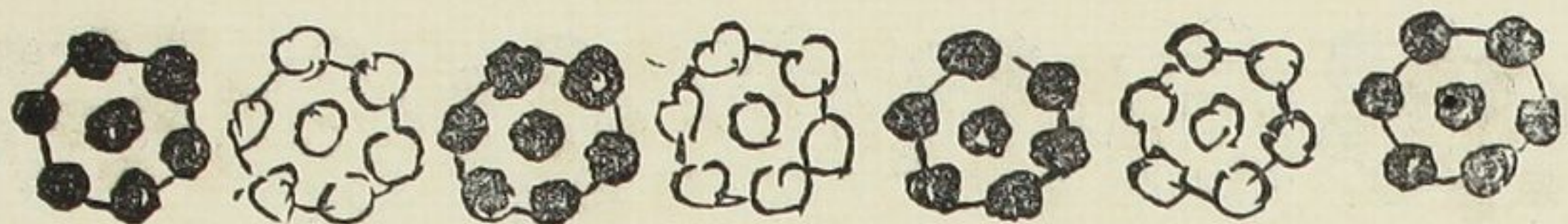
千鳥よ、千鳥よ、悲しからずや。

加茂川にうす雪降れば小夜千鳥水にこそ
啼け石にこそ啼け

わが胸の底をながるるかなしみに似て流
るるや加茂川の水

冬
千鳥よ、千鳥よ、
悲しからずや。

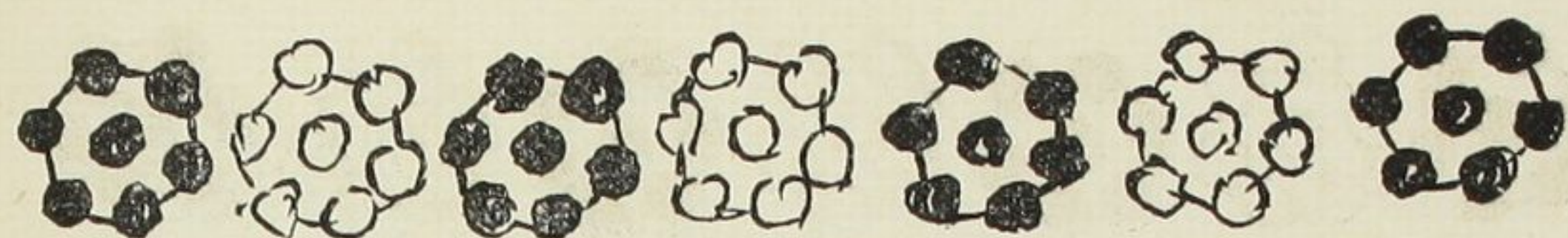




君にわかれ祇園にわかれなつかしき京に
 別るる朝の雪かな
 雨いつか雪になりぬと云ふこゑす末吉町
 の冬のあけがた

雪

雪消えぬ、戀消えぬ、はかなの世や。



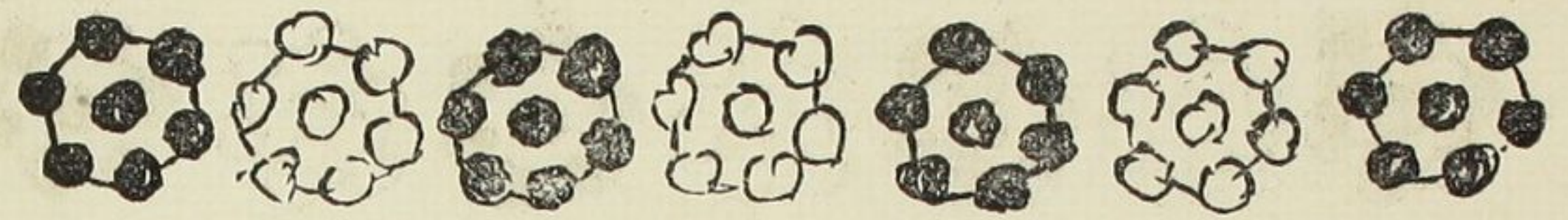
顔見世

轎の音こころよくひびきて、顔見世の噂櫓の梵天よ
 りもたかし。

南座の顔見世ちかし澤潟屋來とうれしげ
 に云ふは誰が子ぞ



た
 雪見の
 一
 かな

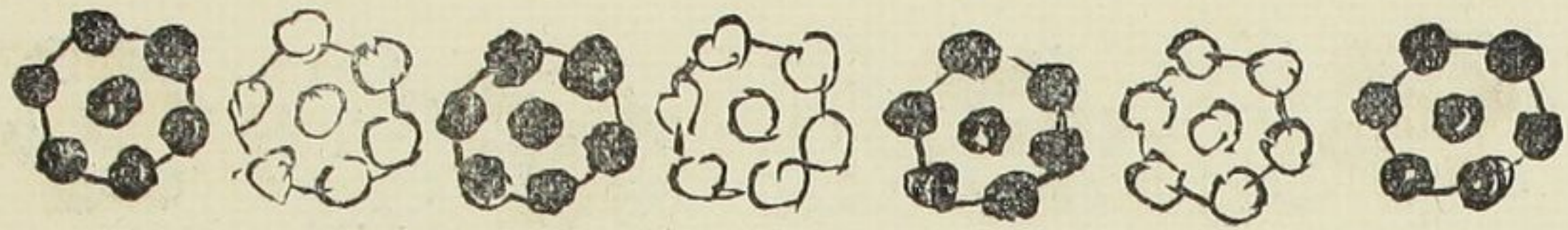


小鼓

鼓こそ今は仇なれ。それも悲しき生形見。

冬の夜の凍てし鼓をあふる手の瘦せしも
あはれ誰を戀ふらむ

伽羅まくらすると思ひてわれ借りぬ君が
大事の小鼓の箱



夜寒

置炬燵に友誼の布圍かけて、酒に夜を更かすも京なればぞ。千鳥のこえ悲しげに聴こえ、咽ぶがごときせせらぎの音。

京さむし鐘の音さへ氷るやと云ひつつ冷
えし酒をすすりぬ



京さむし鐘の音さへ氷るやと云ひつつ冷

大正五年九月廿五日印刷
大正五年九月廿五日發行

定價壹圓四拾錢

著作權所有



著者	中澤弘光
著者	長田幹彦
著者	吉井勇
發行者	北原鐵雄
發行者	東京市麻布區坂下町十三番地
發行者	東京市小石川區西江戸川町廿一番地
印刷者	細萱武四郎
印刷者	東京市小石川區西江戸川町廿一番地
印刷所	江戸川印刷株式會社

發行所

東京市麻布區坂下町十三番地
阿蘭陀書房
振替東京一四四八九番

東書店扱

東京市麻布區坂下町十三番地

8
1248
+

阿蘭陀書房新刊書

文學博士 森 鷗 外氏著及譯

詩集 沙羅の木

四六版天金
布製箱入

送定 料價
八 錢圓

近代獨逸詩歌の精粹を知らんとする人は本書を讀め
譯詩、デーメル、モルゲンステルン、クラアンド、ピヨルンソン、シヨツテリウス、
歌劇、オルフエウス
詩、十八篇、歌百首

文學博士 上 田 敏氏撰註

小

唄 (忽三版)

小形箱入
高雅美本

送定 料價
六拾五 錢

幽婉かきりなきわが民俗藝術の精華を見よ

我國古來の小唄中最も調べ高く哀切の情きはまりなき山家鳥蟲歌及吉原小唄總まくりを收
め周到なる註釋を附す。裝幀、外装なつかしきこと限りなし。

た
山家鳥蟲歌
吉原小唄

北原白秋氏著及畫
歌集 雲母集

四六判天金
箱入美本

定價壹圓五拾錢
送料十二錢

壯麗を極めたる日本空前の大歌集
「桐の花」以後の新作六百首と白秋氏の挿畫四葉(木版着彩版)を收む。裝幀華麗きはまりなく
清新比するにもものなし。

北原白秋氏著及畫

抒情
小詩

わすれなぐさ (並製)

小形布製
箱入美本

定價 六拾五錢
送料 六錢

最も懐かしく愛誦すべき抒情小詩選

白秋氏の小詩中殊に歌ひやすく調やさしき斷章小曲のかずくを取りあつめたれば懐かし
きこと限りなし。皮表紙上製既に第四版を賣りつくし新らたに清楚なる並製を發行し普く
同好の士に頒つ。

吉井勇氏著 北原白秋氏裝

歌集 未

練

小形天金
箱入美本

定價 六拾五錢
送料 六錢

哀艶きはまりなき戀歌四百餘首
内一 未練、戀愛三昧、新弄齊、戀さめ、あだびと、おもひで、浴泉秘事、うたがひ、わかれ、
紅燈拾遺、消息。

文學士 松村武雄氏著

印度文學講話

四六判
箱入美本

定價壹圓貳拾錢
送料 八錢

世界文學の一大奇蹟

梨俱吠陀の神話の幽玄、神呪吠陀の詩歌の瑰奇、ラーマーヤナ、マハーバラタの二大英雄詩
の雄麗、情熱火の如きシャクンタラー其の戀愛劇の梗概十數篇を收む。豊麗にして燦爛、
世界文學の一大驚異たる梵文學を知らんとする人は本書を讀め。

文學士 三上節造氏譯 石井柏亭氏畫

新譯 新アラビヤナイト

上卷、中卷既刊
下卷 近刊

小形美本

定價各九十五錢
送料各八錢

高級冒險探偵小説、英文學不朽の名著、

近代英文壇の巨匠スチヴンソンの一大傑作たる本書は蓋しロマンチズムの精華、英文學不
朽の名著にして興趣限りなき冒險探偵小説也。上卷には、「自殺俱樂部」及「一夜の宿」中卷には
「大王金剛石」及「マレトローア家の扉」を收む、三色版二葉、玻璃版五葉裝幀華麗きはまりなし。

アラビヤナイト

水野 葉舟氏 著

一年間の
手紙の實例

一日一信 (再版)

美小形箱入
本

定價 壹圓十錢
送料 八錢

現代的書簡文範。實際的書簡辭典

すべての人が日常必ず使用するべき書簡の題目を集め、高尚にして平易、流麗にして温雅現代に適切なるあらゆる文體を應用せる手紙、ハガキ、電報等の作例約二百通を收む。日常生活に必要なあらゆる要件を網羅したれば一面一貫せる興味ある讀物たると共に、機に應じ所要の作例を檢出し得べき實際的辭典也。

水野 葉舟氏 著

ハガキの書き方

(再版)

美小形本

定價 六拾五錢
送料 六錢

ハガキを巧みに使用するは社交の一大要件也。

□情味の豊かなハガキはどう書くか？ □感動を與へるハガキはどう書くか？ □機智に富むハガキはどう書くか？ □繪ハガキの使用法 □年賀招待等形式的なハガキはどう書くか？ 其他ハガキに關する禮節心得と適切なる作例を網羅す。

三宅克己氏 著

寫眞のうつし方 (三版)

美小形箱入
本

定價 七拾五錢
送料 六錢

簡單に手軽に誰れにもできる寫眞撮影の絶好手引

水彩畫家として名聲噴々たる三宅克己氏が自己の經驗を基とし何人にも了解し得る様最も懇切に最も丁寧な寫眞撮影法を説かれたるものにして寫眞器械の選擇より現像法、印畫法等一切の事項を網羅し洩らす處なし精巧寫眞版十二葉を挿入し一々撮影に關する解説と注意を與へられたり、眞に寫眞界空前の好著也

中澤 弘光氏、森脇 忠氏 著及畫

スケッチの書き方

目下印刷中

水彩、油繪、鉛筆、色鉛筆、ペン畫等スケッチの書き方を最も平易に講述せられたるものにして一々挿畫によりて説明し初學者にても直ちに了解し得べき空前の好著也

た
き
ま
の
か
き
の
か
き

書叢文歐スルア

外國文藝の理想的註釋叢書

I 青 平田禿木氏解題詳註 (コンラッド作)

春 (再版)

定價 四拾五錢
送料 四錢

現代英文壇の巨匠コンラッドの一大名篇

II 戸川秋骨氏解題詳註 (ギツシンゲン作)

ヘンリイ・ライクロフトの手記

定價 六拾五錢
送料 六錢

近代英文學中の一大珠玉、行ひすませる近代人の田園生活感想録

III 平田禿木氏解題詳註

近代英詩中の名作佳篇を收む。卷末に「韻律法」を附す

定價 五拾五錢
送料 四錢

IV 報 戸川秋骨氏解題詳註 (エマーソン作)

賞 論 エマーソンの代表的のエッセー。英學生必讀の名作

目下印刷中

装幀高華空前の小形美本

與謝野晶子氏著

新譯 徒然草 近刊

北原白秋氏著

歌集 雀の卵 近刊

北原白秋氏著

白秋小品 近刊

水野葉舟氏著
高村光太郎氏畫

小品 地上のもの 近刊

和田英作氏、藤島武二氏、長原孝太郎氏、石井柏亭氏、小杉未醒氏、津田青楓氏、
結城素明氏、橋口二葉氏、山本鼎氏、森田恒友氏、坂本繁二郎氏、織田一磨氏畫

現代名家圖案集 第一輯

近刊

近刊

丸

宗長之

可成り

祇園夜話	舞扇	鴨川情話	舞妓姿	小夜ちどり	祇園歌集
長田幹彦	長田幹彦	長田幹彦	長田幹彦	長田幹彦	吉井勇
千章館版	春陽堂版	新潮社版	新潮社版	新潮社版	新潮社版

福子
 梅子
 百鶴
 龍
 龍
 川
 加歌
 端
 長白
 詩
 人
 少
 女
 之
 歌
 集
 一
 百
 首
 終

